

筑波大学博士（言語学）学位請求論文

日本語における
連体修飾構造と名詞句の内包性に関する研究

三好 伸芳

2017 年度

目次

第1章 序論	1
1. 研究の背景	1
2. 目的と研究方法	3
3. 本論文の用語	8
4. 本論文の構成	10
第2章 先行研究および本研究の枠組み	13
1. はじめに	13
2. 先行研究	14
2.1. 寺村(1975-1978)、奥津(1974)	14
2.2. 加藤(2003)	16
2.3. 大島(2010)	19
3. 本論文の枠組み	22
3.1. 主節述語の分類	25
3.2. 被修飾名詞句の分類	35
3.3. 連体修飾要素の分類	42
4. おわりに	54
第3章 コピュラ文と連体修飾構造	56
1. はじめに	56
2. 先行研究	57
2.1. カキ料理構文と非飽和名詞	57
2.2. カキ料理構文の例外現象	61
3. 分析	64
3.1. 〈語彙的パラメータ補充〉と〈合成的パラメータ補充〉	65
3.2. 〈合成的パラメータ補充〉の意味的分類と名詞句の内包性	70
4. おわりに	75

第 4 章 存在文と連体修飾構造	77
1. はじめに	77
2. 先行研究	78
3. 分析	86
3.1. 〈状態変化存在文〉の記述的特徴	86
3.2. 〈状態変化存在文〉の理論的位置付け	91
4. おわりに	98
第 5 章 可能世界における属性を問題とする述語	100
1. はじめに	100
2. 先行研究	102
3. 分析	107
3.1. 連体修飾句の意味的な差異	107
3.2. 内包的述語のタイプ分け	111
4. おわりに	116
第 6 章 時間領域における属性を問題とする述語	118
1. はじめに	118
2. 先行研究	119
3. 分析	124
3.1. 知覚動詞の位置付け	124
3.2. 〈知覚補文〉と〈知覚連体修飾構造〉の対応関係	129
4. おわりに	135
第 7 章 結論	137
1. 本論文のまとめ	137
2. 本論文の意義	147
3. 今後の課題と展望	148
参考文献	152
本論文の各章と既発表論文の関係	157

凡例

本論文で使用する用例、および用例に付す記号の意味合いについて、予め断っておく。

- ・ 本論文で使用する用例

本論文は現代日本語を対象とした論考であり、用例の文法性や意味解釈については、筆者の内省が及ぶ範囲のものであると考えるが、展開される議論に応じて、複雑な言語的環境を設定する必要がある。従って、特に断りがない場合、分析に用いる用例は論文筆者の作例を用いる。先行研究からの引用や実例をデータとして掲出する場合は、その都度注記する。

- ・ 本論文で使用する記号

? …非文ではないが、文法的に不自然であることを示す。より不自然な場合には、「??」等とすることもある。

* …文法的に容認されない（非文である）ことを示す。

…論文中で問題にしている解釈ではないことを示す。従って、同じ文に付いたり付かなかったりすることがある。

その他、必要に応じて強調したい箇所に下線や波線を付すことがある。

第1章 序論

序論となる本章では、連体修飾研究の背景を概観した上で、先行研究のどのような点に課題が残されているのか、また、どのような目的を設定することでそれらの課題を克服できるのかという点について述べる。さらに、本論文が対象とする連体修飾の範囲や、本論文で用いる基本的な用語についても、本章で言及する。これまで、日本語の連体修飾構造は様々な観点から論じられてきたが、連体修飾要素の機能と被修飾名詞句の指示性の対応関係や、連体修飾構造が文解釈に与える影響など、未解明の問題が多く残されている。本論文では、「連体修飾要素の機能と被修飾名詞句の指示性との対応関係の体系化」と「連体修飾構造の意味的性質が文全体に与える影響の包括的記述」の2点を目的とし、これらの問題の解決を図る。

1. 研究の背景

日本語の連体修飾構造については、既に豊かな先行研究の蓄積がある。それは、連体修飾構造が、連体修飾要素と被修飾名詞句との複雑な意味関係から構成されるために、述語と名詞双方の分析に対し、多大な成果をもたらす領域と考えられてきたからである。連体修飾構造の研究においては、これまで以下のような類型を主要な分析の対象としてきた。

- (1) a. 遅刻した学生を職員室に呼び出した。 〈内の関係〉
b. 学生が遅刻した原因は電車の遅延だ。 〈外の関係〉
- (2) a. 言語学を専攻する学生はおとなしい。 〈制限的用法〉
b. 言語学を専攻する太郎はおとなしい。 〈非制限的用法〉
- (3) a. この会社の男性に会いにきた。
b. 学生の次郎は勉強で忙しい。
c. あのときの花子は立派だった。
d. この会社の社長はあの人です。

(1)はいわゆる「内の関係（同一名詞連体修飾）／外の関係（付加名詞連体修飾）」（寺村 1975-1978、奥津 1974）の対立、(2)は連体修飾節の「制限的用法／非制限的用法」の対立である。また、(3)は連体助詞「の」による修飾であり、修飾名詞句と被修飾名詞句の意味的關係に応じて、様々な解釈をもたらすことが知られる。

日本語における連体修飾構造の研究は、これらの構造に対する記述的觀察を通じ、英語等の他言語との対照を踏まえながら、意味論・語用論的な観点を主軸とした議論（寺村 1980、金水 1986b、加藤 2003、大島 2010）や、意味的な差異を統語構造に反映しようとした分析（井上 1976a、神尾 1983、三宅 1993）等、様々な理論的立場からの分析が進められている。

しかし、先行研究の知見をもってしても、依然として以下の 2 点について、課題として残されている、あるいは十分な検討がなされていないと考えられる。

- (4) a. 連体修飾要素の機能と被修飾名詞句の指示性は、どのような相関関係にあるのか。
- b. 連体修飾構造と主節述語を含む文全体の解釈との間に、どのような相互作用が見られるのか。

(4a)について、従来の分析では、連体修飾要素の機能を決定するのは「定／不定」といった被修飾名詞句の指示性であるとされてきた（井上 1976、金水 1986a 等）。しかし、実際にはこの一般化に当てはまらない例が存在する。これまでの連体修飾研究において、連体修飾要素の機能と被修飾名詞句の指示性の問題は独立に論じられるか、局所的な一般化に留まっており、言語事実を正確に捉えきれているとは言えない。従って、連体修飾構造を分析する際の前提として、連体修飾要素の機能と被修飾名詞句の指示性の相互関係を体系的に捉える枠組みを構築する必要がある。

(4b)については、そもそもこのような観点からの分析が先行研究において十分になされているとはいえない。連体修飾構造の分析は、それを包括的に扱った研

究（加藤 2003、大島 2010 等）においても、主として連体修飾要素と被修飾名詞句の関係に関する言及にとどまるか、文単位よりもさらに大きな語用論の問題として扱われることがほとんどである。しかし、主節述語を含む文全体との相互作用を無視して連体修飾構造の振る舞いを観察することは、その全容を必要十分に捉えたことにはならないだろう。本論文では、連体修飾構造の分析にあたって、連体修飾要素と被修飾名詞句の意味的な関係のみならず、主節述語をも射程に捉えたうえで、文全体の解釈に対してそれらがどのような影響を及ぼすのかを明らかにしなければならないと考える。

2. 目的と研究方法

上述の問題提起を踏まえ、本論文は以下の 2 点を目的とする。

- (5) a. 連体修飾要素の機能と被修飾名詞句の指示性との対応関係の体系化
- b. 連体修飾構造の意味的性質が文全体に与える影響の包括的記述

(5a)については、主として第 2 章で扱う。まず、連体修飾構造の体系化に関わる先行研究を取り上げ、批判的に検討する。さらに、先行研究の一般化では捉えきれない言語事実の観察を通じ、本論文における連体修飾要素の機能と被修飾名詞句の指示性に関する枠組みを示す。その際、本論文で重要になるのは、連体修飾要素の限定機能であり、その内実を明らかにするため、「制限的用法／非制限的用法」の区別に着目する。ただし、連体修飾要素の機能や名詞句の指示性といった問題は、主節述語の意味的性質をはじめとする言語環境を無視して分析することはできない。主節述語との対応関係については(5b)の課題として中心的に扱うことになるが、これらは必ずしも截然と切り分けられるものではないため、第 2 章においても必要な範囲で言及する。

(5b)については、第 3 章～第 6 章の個別事例の分析を通じてこの課題に取り組む。連体修飾構造の意味的性質が文解釈に及ぼす影響を分析的に取り出すためには、極力シンプルな文構造を対象とするのが望ましいと考えられる。従って、

本論文では、**コピュラ文**と**存在文**における連体修飾要素と被修飾名詞句の意味的特徴に注目する。これらはいずれも、名詞句の意味的性質を解明するために重要視されてきた構文環境である。また、連体修飾構造に含まれる被修飾名詞句の意味的性質は、主としてそれを項とする主節述語によって決定される。従って、言語環境が連体修飾構造に与える影響を明らかにするためには、名詞句の意味解釈に関わる述語の分類が必要である。そこで本論文では、いわゆる「**内包性** (intensionality)」を持つ述語を取り上げ、連体修飾構造との相互作用を明らかにしていく。ここではいわゆる形式意味論の理論的前提を踏まえ、可能世界と時間領域における内包性を問題とし、分析を加える。(5b)の問題については、上述のような、構文環境や述語の意味論の観点からアプローチしていくことになる。

本論文の目的と方法は概略以上のようなものとなるが、議論を進めていく上で、そもそもここで問題にする「連体修飾」とはどういった範囲のものであるのか、ということを確認しておく必要があるだろう。周辺のものまで含めれば、以下の例はいずれも「何らかの形で名詞を修飾している」と言える。

〈連体修飾節〉

- (6) a. この大学に通う男性を紹介された。
b. 彼が結婚しているという事実に驚いた。

〈連体修飾句〉

- (7) a. この家の女性に会いました。
b. 会社勤めの人は週末まで仕事をしている。

〈コト／ノ節〉

- (8) a. 花子が学校にきた の／ことを知っている。
b. 彼女が買ったのを私も買いたいと思った。

〈連体詞〉

- (9) a. その人は先週水族館でクラゲを見ていた。
b. いわゆる動く歩道で歩くのは苦手だ。

〈量化詞〉

- (10) a. 3 人のダンサーが飛び出してきた。
b. 学生はほとんど研究室で話していた。

しかし、この中にはかなり性質の異なるものが混在しており、全てを同じレベルで議論することは不可能である。そこで、本論文では、「名詞句を特定化する修飾」と「名詞句に何らかの性質・状態を付け加える修飾」を区別し、前者は狭義の限定に関わらないと考えられることから、後者のみを「連体修飾」として扱う。¹これらの修飾関係には、「何らかの性質・状態を付け加える修飾」が「どこの／どんな／どういった」といった疑問詞によって問えるのに対し、「特定化する修飾」はそのような問いかけの答えとして不適切であるという違いが認められる。²「どこの／どんな／どういった」という表現は、連体修飾の質的な側面を問う表現であり、「特定化する修飾」では、その応答として意味的に不十分だからである。

〈連体修飾節〉

- (6) a. どんな男性を紹介されたの？→この大学に通う男性
b. どういった事実にしたの？→彼が結婚しているという事実

〈連体修飾句〉

- (7) a. どこの女性に会ったの？→この家の女性
b. どんな人が仕事をしているの？→会社勤めの人

¹ 寺村(1980)は「この／その／あの／ある／あらゆる／いわゆる」等の「限定詞」について、「眼前にあるもの、あるいは話題に登場したものを、ただ単にそれと指すだけの限定、特定の仕方と、なんらかの性質、状態をもっているという点で限定する、いうならばある特性を持つ部分集合をとり出すという意味の限定の仕方の 2 通りが（少なくとも）ある」（寺村 1980: 227-228）と述べており、本論文と近い記述を行っている。ただし、寺村(1980)の指摘は上述の限定詞に限ったものであり、必ずしも連体修飾全般を対象として想定していないようである。また、金水(1986b)における「存在化」も、本稿における「名詞句を特定化する修飾」と近いと考えられる。

² 非制限的修飾を行っている場合には、連体修飾の性質に関係なく容認されなくなってしまう。しかし、これは非制限的修飾が疑問のスコープに入らないためで、本論文の主張に影響はない（非制限的修飾と疑問のスコープについては三宅(1993, 2011)を参照されたい）。

〈コト／ノ節〉

(8') a. ? どんなことを知っているの? →花子が学校にきたこと

b. ? どんなのを買ったの? →彼女が買ったの

〈連体詞〉³

(9') a. ?? どんな人がクラゲを見ていたの? →その人

b. ?? どんな動く歩道が苦手なの? →いわゆる動く歩道

〈量化詞〉

(10') a. ?? どんなダンサーが飛び出してきたの? →3人のダンサー

b. ?? どんな学生が話していたの? →ほとんどの学生

この基準に基づけば、(9')(10')の〈連体詞〉〈量化詞〉は明らかに「何らかの性質・状態を付け加えている」とは呼べないものであり、本論文における「連体修飾」の枠からは外れることになる。(9')(10')に見られる「その」や「ほとんどの」といった表現は、原則として名詞句の存在量を規定し、特定化するのみであると考えられる。⁴また、(8')〈コト／ノ節〉の例についても、「どんな」で問うことはやや不自然であり、「何／どれ」等で尋ねる方が容認しやすい。(8a)の「こと」は形式的には名詞と言えるし、(8b)の「の」は「本」等の普通名詞と置き換えることが可能である等、補文化辞とは見なせない側面はあるが、修飾を受ける対象が高度に抽象化されているために、「性質・状態」そのものを提示している（つまり、何らかの対象を限定しているわけではない）とも言える。

結局、本論文で「連体修飾」と見なすのは、(6)(7)（および(10a)の一部、注4参照）であり、「形態的に連体修飾であることが明確であり、かつ、名詞句に対

³ ここで意図しているのは、全ての連体詞が「特定化する修飾」しか行えないということではない。例えば従来連体詞とされる「大きな」という修飾を受けた連体修飾構造は、「どんな」といった疑問詞で尋ねることが可能である。従って、ここでは「連体詞」という品詞論的な区分を問題にしているのではなく、あくまでも「特定化する修飾」を行う連体成分（その典型の一つとしての「連体詞」）を問題にしているという点に注意されたい。

⁴ 「3人のダンサー」を「3人組のダンサー」のように解釈する場合は、単に存在量を規定するという意味になっておらず、「どんなダンサー？」と問うことも可能なので、この限りではない。なお、「いわゆる」などの表現には副詞的な意味合いも含まれていると考えられるが、ここでは問題にしない。

し何らかの性質・属性を付け加えるもの」と規定される範囲のものになる。本論文の目的は連体修飾要素の被修飾名詞句に対する限定機能から、それらの対応関係を体系化することであり、その意味でも「特定化する修飾」を対象とすることは適切でないと考えられる。

ただし、文脈次第では、上述の「特定化する修飾」と「何らかの性質・状態を付け加える修飾」を、形式の上で明確に分けられない場合もある。

- (11) a. 3人の男性がいる中で、スーツを着た男性に声をかけた。
b. いくつか他に気になるものもあったが、誕生石のアクセサリをプレゼントした。
- (11') a. 3人の男性がいる中で、その男性に声をかけた。
b. いくつか他に気になるものもあったが、こっちのアクセサリをプレゼントした。

(11)で用いられている「スーツを着た／誕生石の」といった連体修飾要素は、形式的には連体修飾節や連体修飾句であると言わざるをえない。しかし、機能的には、「何らかの性質・状態を付け加える修飾」というよりむしろ、「特定化する修飾」に近い。実際に、(11)で表現しようとしている意味は、連体修飾要素を「その／こっち」といった指示表現に置き換えた(11')と極めて類似している。(11)では、波線部「3人の男性の中で／いくつか他に気になるものもあったが」のように前提集合が導入されることで、「スーツを着た／誕生石の」が指示表現相当の強量的な限定機能を担っている。言い換えれば、「性質・状態」の表現を手掛かりとし、個々の指示対象や部分量に言及することで、結果的に特定を行うことが可能になっているのである。⁵

(11)のような強量的な限定の在り方は、特定の対象を問題にする環境にお

⁵ 逆に、本来的に「特定化する修飾」を行うものが、「何らかの性質・状態を付け加える修飾」を行うこともある。「太郎はいつも笑顔だが、その太郎が今日は落ち込んでいる」における「その」は、定指示名詞句「太郎」に付加されていることから示唆されるように、「特定化する修飾」ではないと考えられる。

いても被修飾名詞句の限定が可能であるという点で重要であり、本論文中でも第2章等で部分的に言及する。しかし、(11)の連体修飾要素は機能的に「特定化する修飾」に相当するものであるため、本論文で「連体修飾」と言う場合、原則として(11)のような例は含めないでおく。

また、次のような連体修飾構造は「どこの／どんな／どういった」といった疑問詞によって問えないという意味で、「何らかの性質・状態を付け加える修飾」であると言えるが、「特定化する修飾」とも異なっている。

(12) a. この作品の作者に会ってきました。

b. 彼の瞳は綺麗だった。

(12') a. ?どんな作品の作者に会ってきたの?→この作品の作者

b. ?どんな瞳が綺麗だったの?→彼の瞳

(12)に挙げた「作者／瞳」といった被修飾名詞句は、いわゆる「非飽和名詞」や「譲渡不可能名詞」等と呼ばれる名詞の類型(cf. 西山 1990、西山(編) 2013)であり、その連体修飾要素「この作品の／彼の」は、これらの名詞が持つ意味的な空所を埋める機能を持っている。このようなタイプの連体修飾要素は(12')のように「どんな」という疑問詞の答えとして不適切であることから、「何らかの性質・状態を付け加える修飾」とは言えない。一方で、被修飾名詞句が持つ意味的な空所を埋めているという点で、「特定化する修飾」とも異なっていると考えられる。このような連体修飾構造の位置付けについては、現在も様々な議論がなされており、統一的な見解は得られていない。本論文では、(12a)のような連体修飾構造に一部のコピュラ文の成立と密接な関わりが認められることから、(5b)の目的に照らしてこのような連体修飾構造も分析の対象としておく(詳しくは第3章で取り扱う)。

3. 本論文の用語

ここで、本論文で用いる主要な用語について、具体例とともに確認しておく。

既に一部の用語については断りを入れずに使用しているが、本論文では、次のような意味合いで使用する。

(13) 本論文で使用する主な用語⁶

連体修飾要素 ……連体修飾節と連体修飾句をまとめた連体成分。

被修飾名詞句 ……連体修飾要素を受ける名詞（句）。

連体修飾構造 ……連体修飾要素と被修飾名詞句を合わせた全体。

主節述語 ……被修飾名詞句を直接の項とする述語。

(14) a. 言語学を専攻する学生はおとなしい。 ((2a)の再掲)

b. 言語学専攻の学生はおとなしい。

c. 言語学専攻の学生と面識がある人に仕事を頼んだ。

名詞を修飾する表現は、連体修飾節と連体修飾句を区別しない場合には、〈連体修飾要素〉という用語を用いる。(14)の「言語学を専攻する／面識がある」（＝連体修飾節）と「言語学専攻の」（連体修飾句）は、いずれも「連体修飾要素」である。言い換えれば、「連体修飾要素」という用語を用いている場合は、明示されていなくとも「節」と「句」双方に当てはまるということを念頭に置いているということであり、区別する必要がある場合は、「連体修飾節／連体修飾句」という用語を使用する。また、日本語において「赤い花」における「赤い」を節と見なすかどうかといった議論もあるが（cf. 寺村 1980: 235-237）、本論文では特に区別しないで「連体修飾要素」に含むものとする。

〈被修飾名詞句〉は、(14)の二重下線部「学生／人」が相当する。神尾(1983)、三宅(1993)等の統語的な研究では、制限的修飾の場合に主要部となる名詞は単独で NP を構成しないという指摘もあるが（従って、(14ac)の「学生／人」を被修

⁶ 「連体修飾節／被修飾名詞句」については、先行研究の理論的な立場により、「関係節／主名詞」という用語が用いられることもある。当該の文献に言及する際、本論文においても「関係節／主名詞」という用語を使用することがあるが、特に区別はしない。

飾名詞句と呼ぶのは、誤解を招く可能性もある)、本論文でこの区別は問題にならないため、まとめて「被修飾名詞句」とする。

「連体修飾要素」と「被修飾名詞句」を合わせた全体の構造を、本論文では〈連体修飾構造〉と呼ぶ。このような用語法は、早くは奥津(1974)が連体修飾節と被修飾名詞句を含む全体を「連体修飾構造」と呼んでいた他、加藤(2003)も「関係節構造」という類似の表現を使用している(ただし、先行研究が連体修飾節を念頭に置いてこの用語を使用しているのに対し、本論文においては「連体修飾要素(＝連体修飾節 or 連体修飾句)」を念頭に置いている点に注意されたい)。例えば(14c)においては、「言語学専攻の学生／言語学専攻の学生と面識がある人」が「連体修飾構造」である。

〈主節述語〉は、本論文では「被修飾名詞句を直接の項とする述語」という意味合いで用いる。従って、(14a)の「おとなしい」、(14c)の「頼む」といった、(従属節に対する)主節という従来の意味での「主節述語」はもちろんのこと、(14b)の「おとなしい」(従属節が存在しない)、(14c)の「(面識が) ある」(それ自体が埋め込み節)も、「主節述語」と呼ぶ。

4. 本論文の構成

本論文は、以下のような構成となっている。

第1章 序論

第2章 先行研究および本論文の枠組み

第3章 コピュラ文と連体修飾構造

第4章 存在文と連体修飾構造

第5章 可能世界における属性を問題とする述語

第6章 時間領域における属性を問題とする述語

第7章 結論

第1章(本章)では、本論文がどのような問題意識のもとで研究に取り組み、

それらの課題に対しどのような方法によって解決を試みるのかを示す。本論文で扱う対象の範囲や主要な用語についても、本章で言及する。

第 2 章では、連体修飾構造に関する主要な先行研究を概観し、批判的に検討を加える。さらに、本論文における基本的な連体修飾構造の枠組みを示し、筆者がどのような分類のもとで連体修飾構造を捉えようとしているのかをまとめる。まず、「外延／内包」という概念に基づき、項となる名詞句に対してどのような意味的性質を付与するかという観点から、主節述語を大きく 2 つに分ける。続いて、個体やイベントの量化が可能であるかという観点から、被修飾名詞句を 3 つのタイプに分類する。最後に、どの被修飾名詞句を限定可能であるかという観点から連体修飾要素を分類し、その意味的性質が、主節述語を介し、被修飾名詞句の指示性と一定の対応関係にあるということを体系的に示す。

第 3 章と第 4 章では、連体修飾構造が文全体の解釈にどのような影響を及ぼすのかを明らかにするため、コピュラ文と存在文を対象として分析を行う。第 3 章では、特定の連体修飾要素の機能によって、例外的に指定文およびカキ料理構文が構成できること、加えてそのような連体修飾要素と名詞句の内包性の問題が密接な関わりを持っていることを示す。第 4 章では、連体修飾要素と被修飾名詞句の相互作用により、従来記述的に指摘のなかった状態变化的な解釈を持つ存在文が生じることを示す。そして、そのような存在文が観察されることは、本論文の連体修飾構造と名詞句の内包性に関する枠組みに基づけば、ごく自然に説明されることを明らかにする。

第 5 章と第 6 章では、主節述語と連体修飾構造との相互作用を明らかにしていく。第 5 章では、名詞句の可能世界における在り方を問題にする述語を取り上げる。特定の述語と共起した際、連体修飾要素は、意味的な限定が可能であるかという点に関して極めて特異な振る舞いを見せるが、そのような差異が主節述語のもたらす内包性の違いによって説明されると主張する。また、第 6 章では、特に名詞句の時間領域における在り方を問題にする述語を取り上げる。ここでは、知覚動詞を時間領域の現れ方を専門に言及する述語類型であると仮定し、その補部に現れる連体修飾要素が、時間領域における限定を行っていると主張

する。

終章である第 7 章では、ここまでの内容をまとめ、本論文全体の総括を行う。本論文の成果がもたらす学術的な意義についても本章で取り上げる。最後に、残された課題と今後の展望を述べる。

第2章 先行研究および本論文の枠組み

第2章では、先行研究の検討をしたのち、本論文の理論的な前提となる枠組みを示す。本論文の枠組みの提示に当たり、主節述語をその意味的な性質から〈外延的述語〉と〈内包的述語〉の2タイプに大別する。また、従来「定／不定」といった概念で捉えられてきた被修飾名詞句を、量化の可能性から〈可量化名詞句〉〈準可量化名詞句〉〈不可量化名詞句〉の3タイプに分類する。従来の分類で「定指示名詞句」とされる〈準可量化名詞句〉と〈不可量化名詞句〉は、〈内包的述語〉がもたらす〈内包的文脈〉によって、制限的な解釈が得られる。さらに、従来「制限的用法」と捉えられてきた連体修飾要素を〈範疇限定〉〈時間限定〉〈可能世界限定〉の3タイプに分類する。〈準可量化名詞句〉は〈時間限定〉及び〈可能世界限定〉によって制限的な修飾が可能であるが、〈不可量化名詞句〉は〈可能世界限定〉のみによって制限的な修飾が可能である。このように、本論文では、これまで体系的に捉えられてこなかった被修飾名詞句の分類と連体修飾要素の分類が、一定の意味的対応関係の下で体系を成していると主張する。

1. はじめに

本章では、連体修飾要素の機能と被修飾名詞句の指示性との対応関係の体系化を主な目的とする。まず、連体修飾構造を扱った主要な先行研究を概観し、そこで得られた知見と残された課題について言及する。続いて、本論文における連体修飾要素、および被修飾名詞句の理論的枠組みと基本的な分類を示す。

ただし、連体修飾要素と被修飾名詞句との関係を主眼に置くとしても、主節述語の意味的な性質が与える影響を完全に無視することはできない。主節述語が連体修飾構造に及ぼす影響や、連体修飾構造が文全体の解釈に与える影響については、第3章以下の各章で詳細に議論するが、本章でも必要な範囲で主節述語の意味的な分類に言及することになる。

2. 先行研究

以下、連体修飾構造に関する主要な先行研究を概観していく。ここで取り上げるのは、連体修飾構造を体系的に取り扱った研究や、連体修飾要素の機能と被修飾名詞句の指示性との対応関係を明らかにするという本章の目的に照らして重要と考えられる研究であり、必ずしも網羅的に文献を取り上げているわけではない。個別の論点に関して重要な先行研究には、その都度触れていく。

2.1. 寺村(1975-1978)、奥津(1974)

寺村(1975-1978)及び奥津(1974)が、「内の関係／外の関係」、「同一名詞連体修飾／付加名詞連体修飾」という分類を立て、日本語の連体修飾節について論じていることは、よく知られている（以下、「内の関係／外の関係」に統一する）。

- (1) 内の関係 …被修飾名詞句が連体修飾節の用言に対して補語の関係にあるもの。¹

外の関係 …被修飾名詞句が連体修飾節の用言に対して補語の関係にあるとは言えないもの。

〈内の関係〉

- (2) a. 君がそのとき聞いた足音
b. さんまを焼く男

〈外の関係〉

- (3) a. 誰かが階段を降りてくる足音
b. さんまを焼く匂い (以上、寺村 1975: 167)²

(2)の内の関係の連体修飾の場合には、「君が足音を聞いた／男がさんまを焼く」のように、被修飾名詞句を連体修飾節の内側に移すことが可能であるのに対し、

¹ 議論の都合上、それぞれの概念は本論文の用語によって規定している。

² 引用のページ番号は寺村(1992)による。以下同様。

外の関係である(3)ではそのような操作をすることができない。

寺村(1975-1978)と奥津(1974)は、日本語の連体修飾構造の成立を可能にする原理的な説明を与えた研究として極めて重要であり、その後の研究に与えた影響は甚大である。³本論文においても、日本語の連体修飾構造の成立を説明する枠組みとしては、基本的にこれらの研究の成果を受け容れていく。

一方で、本論文の問題意識からすれば、なお課題が残されていると言える。最も重要な問題は、「内の関係／外の関係」という区別が、連体修飾要素の機能を捉えるという目的から見た際に、必ずしも対称的な関係になっていないという点である。寺村(1975: 197)は、「内の関係／外の関係」について「どちらのタイプでも、修飾部が底の名詞を何らかの意味で特定化し、限定していることに違いはない」と述べた上で、次のようにまとめている。

これを、一般的には次のように言うことができるだろう。「外の関係」においては、修飾部は底の名詞の内容を表す、または少なくともその内容に関わるものであるのに対し、「内の関係」では、修飾部は、底の名詞を「特定」するには違いないけれども、その内容には関わらない、と。つまり、構文的に「内の関係」で結びついている連体修飾構造にあつては、意味的には、修飾部は底の名詞を「付加的」に修飾しているに過ぎないが、「外の関係」にあつては、底の名詞を「内容補充的」に修飾している、ということになる。
(寺村 1975: 197)

外の関係については、「内容補充的」であるとして積極的に規定を行っているのに対し（厳密には、内容補充は「ふつうの内容補充」と「相対的補充」に分けられるが、ここでは措いておく）、内の関係については「付加的」と述べるのみで、被修飾名詞句に対してどのような限定作用を持っているのかが必ずしも明

³ 寺村(1975-1978)は、それまでの日本語研究が、事実上、内の関係にのみ注目してきたのに対し、外の関係の連体修飾構造を認めることが、日本語を分析する上でも、対照研究を行う上でも重要であると説いている。

らかではない。

これは、「内の関係／外の関係」という分類が本質的に抱える問題であると言える。外の関係は、被修飾名詞句の側に、内容補充を可能にする意味的な空所が存在することが成立条件に含まれており、「底の名詞の内容を表す」という機能面での規定が可能である。しかし、内の関係の場合は、「被修飾名詞句が連体修飾節の用言に対して補語の関係にある」（つまり、連体修飾要素の側に意味的な空所がある）と規定されているため、被修飾名詞句に対してどのような限定作用を持っているのかとは、そもそも独立した概念なのである。⁴

以上の議論を踏まえると、「内の関係／外の関係」という観点は、連体修飾構造が成立するための構文的な根拠を説明する際には有益なものとなるが、連体修飾要素がどのような機能を担っているか、という問題とは別のレベルの概念であると言わなければならない。本論文においては、連体修飾構造を成立させる枠組みとして「内の関係／外の関係」という分類を受け容れるが、それは議論の前提としてであって、この概念自体の内実を問い直すことはしない。

2.2. 加藤(2003)

加藤(2003)は、連体修飾に限らず、連用修飾をも射程に含めた、大部の日本語修飾構造論である。加藤(2003)では、日本語の関係節（本論文における「連体修飾節」）が成立するための意味的な制約として「**補集合の活性化**」があるとして、次のような興味深い一般化がなされている。

(4) 関係節構造の分別指示条件

関係節構造が成立するには、当該の関係節構造が指示するものがそれによって指示されないものと容易に区別でき、その関係節構造の意味上の補集合に当たる情報が活性化されていなければならない。（加藤 2003: 280）

⁴ なお、奥津(1974: 210-216)は、「日本語の連体修飾節は全て非制限的である」という思い切った主張を展開しているが、「心の優しい人が好きです」といった連体修飾要素を非制限的と捉えること（「心の優しい太郎が好きです」における連体修飾要素と機能的に同質であると見なすこと）は、やはり難しいように思われる。

- (5) 赤い服 (加藤 2003: 278)
- (6) a. ??? 降る雨 (加藤 2003: 279)
- b. ??? 吹いた風 (加藤 2003: 279)
- (7) *青いのがいいネクタイ (加藤 2003: 278)

加藤(2003)によれば、(5)の「赤い服」に対し、(6)の「降る雨／吹いた風」が成立しないのは、「降らない雨／吹かなかった風」のような補集合の活性化が生じないからである。また、久野(1973)で不適格とされていた(7)のような例が容認されないのも、(4)の条件によって説明が可能であるとする。

加藤(2003)の示した(4)は、あらゆる関係節に対して適用される制約である。すると、直ちに問題になるのは、定指示名詞句と結びついた非制限的な関係節の場合に、(4)の条件がどのように解釈されるのかという点であろう。非制限的な関係節は、一般的に被修飾名詞句を意味的に限定しないとされており、加藤(2003)の言う「補集合の活性化」が起こっているとは考えにくく、関係節そのものが成立しないことを予測してしまうからである。

このような問題について、加藤(2003)は具体例とともに次のように述べている。

- (8) a. 1998 年 11 月に来日したクリントン大統領
- b. クリントン大統領

先に検討したようにこれらは、いずれもある特定の人物を指すことでは変わりがない。これは、理論上「1998 年 11 月に来日しなかったクリントン大統領」という補集合が想定されるものの、それは現実の世界に関する知識によって排除されるからである。さきに見た総称を表す名詞の場合は、補集合の想定を禁止しているのであるが、この場合は想定されるものの、それが世界知識によって排除されているのである。 (加藤 2003: 284-285) ⁵

⁵ 引用文において、「さきに見た総称を表す名詞の場合」というのは、「日曜日に何をしようかと家族で相談した結果、今回は映画を見ることにした」のような金水(1986b: 607)の例を指してい

加藤(2003)は(8a)のような例について、「世界知識によって排除されているが、補集合は想定できる」ために、関係節が成立しているとする。しかし、「1998 年 11 月に来日したクリントン大統領は、その日のうちに首相と会談した」のような文において、「1998 年 11 月に来日しなかったクリントン大統領」なる補集合が想定されているのかどうかは、直観的には疑わしいと言わざるをえない。(6ab)「???降る雨／???吹いた風」のような例を「補集合の活性化」が起きていないとして排除しつつ、(8a)「1998 年 11 月に来日したクリントン大統領」は「世界知識によって排除されているが、補集合は想定できる」ために成立するのだとする分析は、用例によって恣意的に(4)の制約を適用していることになるのではないだろうか。

加藤(2003)はまた、固有名詞に対して補集合が想定される場合として、以下のような例を挙げる。

- (9) a. 僕は髪の短い幸子が好きだ。
- b. 冷たい雨が降る鎌倉は風情がある。
- c. 野球帽をかぶった吉岡君はカブスのソーサ選手に似ている。

(加藤 2003: 285)

例として(9a)を取り上げると、この文の下線部は「髪を短くしたときの幸子」などと解釈されており、「髪が長い幸子」などの補集合が想定できる。(9bc)の例文も基本的には同質のものと考えてよいだろう。

(9)のような例は、固有名詞を被修飾名詞句としながら、連体修飾要素が制限的に解釈されている。このような例文について、「補集合の活性化」が生じているとするのは何の問題もない。問題なのは(8a)のような、「補集合の活性化」が生じているとは言えない非制限的な関係節（あるいは、制限的か非制限的か判断できない関係節）についても、(4)を適用し、「補集合の活性化」が起きていると

るが、ここでの議論と直接関係ないので触れないでおく。

する点である。

本論文においては、「補集合の活性化」という意味的作用が関係節の制限的解釈を成立させる上で有効に働いていると考え、その点で加藤(2003)の分析を引き継ぐ。しかし、非制限的な解釈の場合にも「補集合の活性化」が生じていると考える必要は、原理的にないを考える。本論文の目的からすれば、(9)のような現象については単に「補集合の活性化」が起きているデータとして捉えるだけではなく、むしろどのような要因によって固有名詞の「補集合の活性化」が生じているのかを意味論的に明らかにすることの方が重要である。

2.3. 大島(2010)

大島(2010)は、日本語の連体修飾構造を体系的・網羅的に扱った研究である。この論考の中で、大島(2010)は連体修飾要素の意味的な機能に次のような 2 つのタイプを想定している。

(10) 集合限定 …「“X” を満たすか否かによって事物の集合から 1 つの部分
集合を切り出すこと」 (大島 2010: 35)

属性限定 …「事物の複数の属性の中からある属性を取り出す限定」
(大島 2010: 37)

〈集合限定〉

- (11) a. このワークステーションを使える人を探している。
b. このワークステーションを使える、そういう条件に合う人を探している。

〈属性限定〉

- (12) a. このワークステーションを使える人が隣の研究室にいる。
b. ある人が隣の研究室にいる。その人はこのワークステーションを使える。
(以上、大島(2010: 37-38))

(11a)は、「このワークステーションを使える」という属性を有するかどうかによって「人」の部分集合を取り出しているという解釈（＝(11b)の解釈）が可能であるため、集合限定に分類される。一方、(12a)は、あらかじめ定まった指示対象を持つ「人」について、そのさまざまな属性の中から「このワークステーションを使える」という属性を取り出しているという解釈（＝(12b)の解釈）になるので、属性限定に相当する。

大島(2010)の分類は、名詞句が示す集合を限定するという、従来の意味における限定（＝集合限定）に加え、名詞句が取りうる属性の一部を表示するという限定（＝属性限定）を認めている点で、注目に値する。「名詞句が取りうる属性の一部を取り出すことで、対象を限定する」という捉え方は、本論文でも部分的に踏襲していくことになる。

ただし、このような分類に問題がないわけではない。「集合限定／属性限定」という概念は、大島(2010)が独自に導入したものであるが、「制限的用法／非制限的用法」という、従来の意味的な分類とどのような対応関係にあるのかについて、大島(2010)は必ずしも明確に述べていない。そのため、「集合限定／属性限定」という概念自体が、本質的にどのような限定機能を指しているのか、判然としないのである。⁶

例えば大島(2010, 2014)では、属性限定として次のような例を挙げている。

（下線＝筆者）

(13) a. 漱石が書いた『坊ちゃん』は今なお愛読されている。

b. 幼くして両親を亡くした山田氏は苦勞して大学まで進学した。

（以上、大島 2010: 36）

(14) a. 佐藤さんはそれでなくても顔色が悪いのだけれど、横になった佐藤さんはますます重病人のように見えた。

⁶ 大島(2010)の元となった論文である大島(1988)では、「集合限定／属性限定」に相当する概念について「制限的用法／非制限的用法」と「全く異なるものである」（大島 1988: n30）と述べているのに対し、その後の大島(2014: 160)では「制限的修飾（集合限定）」「非制限的修飾（属性限定）」という表記が見られる等、やや混乱する用語の使用が見られる。

- b. 吉川さんは舞台にたつと非常に存在感があるけど、普通に座った吉川さんはとても華奢に見える。 (以上、大島 2014: 161)

(13a)のような例について、大島(2010: 37)は、「部分集合を切り出す」という意味においての“限定”のはたらきはない」とし、「主名詞『坊ちゃん』が、『ホトトギス』に掲載された」「青年教師が主人公である」などさまざまな属性をもっている中から、「漱石が書いた」という属性を取り出している」という点で、属性限定を行っているとする。これは(13b)も同様である。以上の例は、従来の分類ではいずれも非制限的用法に分類されるだろう。一方、(14ab)のような例文について、大島(2014: 162)では「上の例のような修飾節が表すのは一時的状態だが、主名詞の指示対象があらかじめ定まってい」るために、属性限定（非制限的修飾）と見なしている。

しかし、(14)の各例は、加藤(2003)が固有名詞において「補集合の活性化」が生じているとして挙げた(9)の例に近く、従来の制限的用法に相当すると考えるべきであろう。実際に、(14)は連体修飾要素を取り除くと文意が変わってしまう。

- (14) a. #佐藤さんはそれでも顔色が悪いのだけれど、佐藤さんはますます重病人のように見えた。
b. #吉川さんは舞台にたつと非常に存在感があるけど、吉川さんはとても華奢に見える。 (以上、大島 2014: 161)

以上のことを踏まえると、大島(2010)が提出した属性限定という概念は、従来の「制限的用法／非制限的用法」という概念を含みこむ、より広い概念だということになる。すなわち、属性限定には「補集合の活性化」が起こっている場合もそうでない場合もあるということであり、連体修飾要素の機能を体系的に整理するという本論文の立場からすれば、「集合限定／属性限定」といった概念をそのまま適用することはできない。

3. 本論文の枠組み

ここからは、先行研究に対する検討を踏まえ、本論文の立場から連体修飾要素の機能と名詞句の指示性との対応関係を体系化していく。連体修飾要素の機能を明らかにするためには、その中心的な機能であるとされる「限定」という操作の内実を捉えなおす必要がある。そこで、本論文では「制限的用法」と「非制限的用法」の区別、中でも前者の限定機能に注目する。まず、本論文の枠組みにおいて重要な意味合いを持つ、「制限的用法／非制限的用法」という区別について確認しておく。

(15) a. 言語学を専攻する学生はおとなしい。

b. 言語学を専攻する太郎はおとなしい。

(15') a. #学生はおとなしい。

b. 太郎はおとなしい。

(15a)が「制限的用法」、(15b)が「非制限的用法」の例である。(15a)では、「学生」の中から「言語学を専攻する」という性質を持つものを取り出しているが、(15b)では「太郎」の中から「言語学を専攻する」という性質を持つものを取り出しているわけではない。すなわち、(15a)では被修飾名詞句「学生」が意味的に限定されているのに対し、(15b)「太郎」では、限定を受けていないと言える。(15ab)の差異は連体修飾要素を取り除いた際に顕著になり、(15'a)では、文意が大きく変わってしまうのに対し、(15'b)ではそれほど変化がない。これは、(15b)の連体修飾要素に被修飾名詞句を限定する機能がないからであると考えられる。

以上の観察を踏まえ、本論文では〈制限的用法〉と〈非制限的用法〉を次のように規定する。

(16) 〈制限的用法〉と〈非制限的用法〉

〈制限的用法〉……被修飾名詞句が表示する対象または属性から、その一部を取り出す修飾。

〈非制限的用法〉…被修飾名詞句が表示する対象または属性に対し、何らかの背景的な情報を付け加える修飾。

(16)のような規定の仕方は、寺村(1984)、金水(1986b)、三宅(1993, 2011)等の先行研究と、基本的には同じ立場に立つものである。ただし、「被修飾名詞句が表示する対象または属性」となっている点は、本論文独自のものであり、注意を要する。このような規定になっているのは、本論文が「名詞句で表示された指示対象」と「名詞句で表示された属性そのもの」が問題にされる環境を分けて考えるためであるが、詳細な議論は 3.1 節で行う。

「制限的用法／非制限的用法」を分ける要因は、従来、被修飾名詞句の指示性（「定／不定」）であるとされてきた。井上(1976a)および金水(1986a)は、それぞれ次のように述べている。

(17) a. 一般に、唯一の指示物を持つと考えられる名詞句（たとえば、「地球」「太陽」や固有名詞）が主名詞の場合は、非制限用法に解釈される
(井上 1976: 167)

b. 連体構造において、その主名詞がすでに〈定〉であれば、その連体修飾節は〈非限定的〉(non-restrictive)である。〈定〉でなければ、〈限定的〉(restrictive)である⁷ (金水 1986a: 488)

先の(15ab)のような対立が存在することから、これらの指摘は一定の妥当性を有しているように思われる。⁸しかし、(17)の一般化には反例が存在する。

⁷ 名詞句に関する形態的な表示に乏しい日本語においては、研究者により「定／不定」といった概念が様々に定義されている。金水(1986a: 604)においては、「定指示は指示対象である個体を「聞き手」が既に「知っている」場合であり、不定指示はそうでない場合である」と規定されている。

⁸ (17)については、三宅(1993)が同趣旨の指摘をしているほか、大島(2014)も「同定」という概念を用いて、固有名詞のように被修飾名詞の指示対象がすでに定まっている（同定が完了している）場合には、連体修飾節が非制限的になると主張している。

(18) a. 教室にいる太郎はおとなしい。

b. 花子から見た彼はおとなしい。

(18') a. #太郎はおとなしい。

b. #彼はおとなしい。

(18a)は、(15b)の連体修飾要素のみを置き換えた例、(18b)は連体修飾要素と修飾名詞句を置き換えた例である。例えば(18a)は、「太郎」は「教室にいるときに限っておとなしく、それ以外の状況では必ずしもおとなしくない」という意味であり、制限的に解釈することができる。これは、加藤(2003)が固有名詞を被修飾名詞としながら「補集合の活性化」が起きているとしていた例の類例であると考えられる。一方(18b)も、「彼」は「花子の視点で捉えた場合に限っておとなしく、他の人からはおとなしく見えていない」という解釈が可能であり、連体修飾要素が制限的になっている。以上のことは、連体修飾要素を取り除いた(18')との比較からも明らかであろう。つまり、(18)のような環境において、井上(1976a)および金水(1986a)の一般化は当てはまらないということになる。⁹

(15b)と(18a)において対立しているのは連体修飾要素のみであるので、連体修飾要素の意味的性質が「制限的／非制限的」を分ける要因になっていることは疑いようがない。しかし、問題はそれだけにとどまらない。

(19) a. 教室にいる太郎に話しかけた。(cf. 太郎に話しかけた。)

b. ??花子から見た彼に話しかけた。

(19)は(18)の主節述語を「話しかける」に置き換えた例であるが、このような環境では(19a)は非制限的にしか解釈できない。また、(19b)の連体修飾構造はそもそも同様の環境に現れることが難しく、(19a)とは意味論的に異なったもので

⁹ 井上(1976a: 167)は、「彼が覚えている銀座は、もっと情緒豊かな街だった」というような例を挙げて、「固有名詞やその他の名詞句が普通名詞句化」されていると述べているが、「銀座」が果たして普通名詞句といえるのか、また、どのような場合に固有名詞が制限的修飾を受けるのかという問題については言及がなされていない点で、いずれにせよ問題は残る。

あることを示唆している。

ここまでの観察を総合すると、連体修飾要素の機能を明らかにするためには、被修飾名詞句（(15ab)の対立）・連体修飾要素（(15b)と(18a)の対立）・主節述語（(18)と(19)の対立）という3つの要因の総体を観察しなければならない、ということが明らかになる。以下の節では、これらの要因ごとに連体修飾要素の解釈に与える影響を分析し、連体修飾要素の機能と被修飾名詞句の指示性との対応関係を体系的に明らかにしていく。

3.1. 主節述語の分類

議論の都合上、まず主節述語の分析を行う。主節述語を含む文全体と連体修飾構造との相互作用については、第3章以下の議論で詳しく述べるため、ここでは大まかな分類を示すにとどめる。

本論文では、次のような環境において、項となった名詞句が主節述語に応じて異なった意味的性質を持つという点に注目する。

(20) a. スーツを着た男性が歩いている。

b. スーツを着た男性が好きです。

(20)における「スーツを着た男性」は、以下のような意味的差異がある。(20a)では、特定の「男性」についての言及としてしか解釈できない。つまり、「スーツを着た男性」は、指示対象を持ったある「男性」を表示するために用いられている。一方、(20b)は不特定の「男性」についての言及であると解釈されうる。従って、「スーツを着た男性」は、必ずしもある「男性」が存在することを前提とせずに、「スーツを着た男性」という属性を表示していると言える。

上述の意味的な差異は、(20ab)の主節述語により生じていると考えられる。このような述語の対立については、従来、いわゆる「内包性」の問題として形式意味論の分野において重要なものと見なされてきた(cf. 白井 1985: 167-172 等)。名詞句の内包性の問題、すなわち、名詞句に言語形式が表示する属性を表す側面

と、その属性に該当する指示対象を表す側面があるという議論は、古くは Frege(1892)に遡るとされるが、メンタル・スペース理論における名詞句の「役割／値」解釈等、現代の言語研究にも部分的に引き継がれている論点である (cf. 井元 1995: 98)。

(20ab)の述語は、同一指示の他の名詞句に置き換えられるかどうか、すなわち、内包性を有しているかどうかという点で区別される。

- (21) a. 太郎が歩いている。
b. 太郎＝スーツを着た男性
c. ∴ スーツを着た男性が歩いている。(=(20a))

- (22) a. 太郎が好きです。
b. 太郎＝スーツを着た男性
c. ∴ #スーツを着た男性が好きです。(=(20b))

「太郎」が「スーツを着た男性」であるという同一指示の関係が成立する限りにおいて、(20a)を操作した(21)は妥当な推論であると言える。一方で、(20b)を操作した(22)は、「スーツを着た男性」を不特定のに解釈する限りにおいて、妥当な推論であるとは言えない。(20b)における「スーツを着た男性」は特定の男性を指しておらず、仮に「太郎」が「スーツを着た男性」に該当したとしても、「太郎」のことを「スーツを着た男性」でもって示しているとは言えないからである。すなわち、(20a)で問題にされているのは名詞句で表示された指示対象であるために、同一対象指示の他の名詞句に置き換えが可能であるのに対し、(20b)で問題にされているのは名詞句の意味内容であるため、同一指示の他の名詞句に置き換えてしまうと真理条件的意味が変わってしまうのである。

ここで、(20)に見られる名詞句の意味論的性質を区別するために、〈外延〉および〈内包〉という概念を導入する。

(23) 〈外延〉と〈内包〉

〈外延〉…特定の可能世界または時点において、共通の属性を有する個体の集合。

〈内包〉…ある対象が、特定の可能世界または時点において取りうる属性の集合。

(23)は、言い換えれば、名詞句が表示する指示対象を〈外延〉、名詞句が表示する意味内容を〈内包〉として捉えるということである。(20a)の「スーツを着た男性」は、ある可能世界と時点において「スーツを着た男性」という属性を有する個体、すなわち外延を表示する名詞句であり、(20b)の「スーツを着た男性」は、ある可能世界と時点における「スーツを着た男性」という属性、すなわち内包を表示する名詞句ということになる。(23)において、「特定の可能世界または時点」を問題にしているのは、形式意味論における一般的な「外延」と「内包」の規定を踏まえてのことである (cf. 白井 1985: 112-114)。つまり、本論文では特定の可能世界または時点における属性のみを内包として扱うことになる。¹⁰

さらに、これらの概念を用いて、〈外延的文脈〉〈内包的文脈〉、〈外延的述語〉〈内包的述語〉という概念を導入する。併せて(20)を再掲する。

(24) 〈外延的文脈〉と〈内包的文脈〉

〈外延的文脈〉…言語形式で表された指示対象(外延)を問題とし、同一対象指示の他の名詞句による置き換えが可能であるような文脈。

¹⁰ ただし、本論文における「外延／内包」という概念は独自のものであり、形式意味論におけるものと同一ではない。一般的に、「内包性」とは可能世界において、ある属性を有する全ての外延の集合が問題となる概念であり、時間領域における属性が問題にされるかどうかは本質的ではないが、本論文においては時間領域における属性のみが問題にされている場合であっても、対象の「内包」が問題にされていると考える。従って、「グラウンドを走っている(ときの)太郎はカッコいい」のような例は、形式意味論においては「内包性」と関わりのないものであると考えられるのに対し、本論文においては「内包性」の問題として捉えられることになる。

〈内包的文脈〉… 言語形式で表された属性そのもの（内包）を問題とし、同一対象指示の他の名詞句による置き換えが不可能であるような文脈。

(25) 〈外延的述語〉と〈内包的述語〉

〈外延的述語〉… 項となる名詞句に対し、外延的文脈のみを構成する述語。

〈内包的述語〉… 項となる名詞句に対し、外延的文脈と内包的文脈のいずれかを構成する述語。

(26) a. スーツを着た男性が歩いている。 〈外延的述語〉

b. スーツを着た男性が好きです。 〈内包的述語〉 ((20)の再掲)

外延的文脈とは、項となる名詞句の指示対象が問題とされており、同一指示の関係さえ成立していれば、他の名詞句で代替が可能であるような文脈である。それに対し、内包的文脈とは、項となる名詞句で表示された属性そのものが問題とされるために、当該の名詞句を他の言語表現で代替することはできない文脈である。また、外延的述語は外延的文脈のみを構成する述語であり、内包的述語は内包的文脈が構成可能な述語である（ここで、外延的述語と内包的述語の規定が対称的になっていない点については後述する）。以上の規定により、(26a)は外延的文脈、(26b)は内包的文脈であり、(26a)の主節述語「歩く」は外延的述語、(26b)の主節述語「好きだ」は内包的述語と分類されることになる。

さらに、(23)～(25)に基づけば、意味的な曖昧性（ambiguity）によって外延的述語と内包的述語を区別することもできる。

〈外延的述語〉

(27) スーツを着た男性が歩いている。（＝(26a)）

a. スーツを着たある男性がいて、その男性が歩いている。

b. *スーツを着た男性であれば、誰であれ歩いている。

〈内包的述語〉

(28) スーツを着た男性が好きです。(=(26b))

- a. スーツを着たある男性がいて、その男性が好きです。
- b. スーツを着た男性であれば、誰であれ好きだ。

(27)の主節述語は、「歩く」という外延的述語であるため、外延的文脈(=(27a))としてしか解釈できず、意味的な曖昧性は生じない。一方、(28)の主節述語は、「好きだ」という内包的述語であるため、外延的文脈(=(28a))と内包的文脈(=(28b))のいずれにも解釈可能であり、意味的に曖昧になる。¹¹以下、上述の規定に基づく外延的述語と内包的述語の大まかなリストを挙げておく。

(29) 〈外延的述語〉¹²

歩く、走る、訪れる、向かう、会う、話しかける、壊す、殴る、黒い、四角い、学者だ、警察官だ

(30) 〈内包的述語〉¹³

思い浮かべる、考える、信じる、想像する、カッコいい、かわいい、おとなしい、優しい、好きだ、立派だ、男前だ、美人だ

¹¹ (22)における同一対象指示の置き換えテストも、外延的文脈として解釈した場合には、当然妥当な推論となる。

¹² ただし、動作動詞の一部は、ル形で恒常的属性を表した場合に、内包的述語としても用いることができる。例えば「歩く」という動詞は、「近所に住む小学生は、この歩道橋を歩く」のような環境では、内包的述語として用いられていると考えられる。このことは、最終的に得られる文の解釈が外延的文脈であるか内包的文脈であるかということが、述語のアスペクト・テンス・ムードなどによって決定されることを示唆している。上述の問題については、本節の終わりに改めて言及する。

¹³ 本論文で「内包的述語」と呼称する述語は、必ずしも従来典型的に内包性を持つとされてきた述語と同一ではない。「カッコいい／かわいい」、「男前だ／美人だ」などといった評価的な意味を持つ形容詞・名詞述語などは、従来の意味における内包的述語ではないが、本論文では内包的述語に分類される。なお、ここに挙げた内包的述語のうち、「思い浮かべる／考える／信じる／想像する」といった述語（従来典型的に内包性を有すると考えられてきた述語の一部）は、やや特殊な意味的性質を持つため、いったん議論から外しておく。詳細は第5章で述べる。

外延的述語には、典型的な動作動詞や客観的なカテゴリーを示す形容詞・名詞が該当する。これは、これらの述語が、原則として現実世界のある時点において成立する叙述を表し、項となる名詞句に対して、特定の可能世界と時点における属性、すなわち内包を問題にする余地がないからである。それに対し、内包的述語には、項が心的世界のものであることを表す動詞、評価的な意味を表す形容詞・名詞が該当する。これらの述語は細かな意味において一様ではないが、項となる名詞句が必ずしも現実世界に実現したものではなく、判断の対象であるということを示すことで、特定の可能世界や時点における属性（内包）を問題にすることが可能になっているという点では共通している。

ここで、(25)の「外延的述語／内包的述語」の規定に関し、何点か補足しておく。(25)に関して注意しなければならないのは、内包的述語は常に内包的文脈をもたらすわけではない、という点である。つまり、内包的述語は場合によっては外延的文脈を構成することも可能なのである。

- (31) a. 太郎／彼 が歩いている。
b. 太郎／彼 が好きです。

(31)は、「太郎／彼」という裸の固有名詞や代名詞を項とした文である。(31a)は「歩く」という外延的述語が用いられているため、外延的文脈を構成することしかできず、曖昧性は生じない。これは、項となる名詞句が連体修飾要素を伴っている場合と同様である。一方、(31b)は「好きだ」という内包的述語が用いられているにも関わらず、曖昧性が生じていない。これは、(31b)において「太郎」を不特定の解釈することができず、外延的文脈としてしか解釈できないからである。¹⁴このように、内包的述語は、ここまで問題にしてきたような内包的文

¹⁴ 裸の固有名詞や代名詞が内包的文脈を構成できないのは、「太郎／彼」といった名詞句から、何らかの属性を想定することが難しいからであると考えられる。実際に、普通名詞句を項とした場合、「警察官が好きです」（≡「警察官であれば、誰であれ好きです」）のように、内包的文脈を構成できる。「太郎／彼」から「太郎性」や「彼性」のようなものは読み込めないのに対し、「警察官」のような普通名詞には「警察官性」が備わっていると言える。

脈だけでなく、外延的文脈を構成することも可能であるが、外延的述語は原則として内包的文脈を構成できないという点で、依然としてこの区別は意味論的に重要であると言える。¹⁵なお、述語の中には、外延的文脈と内包的文脈の勢力が拮抗しており、単純に内包的述語であると位置付けることがためられるものが存在する。その典型例の一つが存在動詞であると考えるが、存在動詞の本論文における位置付けについては、第4章で詳しく論じる。

以上の概念を踏まえて、先に取り上げた主節述語の対立を振り返ってみたい。(以下、連体修飾要素を取り除いていない用例に付された#は、当該の連体修飾要素が非制限的であることを示している。)

〈外延的述語〉

- (32) a. #スーツを着た太郎が歩いている。 〈非制限的解釈〉
b. #スーツを着た太郎に話しかけた。 〈非制限的解釈〉
c. #スーツを着た太郎は学者だ。 〈非制限的解釈〉

〈内包的述語〉

- (33) a. スーツを着た太郎が好きです。 〈制限的解釈〉
b. スーツを着た太郎はカッコいい。 〈制限的解釈〉
c. スーツを着た太郎は男前だ。 〈制限的解釈〉

外延的述語を用いた(32)の場合、定指示名詞句である「太郎」を制限的に修飾することはできない。一方、内包的述語を用いた(33)では、「太郎」を制限的に修飾することが可能である。¹⁶以上のことから、定指示名詞句を制限的に修飾するためには、文が内包的文脈となっていること、すなわち、名詞句が内包的に解釈されていなければならないことが分かる。

¹⁵ (31b)の他、「あそこに、スーツを着た男性とアロハシャツを着た男性がいます。私は、スーツを着た男性が好きです」というような強量化的な連体修飾要素を伴う場合 (cf. 第1章)、内包的述語であっても外延的文脈を構成する。特に文脈は示さなかったが、本文中の(28a)も、これに相当する。

¹⁶ 厳密には、(33)を内包的文脈として解釈したときにのみ、定指示名詞句を制限的に修飾できる。これらを外延的文脈として解釈した場合、連体修飾要素は非制限的になる。

では、なぜ名詞句が内包的に解釈されている場合に限って、定指示名詞句が制限的に解釈可能なのであろうか。これは、当該の環境において問題にされるのが、特定の指示対象（外延）ではなく、名詞句で表された属性そのもの（内包）であるからだと考えられる。一般に「太郎」のような固有名詞は1つの外延しか持たないが、内包としては「スーツを着ている（太郎）」「教室にいる（太郎）」などのように、様々な時間領域（あるいは可能世界）における属性の集合と見なせる。従って、対象の外延が問題となる外延的文脈において「太郎」を限定する術はないが、対象の内包が問題となる内包的文脈においては、「太郎がとりうる属性の集合」を母集合として、その一部を限定することが可能になるのである。¹⁷このような説明は、(31b)で取り上げた、裸の固有名詞や代名詞が外延的文脈しか構成しないという事実とも整合的である。すなわち、「太郎／彼」といった固有名詞や指示代名詞は、裸の形では何ら属性を表しえないために、外延的文脈としてしか解釈できないが、連体修飾要素を伴うことでそれらの対象がとりうる属性を問題にできるようになり、内包的文脈を構成することが可能になるのである。

主節述語の分類に関する議論を締めくくるにあたって、「外延的文脈／内包的文脈」と述語のアスペクト・テンス・ムードとの関わりについて言及しておきたい。注12でも触れたように、外延的述語に分類されている述語であっても、まったく内包的文脈を構成できないというわけではない。

(34) a. 近所に住む小学生が歩いている。

b. 近所に住む小学生はこの歩道橋を歩く。

(34)は、主節述語が本論文における外延的述語である「歩く」となっている。このうち個別的な事態を問題にしている(34a)は、「近所に住む小学生」を特定の解釈することしかできず、外延的文脈を構成していると言える。しかし、反復

¹⁷ このような考え方は、大島(2010)の「属性限定」を部分的に受け継ぐものである。ただし、大島(2010)の「属性限定」は、従来の「制限用法／非制限用法」を含みこむ広い概念であるというだけでなく、主節述語の意味的分類や名詞句の解釈との対応付けが明確でないなどといった点で、本論文の分類とは異なる。

的な事態を問題とする(34b)は、「近所に住む小学生であれば、誰であれこの歩道橋を歩く」というような不特定の解釈が可能であり、内包的文脈を構成していると考えられる。

(34)以外にも、本論文で外延的述語と分類される述語が内包的文脈を構成する環境として、モダリティ要素を伴った場合が挙げられる。

(35) a. 私は心の優しい医師と結婚した。

b. 私は明日心の優しい医師に会う。

c. 心の優しい医師が泣いている。

(36) a. 私は心の優しい医師と結婚したい。

b. 私は明日心の優しい医師と会うだろう。

c. きっと心の優しい医師が泣いている。

モダリティ要素を伴わない(35)は、いずれも「心の優しい医師」を特定の解釈することが可能であり、外延的文脈としてしか解釈されない。一方、モダリティ要素を伴った(36)では、いずれも不特定の解釈が可能になる。

(34)は述語の持つアスペクト・テンス的な意味によってもたらされる解釈であり、(36)はムード的な意味によってもたらされる解釈である。従って、管見の及ぶ(34)～(36)のデータに限ってみても、次のように一般化できる。

(37) 述語の持つ内包性と文法的意味の関係

a. 総称的なアスペクト・テンスにおいては、述語の語彙的意味と関係なく内包的文脈が構成可能になる。

b. モダリティ要素によって事態が非現実のものとして解釈された場合、述語の語彙的意味と関係なく内包的文脈が構成可能になる。

(37)は、外延的述語が言語的な環境に応じて内包的文脈を構成する可能性があることを示唆している。このようなことが起こるのは、総称的なアスペクト・テ

ンスやモダリティを伴う命題が、現実世界の特定時点において生じた事態の描写ではなく、話者の判断や信念を表明しており、その点で典型的な内包的述語と同じような意味的素性を獲得しているからであると考えられる。

上記の点を踏まえると、本論文における「外延的述語／内包的述語」という対立は、実は述語の語彙的な分類ではなく、アスペクト・テンス・ムードといった述語の文法的意味に応じて最終的に得られる解釈の問題であるという可能性も検討しなければならないだろう。では、「外延的述語／内包的述語」という対立に、語彙レベルの問題は一切関わっていないと言えるのだろうか。本論文ではそのような見方をとらず、これらの対立が部分的に語彙レベルで認められるという立場をとる。その点を、次の例を用いて確認しておく。

(38) a. 私は母親が作ってくれた手料理を思い浮かべた。

b. 私は母親が作ってくれた手料理をいつも思い浮かべる。

(38)は、主節述語が内包的述語「思い浮かべる」となっている。(38b)はいわば総称的なアスペクト・テンスを持っており、「母親が作ってくれた手料理」が不特定の解釈されているという点で(34b)と同じである。他方、重要なのは(38a)である。ここでは述語が「思い浮かべた」という形式をとっており、個別的な事態を問題にしているにもかかわらず、「母親が作ってくれた手料理を何であれ思い浮かべた」という不特定の解釈（内包的文脈としての解釈）が可能なのである。この点で、個別的な事態に言及した場合に外延的文脈としてしか解釈できなかった(34a)とは大きく異なっている。すなわち、内包的述語の場合には、個別的な事態に言及していても項となった名詞句を内包的に解釈可能であるのに対し、外延的述語の場合にはそのようなことが起こらないのである。このような事実から、本論文では、「個別的な事態に言及しているにもかかわらず、項となった名詞句を不特定の解釈できるか」という点で、内包的述語と外延的述語を語彙的に区別することは可能であると考ええる。

ただし、この基準が適用できるのは動詞述語だけであって、そもそも「個別的

な事態」に言及することのない形容詞述語・名詞述語には別の観点が必要となる。本論文では、部分的に「外延的述語／内包的述語」の区別が語彙的に認められるという指摘にとどめ、残された論点については今後の課題としたい。

3.2. 被修飾名詞句の分類

続いて、被修飾名詞句の分析を行う。先行研究において、「制限的用法／非制限的用法」の成立は、「定／不定」という名詞句の指示性と結びつけられていた。(17)でも確認したが、井上(1976a)、金水(1986a)といった先行研究の主張は、以下のようによまとめられるだろう。3節の冒頭で確認した例も再掲しておく。

(39) 連体修飾節の意味解釈を分ける要因

被修飾名詞句が不定指示であれば連体修飾要素は制限的となり、定指示であれば非制限的となる。

(40) a. 言語学を専攻する学生はおとなしい。 〈制限的解釈〉

b. #言語学を専攻する太郎はおとなしい。 〈非制限的解釈〉

((15)の再掲)

名詞句の「定／不定」に基づく(39)の一般化は、(40)のような対立を見る限りでは部分的に有効であるように思われる。しかし、内包的文脈において、定指示名詞句が制限的に修飾されるという点は、3.1 節で見てきた通りである。(なぜ(40)のような環境において「制限的用法／非制限的用法」の差が生じているのかという点については、次節で問題にする連体修飾要素の意味的分類に踏み込まなければならないため、ここでは触れないでおく。)

では、内包的文脈が生じるような環境であれば、どのような定指示名詞句も制限的に修飾することができるのであろうか。結論を先取りして述べると、内包的述語の項となった場合に、全ての定指示名詞句が制限的に修飾されうるわけではない。

- (41) a. 沢山の観光客で賑わう商店街は華やかだ。 〈制限的解釈〉
 b. 沢山の観光客で賑わう上野公園は華やかだ。 〈制限的解釈〉
 c. #沢山の観光客で賑わう長野五輪は華やかだ。 〈非制限的解釈〉

(41)において、被修飾名詞句を「商店街／上野公園」とする(41ab)は、「他の商店街ではなく、沢山の観光客で賑わう商店街」、「他のときではなく、沢山の観光客で賑わうときの上野公園」というような制限的解釈が可能である。しかし、被修飾名詞が「長野五輪」となっている(41c)では、制限的な解釈をえることは難しい。これらの対立は、(41)の被修飾名詞句が、それぞれ意味論的に異なった性質を持つことを示唆している。

以上の観察から、(41a)と(41b)の被修飾名詞句のみならず、従来の分析では定指示としてひとくくりにせざるをえない(41b)と(41c)の被修飾名詞句の間にも、意味論的な差異が存在すると考えられる。実際に、(41)の被修飾名詞句は、量化の可能性という点で次のような違いがある。

- (42) a. ほとんどの商店街は、駅の近くにある。
 b. 商店街は、ほとんど駅の近くにある
 (43) a. *ほとんどの上野公園は、人通りがない。
 b. 上野公園は、ほとんど人通りがない
 (44) a. *ほとんどの長野五輪は、長野市内で開催された。
 b. *長野五輪は、ほとんど長野市内で開催された。

量化の対象が普通名詞「商店街」となっている場合には、(42)のように個体を量化することもイベントを量化することも可能である。一方、固有名詞「上野公園」の場合には、(43b)のようにイベントの量化が可能であるものの、(43a)のように個体の量化はできない。そして(43)「長野五輪」の場合には、個体を量化することもイベントを量化することもできない。

そこで本論文では、量化が可能であるかという点から、名詞句を〈可量化名詞

句〉〈準可量化名詞句〉〈不可量化名詞句〉の3種類に分類する。その上で、このような名詞句の量化可能性と、先に見た制限的修飾の可否が結びついていると主張する。

(45) 量化の可否に基づく名詞句の分類

〈可量化名詞句〉 ……個体およびイベントの量化が可能な名詞句。

〈準可量化名詞句〉 …イベントの量化のみが可能な名詞句。

〈不可量化名詞句〉 …個体およびイベント、いずれの量化もできない名詞句。

〈可量化名詞句〉

(46) a. ほとんどの 交響曲／『第九』 は、大きなホールで演奏される。

b. 交響曲／『第九』 は、ほとんど大きなホールで演奏される。

〈準可量化名詞句〉

(47) a. *ほとんどの 太郎／彼／あの人 は、院生室にいる。

b. 太郎／彼／あの人 は、ほとんど院生室にいる。

〈不可量化名詞句〉

(48) a. *ほとんどの 関東大震災／あの事件 は、南関東地域で起こった。

b. *関東大震災／あの事件 は、ほとんど南関東地域で起こった。

(46)～(48)では、a において個体の量化が、b においてイベントの量化が行われている（厳密には、b でも個体を量化することは可能だが、(47)と(48)では、その解釈が排除される）。(46)に示したように、可量化名詞句とは、複数の指示対象を持つことが可能で、個体の量化とイベントの量化の両方が可能な名詞句である。可量化名詞句には「交響曲」のような普通名詞句の他、「『第九』」のような複数の指示対象（例えば、複数の奏者による演奏等）を持ちうる固有名詞が該当する。従来、固有名詞は定指示名詞句と結びつけられることが多かったが、

実際には普通名詞相当に振る舞う固有名詞も存在するのである。¹⁸

それに対し、(47)に示した準可量化名詞句は、イベントの量化は可能であっても、個体の量化はできない名詞句である。準可量化名詞句に対して個体の量化ができないのは、これらの名詞句が原則として単一の外延を持つために、個体の存在量を操作することはできないからである。従って、準可量化名詞句には、固有名詞「太郎」、代名詞「彼」、限定詞付きの名詞句「あの人」など、従来定指示名詞句の典型例として挙げられていたものが該当する。¹⁹このことから、「個体の量化が可能であるかどうか」という点は、従来の分類における「定／不定」を区別する基準としても有効であると考えられる。

一方で、個体の量化を許さない名詞句の中には、(48)のようにイベントの量化すらも許さない名詞句が存在する。本論文では、このような名詞句を不可量化名詞句と呼ぶことにする。不可量化名詞句は、ある時点に起こった特定のイベントを指し示す名詞句であり、「いつ／どのくらいの頻度で」起こったのかを問題にすることができない。そのため、イベントの量化すらも許さないのだと考えられる。²⁰不可量化名詞句には、「関東大震災」等、特定のイベントに付けられた固有名詞の他、「その事件」等、限定詞付きのイベント名詞が該当する。

可量化名詞句は従来の不定指示名詞句、準可量化名詞句と不可量化名詞句は定指示名詞句であり、それぞれがいわば「集合指示」、「個体指示」、「イベント指示」というような指示機能を持っていると言える。ここで重要なのは、可量化名詞句

¹⁸ 三宅(1993: 96)において、固有名詞は定指示をほぼ専門に担うものであるとされているが、(46)のような例を踏まえると、「普通名詞／固有名詞」という対立は、何らかの文法的特徴を直接反映するものではなく、世界知識に基づいたより抽象的な分類であるように思われる。ただし、本論文は固有名詞論を扱うことが目的ではないので、これ以上この議論には立ち入らない。

¹⁹ 井上(1976a)が「普通名詞句」としていた「銀座」は、「*1つの銀座で買い物をした」のような名詞句の量化を受けることができない一方、「銀座はいつも人でいっぱいだ」のようにイベントの量化は可能であるため、本稿では準可量化名詞句（定指示名詞句）に分類される。

²⁰ 「ほとんど」といった表現が述語事態の程度を問題としているような場合には、不可量化名詞句と共起することは可能である。

(i) a. 長野五輪は、ほとんど忘れ去られてしまった。

b. ??長野五輪は、ほとんどの場合忘れ去られてしまった。

程度修飾的に用いられる「ほとんど」は、(ib)のように「ほとんどの場合」と置き換えることができない。本論文では、このような表現をイベントを量化しているものとは見なさない。その他、イベントの量化に関しては意味論的・語用論的なさまざまな制約が働くため、あらゆる場合について、ここでの一般化が当てはまるわけではない点は注意を要する。

と準可量化名詞句・不可量化名詞句という不定と定の対立のみならず、従来の分類ではほぼ等閑視されていた（あるいは、一様に定指示名詞句とせざるをえない）準可量化名詞句と不可量化名詞句が異なった指示性を有しており、連体修飾を受けた際の振る舞いが異なるという点である。

- (49) a. 日本史の一角を彩る町が好きだ。 〈制限的解釈〉
 b. #日本史の一角を彩る京都が好きだ。 〈非制限的解釈〉
 c. #日本史の一角を彩る明治維新が好きだ。 〈非制限的解釈〉
- (50) a. 沢山の観光客で賑わう商店街は華やかだ。 〈制限的解釈〉
 b. 沢山の観光客で賑わう上野公園は華やかだ。 〈制限的解釈〉
 c. #沢山の観光客で賑わう長野五輪は華やかだ。 〈非制限的解釈〉

((41)の再掲)

(49)と(50)は、いずれも内包的述語を用いているため、内包的文脈を構成する可能性を有している。しかし、被修飾名詞句と連体修飾要素に応じて、それらの意味的關係は異なっている。(49a)は「町の中で、日本史の一角を彩る町」という制限的な解釈が可能であるが、(49bc)は、それぞれ「京都は日本史の一角を彩っていて、そんな京都が好きだ」、「明治維新は日本史の一角を彩っているので、歴史的出来事として興味がある」というような意味合いであり、非制限的にしか解釈できない。すなわち、(49)において、「日本史の一角を彩る」という連体修飾要素が制限的であると見なせるのは、可量化名詞句「町」を被修飾名詞句とする(49a)のみであり、準可量化名詞句「京都」、不可量化名詞句「明治維新」を被修飾名詞句とする他の連体修飾要素は、非制限的にしか解釈できないのである。確かに、このような環境においては、従来の一般化が有効である。

しかし、(50)では事情が異なる。(50a)について「いつもの商店街ではなく、沢山の観光客で賑わうときの商店街」という制限的な解釈が可能であるだけでなく、(50b)においても、「いつもは人がいないが、沢山の観光客で賑わうときの

野公園は華やかだ」という制限的な解釈が可能である。²¹対して、(50c)については、「長野五輪は沢山の観光客で賑わっており、それが華やかだ」というような非制限的解釈しかえられない。つまり、可量化名詞句と準可量化名詞句を被修飾名詞句とする(50a)と(50b)は制限的な解釈を受けているのに対し、不可量化名詞句を被修飾名詞句とする(50c)のみが非制限的解釈を受けているのである。

以上のように、連体修飾要素の機能は、量化の可能性に基づく被修飾名詞句の分類と対応しており、制限的修飾を受ける環境が異なっている。これは、可量化名詞句が個体の面でもイベントの面でも量化が可能であり、より多くの意味的限定を受ける可能性があるのに対し、量化を受けることが困難な準可量化名詞句や不可量化名詞句ではそのような余地がなくなってしまうからであると考えられる（なぜ量化可能性と制限的修飾の可否が結びつくのかという問題については、次節でも改めて振り返る）。従来の「定／不定」という概念では、分類の明示性のみならず、このような対立を捉えられないという点で、不十分であると言えるだろう。以下、本論文では、主として可量化名詞句、準可量化名詞句、不可量化名詞句という概念によって、被修飾名詞句の問題を取り扱っていく。

なお、(49)(50)の対立から、本論文が提示する被修飾名詞句の分類が連体修飾要素の解釈に影響を及ぼしていることが確認されるが、どのような連体修飾要素が現れた場合に、それぞれの被修飾名詞句について「制限的用法／非制限的用法」の対立（「内包的文脈／外延的文脈」の対立）が生じるのかは、明らかにされていない。この問題は、3.3 節の主要な論点となる。

本節の終わりに、ここまで取り上げてこなかった述語名詞句について、簡単に取り上げておきたい。述語名詞句は、一項述語となって項を要求する場合と、述語名詞句それ自体が項に相当する場合とがある。

²¹ (50a)には、上述の解釈だけでなく、「他の商店街ではなく、沢山の観光客で賑わう商店街」というような解釈も存在するが、これは連体修飾要素の限定機能をどのように解釈するかによって生じる曖昧性である。連体修飾要素の意味的分類は、3.3 節で扱う。

(51) a. 鯨は海に生息する哺乳類だ。

b. この事件の犯人は隣の部屋にいる太郎だ。

(51)はいずれもコピュラ文（名詞述語文）であるが、述語名詞句の意味的性質は異なっている。(51a)は、いわゆる措定文であり、述語名詞句「海に生息する哺乳類」は一項述語に相当する叙述名詞句（非指示的名詞句）である。三宅(1993)は、このような非指示的名詞句は必ず制限的修飾を受けるとしているが、「私は寺社の建築を手掛ける宮大工です」のように、定義的な意味を表す場合には、非制限的にも解釈されうる。これらの解釈の成立には、語用論的な影響を検討する必要もあり、必ずしも十分な一般化が得られているとは言い難い。また、(51b)は、いわゆる指定文であり、述語名詞句は指示的名詞句であるとともに、「この事件の犯人」の項に相当する。指定文については第3章で詳しく論ずるが、そこでの議論を部分的に先取りする形で述語名詞句の解釈について述べておく。本論文において、指定文は「変域の値を指定された名詞句で内包を表示し、それに該当する外延を取り上げる文」と考える。指示的名詞句である(51b)の述語名詞句は、この規定における「外延」に相当し、原則として外延的文脈に準じた解釈を受けると考えられる（外延的文脈における連体修飾要素については、次節で取り上げる）。なお、(51b)における主語名詞句「この事件の犯人」は、上述の規定における「内包」に相当するが、状況は極めて複雑であるため、詳細な議論は第3章に譲る。²²

以上、簡単な説明を試みたが、述語名詞句については、そもそも一項述語ではなく名詞句として扱うことの妥当性や、被修飾名詞句に対する百科事典的知識の影響について検討する必要があると考えられるため、本論文ではこれ以上踏み込んだ議論はしない。

²² (51b)のタイプのコピュラ文（指定文）には、倒置した形「隣の部屋にいる太郎がこの事件の犯人だ」があるとされるが、当然この場合には主語名詞句が外延となり、述語名詞句が内包となる。

3.3. 連体修飾要素の分類

本節では、連体修飾要素の分析を行う。ここで改めて、問題の所在を確認しておく。

3 節を通じて確認してきたように、内包的文脈においては準可量化名詞句を制限的に修飾することが可能であるが、全ての環境において制限的に解釈されるわけではない。同一の被修飾名詞句と主節述語であっても、連体修飾要素の意味的性質により、「制限的用法／非制限的用法」の差が生じることがある。

(52) a. #静かな町で育った太郎はおとなしい。 〈非制限的解釈〉

b. #茶道部に所属する彼はおとなしい。 〈非制限的解釈〉

(53) a. 教室にいる太郎はおとなしい。 〈制限的解釈〉

b. 花子から見た彼はおとなしい。 〈制限的解釈〉

((18)の再掲)

(52)と(53)は、いずれも内包的述語を用いており、被修飾名詞句が準可量化名詞句となっている。しかし、連体修飾要素の意味的な違いにより、制限的な解釈となっている（内包的文脈として解釈される）のは(53)のみである。このような対立から、準可量化名詞句（従来の定指示名詞句）を制限的に修飾する連体修飾要素の意味的性質とはどのようなものであるのかが、問題となってくる。

また、前節で示した範囲では、準可量化名詞句が制限的に修飾されている例を見てきたが、不可量化名詞句が制限的な修飾を受ける例は取り上げていなかった。しかし、不可量化名詞句は、一切制限的修飾を受けないわけではなく、次のような環境において制限的修飾が可能である。

(54) a. 沢山の観光客で賑わう上野公園は華やかだ。 〈制限的解釈〉

b. #沢山の観光客で賑わう長野五輪は華やかだ。 〈非制限的解釈〉

((50bc)の再掲)

- (55) a. 彼が見た上野公園は、とてもつまらなかった。〈制限的解釈〉
 b. 彼が見た長野五輪は、とてもつまらなかった。〈制限的解釈〉

(54)のような環境において、制限的修飾を受けるのは準可量化名詞句のみであり、不可量化名詞句は制限的に修飾されない。他方、(55)のような環境では制限的修飾が可能である。以上の対比から、不可量化名詞句が制限的修飾を可能にする連体修飾要素の意味的性質も、問題にしなければならないことになる。

このように、連体修飾要素の意味的性質は、「制限的用法／非制限的用法」の対立において重要な役割を果たす。以下、上述の対立を捉えうる連体修飾要素の分類を行う。ただし、ここで観察する連体修飾要素の分類は、3.1 節で論じた「外延的文脈／内包的文脈」という主節述語がもたらす言語的環境とも密接に関わっている。従って、以下の議論では、「外延的文脈／内包的文脈」それぞれについて、連体修飾要素の機能を観察する。議論の都合上、まず、内包的文脈における連体修飾要素を見ていく。

「可量化名詞句のみが限定可能な環境」、「可量化名詞句と準可量化名詞句が限定可能な環境」、「全ての名詞句が限定可能な環境」について、連体修飾要素以外を同じ条件にして比較したのが、以下の例である。

- (56) a. 外貨の獲得が見込める田舎町はとても魅力的だ。〈制限的解釈〉
 b. #外貨の獲得が見込める白川郷はとても魅力的だ。〈非制限的解釈〉
 c. #外貨の獲得が見込める長野五輪はとても魅力的だ。〈非制限的解釈〉
 (57) a. 沢山の雪が積もった田舎町はとても魅力的だ。〈制限的解釈〉
 b. 沢山の雪が積もった白川郷はとても魅力的だ。〈制限的解釈〉
 c. #沢山の雪が積もった長野五輪はとても魅力的だ。〈非制限的解釈〉
 (58) a. 彼が想像する田舎町はとても魅力的だ。〈制限的解釈〉
 b. 彼が想像する白川郷はとても魅力的だ。〈制限的解釈〉
 c. 彼が想像する長野五輪はとても魅力的だ。〈制限的解釈〉

(56)～(58)は、同一の被修飾名詞句と主節述語を有しているが、それぞれの連体修飾要素の意味的性質は異なっており、それが「制限的用法／非制限的用法」の解釈に反映されている。それぞれの連体修飾要素を観察すると、(56)は、連体修飾要素が「外貨の獲得が見込める」という恒常的・汎時的な性質を表すものになっている。これは言い換えれば、範疇（カテゴリー）によって対象を限定する連体修飾要素ということである。一方、(57)は、連体修飾要素が「沢山の雪が積もった」という一時的性質を表している。すなわち、(57)においては、被修飾名詞句が時間領域によって限定されていると言える。

(56)と(57)の差異は、次のようなパラフレーズからも確かめられる。

- (56') a. ?外貨の獲得が見込めるときの田舎町はとても魅力的だ。
b. ?外貨の獲得が見込めるときの白川郷はとても魅力的だ。
c. ?外貨の獲得が見込めるときの長野五輪はとても魅力的だ。
- (57') a. 沢山の雪が積もったときの田舎町はとても魅力的だ。
b. 沢山の雪が積もったときの白川郷はとても魅力的だ。
c. 沢山の雪が積もったときの長野五輪はとても魅力的だ。

(56)と(57)の連体修飾要素に、「ときの」という一時的な性質であることを明示する形式的な連体修飾句を挿入すると、(56')のタイプは容認度が下がってしまうのに対し、(57')ではそれほど意味の変化が見られない。²³このような振る舞いの差異から、(56)と(57)は、恒常的性質を表すか、一時的性質を表すかという点において対立しており、後者の場合に限り、準可量化名詞句を制限的に修飾可能であることが分かる。

続けて、(58)を見ていく。(58)は、「ときの」を挿入できないという点で、(57)のタイプとは異なる。

²³ (57'c)は制限的な修飾を受けているように感じられるが、「～ときの」という連体修飾句は、連体修飾節よりも限定可能な範囲が広い可能性がある。連体修飾句と連体修飾節の差異については、本節の最後でも言及する。

- (58') a. ?彼が想像するときの田舎町はとても魅力的だ。
b. ?彼が想像するときの白川郷はとても魅力的だ。
c. ?彼が想像するときの長野五輪はとても魅力的だ。

しかし、(56)と意味的に同質であるとも言いがたい。(58)では「想像する」という、特定の認知主体の心内世界の存在であることを示す連体修飾要素が現れており、可量化名詞句、準可量化名詞句、不可量化名詞句の全てが制限的修飾を受けているからである。「想像する」の他には、「考える」「思う」「知る」等の、思考・知覚・認知を表す述語が典型的なものとして挙げられるだろう。つまり、(58)においては、どの可能世界における現れであるかを問題にすることで被修飾名詞句を限定しているのであり、(56)(57)のいずれのタイプとも異なった限定機能を持っていると考えられる。²⁴

次のようなパラフレーズが(58)の場合に可能であることは、上述の分析の傍証になると考えられる。

- (58'') a. 彼にとっての田舎町はとても魅力的だ。
b. 彼にとっての白川郷はとても魅力的だ。
c. 彼にとっての長野五輪はとても魅力的だ。

(58'')の「彼にとっての」という連体複合辞は、ある主体の視点で捉えた対象について言及する表現であり、(58)の各例と類似した意味を表すことができる。加えて、このようなパラフレーズは、(56)(57)のタイプでは困難であり、可能世界の表れ方によって対象を限定するという機能が、(58)に特有のものであることが確認される。

ここまでの観察から明らかになったのは、以下の諸点である。(56)のような範

²⁴ ただし、可能世界による限定が可能なのは、「彼が描いた西南戦争は、あまりにも痛ましい」のように、ここに挙げたタイプの述語に限らない。どのような述語が当該の解釈を成立させるのかという問題は、今後の課題としなければならない。

疇で被修飾名詞句を限定するタイプでは、可量化名詞句のみを制限的に修飾することができる。一方、(57)のような時間領域によって被修飾名詞句を限定するタイプでは、可量化名詞句のみならず、準可量化名詞句を制限的に修飾することも可能であるが、不可量化名詞句を制限的に修飾することができない。不可量化名詞句を制限的に修飾可能なのは、(58)のような可能世界によって被修飾名詞句を限定するタイプであり、この種の連体修飾要素においては、可量化名詞句および準可量化名詞句を含む全ての被修飾名詞句を制限的に修飾することができる。

以上の事実は、量化の可否に基づく被修飾名詞句の分類と、連体修飾要素の意味的なタイプに、一定の対応関係が存在することを示している。従って、本論文では、(56)～(58)の連体修飾要素に見られる、限定可能な被修飾名詞句と連体修飾要素が持つ意味的な差異から、制限的連体修飾要素を〈範疇限定〉〈時間限定〉〈可能世界限定〉の3タイプに分類する。具体例も再掲しておく。

(59) 制限的連体修飾要素の分類

〈範疇限定〉 ……可量化名詞句のみを限定する。

〈時間限定〉 ……可量化名詞句および準可量化名詞句を限定する。

〈可能世界限定〉 …可量化名詞句・準可量化名詞句・不可量化名詞句の全てを限定する。

(60)a. 外貨の獲得が見込める田舎町はとても魅力的だ。 〈範疇限定〉

b. 沢山の雪が積もった白川郷はとても魅力的だ。 〈時間限定〉²⁵

c. 彼が想像する長野五輪はとても魅力的だ。 〈可能世界限定〉

((56a)(57b)(58c)の再掲)

²⁵ (57a)「沢山の雪が積もった田舎町はとても魅力的だ」のように、被修飾名詞句が可量化名詞句である場合には、範疇限定と時間限定で曖昧になる。先に挙げた(50a)「沢山の観光客で賑わう商店街は華やかだ」が曖昧になるのは、このような要因による(注21も参照)。なお、時間限定を受けた可量化名詞句は、総称的に解釈され、準可量化名詞句に相当する指示性を持つことになるが、この点については第4章で触れる。

範疇限定は、意味的には、被修飾名詞が指す対象から下位の範疇を取り出すタイプの限定である。すなわち、恒常的・汎時的な性質によって、被修飾名詞句に限定を加える。それに対し、時間限定は、被修飾名詞が指す対象から時間領域の現れ方を取り出すタイプの限定であり、必然的に連体修飾要素は一時的性質を表すものになる。さらに、可能世界限定は、被修飾名詞が指す対象から可能世界の現れ方を取り出すタイプの限定であり、連体修飾要素は思考や知覚といった、非現実であることを明示するものが現れる。

では、なぜ時間限定と可能世界限定に限って、準可量化名詞句や不可量化名詞句（従来、定指示とされていた名詞句）を制限的に修飾することができるのだろうか。また、範疇限定、時間限定、可能世界限定といった意味的なタイプが、量化の可否に基づく被修飾名詞句の分類と、一定の対応関係にあるのはなぜなのだろうか。

この問題には、準可量化名詞句が意味的には時間的に連続する個体を表し、不可量化名詞句が特定時点に生起した（すなわち、時間的な幅を読み込みにくい）個別のイベントを表している、という点が深く関わっていると考えられる。対象をカテゴリカルに限定する働きしかない範疇限定では、単一の外延しか持たない準可量化名詞句や不可量化名詞句を限定することはできず、複数の対象を表示できる可量化名詞句に限って制限的修飾が可能になる。それに対し、時間限定は、時間領域（一時的な性質）において被修飾名詞句を限定する操作である。従って、時間的な連続体として見なすことが困難な不可量化名詞句は、意味的に限定することができないが、時間的な連続体である準可量化名詞句を意味的に限定することは可能である。一方、可能世界限定は被修飾名詞句を可能世界において限定する操作であり、不可量化名詞句のように、時間的に点としか捉えられないような対象であっても限定を行うことが可能である。限定可能な被修飾名詞句の範囲の違いは、このように、時間限定と可能世界限定の意味的性質から自然に説明されるのである。

続いて、外延的文脈における連体修飾要素を見ていく。外延的文脈に現れる連体修飾要素は、すでに特定化された対象に付随する修飾要素である。そのため、

名詞句で表示された記述内容は、事実上、情報付加的な機能しか持たず、非制限的に解釈されると言ってもよい。

- (61) a. 言語学を専攻する学生に話しかけた。
b. 生協で売られていた本を購入した。
- (62) a. 言語学を専攻するその学生に話しかけた。
b. 生協で売られていたその本を購入した。
- (61') a. 学生に話しかけた。
b. 本を購入した。
- (62') a. その学生に話しかけた。
b. その本を購入した。

(61)の被修飾名詞句「学生／本」は、外延的述語の意味的な作用により、既に特定化されたものとして理解される。このような環境においては、「言語学を専攻していない学生／書店で売られていた本」というような「補集合の活性化」が起きているとは考えにくい。従って、(62)の被修飾名詞句「その学生／その本」とは、直示的 (deictic) な照応関係に差があるという以外には、それほど違いがなく、連体修飾要素を取り除いた場合にも、大きな文意の変化は見られない。²⁶

このような性質から、本論文では、外延的文脈に現れる連体修飾要素は、原則として非制限的である（あるいは、「制限的／非制限的」の区別が中和する）と考える。ただし、(61)のような例は、先行研究において制限的と見なされており、

²⁶ ただし、「人／奴／者」のような形式的な名詞の場合は、どのような環境であっても連体修飾要素を取り除くと元の文意を復元することは難しくなる。

- (i) a. 言語学を専攻する人と会った。
b. 生意気なことを言う奴を殴った。
c. 授業を妨害した者がこの教室に逃げた。
- (i') a. #人と会った。
b. #奴を殴った。
c. *者がこの教室に逃げた。

(i)と(i')は、語用論的な情報の不足感を抜きにしても、文意に変化が見られないとは言えない（特に「者」については、形式名詞化の傾向が著しい）。このような振る舞いは「人／奴／者」の語彙的性質に起因すると考えられるため、ここでは問題にしない。

補足が必要であろう。²⁷実際に、次のような環境においては、外延的文脈における連体修飾要素が制限的に解釈されていると言ってよい。

- (63) a. 何人かの学生がいる中で、言語学を専攻する学生に話しかけた。
b. 同じ本を書店で見かけたが、生協で売られていた本を購入した。
(63') a. #何人かの学生がいる中で、学生に話しかけた。
b. #同じ本を書店で見かけたが、本を購入した。

(63)は、前提となる集合の中から、選択的に特定の対象や部分量を取り出す環境であり、第1章で言及した強量的な限定を行う連体修飾要素である。このような環境においては、(63')との対比が示すように、外延的文脈に現れた連体修飾要素も、明確に制限的な解釈を受けていると言える。

外延的文脈であっても、強量的な限定を行っている場合には制限的修飾が可能であるという事実は、「補集合の活性化」という観点から見れば自然に理解される。そもそも内包的文脈において制限的修飾が可能なのは、被修飾名詞句で表示された対象または属性の集合が問題にされており、「補集合の活性化」が可能だからである。通常、外延的文脈においては特定の対象が問題とされており、名詞句が集合を表示することはない。従って、名詞句で表示された対象の「補集合の活性化」も起こらず、連体修飾要素は情報付加的に解釈される。一方、強量的な限定が生じる環境においては、前提的な集合が文脈上に導入されていることで、名詞句が集合を表示することが可能となる。その結果、「補集合の活性化」が生じ、被修飾名詞句が制限的に修飾されるのである。「名詞句で表示された集合が問題にされていること」と「内包的文脈であること」はおおむね重なるが、強量的な限定が可能な環境に限り、外延的文脈においても集合が問題にされているため、制限的修飾が実現すると言える。

しかし、(63)のような明確な対比項が存在するという特殊な文脈を除き、外延

²⁷ 例えば、寺村(1976: 55)は「私買った絵はにせものだった」(原文はカナ書き)を制限的としているが、本論文の立場では非制限的となる。

的文脈において「補集合の活性化」が生じているとする根拠は乏しいように思われる。仮に(61)を制限的としてしまうと、明らかに意味論的に異なる(61)と(63)の連体修飾要素の機能を区別することが難しくなるという、別の問題が生じることになるだろう。従って、本論文では、前提集合が一切想定されない(61)のような外延的文脈に限り、連体修飾要素は原則として非制限的になるとしておく。

内包的文脈において種々の制限節を構成していた連体修飾要素も、外延的文脈においては非制限節として解釈される。

- (64) a. # 外貨の獲得が見込める田舎町を訪れた。 〈非制限的解釈〉
b. # 外貨の獲得が見込める白川郷に宿泊した。 〈非制限的解釈〉
c. # 外貨の獲得が見込める長野五輪に出場した。 〈非制限的解釈〉
- (65) a. # 沢山の雪が積もった田舎町を訪れた。 〈非制限的解釈〉
b. # 沢山の雪が積もった白川郷に宿泊した。 〈非制限的解釈〉
c. # 沢山の雪が積もった長野五輪に出場した。 〈非制限的解釈〉
- (66) a. ?? 彼が想像する田舎町を訪れた。
b. ?? 彼が想像する白川郷に宿泊した。
c. ?? 彼が想像する長野五輪に出場した。

外延的文脈に現れた連体修飾要素は、被修飾名詞句が可量化名詞句・準可量化名詞句・不可量化名詞句のいずれであっても、特定の対象について付加的な情報を補う機能しか持たない。よって、(64)(65)は非制限的な解釈となる。ここで興味深いのは、(66)の振る舞いである。内包的文脈において可能世界限定を構成していた連体修飾要素が外延的文脈に現れると、そもそも文としての容認度が下がってしまう（この点については、3 節冒頭の(19b)に言及した際、簡単に触れた）。²⁸これは、主節述語ではなく連体修飾要素の働きにより名詞句の内包が問

²⁸ ただし、可能世界限定を構成する連体修飾要素が絶対に外延的述語と共起しないというわけではない。「知り合いがいなかったので、私が知っている花子に話しかけた」のような文は、その一例である。

題にされているためであると考えられるが、詳細は後述する。

ここまでの議論を踏まえ、非制限的修飾を含めた連体修飾全体の分類をまとめておく。

(67) 連体修飾要素の分類

〈非制限的修飾〉 …… 被修飾名詞が表示する対象または属性に対し、何らかの背景的な情報を付け加える修飾。

〈制限的修飾〉 …… 被修飾名詞が表示する対象または属性から、その一部を取り出す修飾。

〈範疇限定〉 …… 可量化名詞句のみを限定する。

〈時間限定〉 …… 可量化名詞句および準可量化名詞句を限定する。

〈可能世界限定〉 …… 可量化名詞句・準可量化名詞句・不可量化名詞句の全てを限定する。

連体修飾要素は、「制限的用法／非制限的用法」に大別される。非制限的修飾は被修飾名詞句に対して限定機能を有さないことから、本論文ではこれ以上分析的に取り扱うことはない。²⁹一方で、制限的修飾はその意味的性質に応じて、範疇限定・時間限定・可能世界限定の3つのタイプに分けられる。本論文の分類において、内包的文脈であることと制限的修飾であることはおおむね対応すると言えるが、(63)のように強量的な限定を行っている場合には外延的文脈においても制限的な修飾が現れるので、一応独立した概念である。³⁰「制限的修飾」と「非制限的修飾」を分ける要因は、原理的には「補集合の活性化」が生じているかどうかであるという点を、ここで改めて強調しておきたい。

本節の最後に、連体修飾節と連体修飾句（助詞「の」を伴う連体修飾）の機能

²⁹ これは、非制限的用法について、一切の意味的分類が適用できないということを必ずしも意味しない。非制限的用法を、主節に対する意味的な関係に基づいて分類した研究として、益岡(1995)がある。

³⁰ この他、「寺社の建築を行う宮大工が好きです」のような定義的な意味を表す連体修飾要素は、内包的文脈であっても非制限的に解釈されるため、ここでも対応しないことになる。

的な差異、また、関連する名詞句の内包性の問題について付言しておく。ここま
で議論を単純化するため、連体修飾節に対象を絞ってきたが、連体修飾要素に関
する本節の議論は、基本的に連体修飾句にも当てはまる。範疇限定・時間限定・
可能世界限定は、どちらの連体修飾要素でも基本的に可能である。

〈連体修飾節〉

- (68) a. #書道部に所属する太郎は魅力的だ。 〈非制限的解釈〉
b. さっき校庭を走っていた太郎は魅力的だ。 〈制限的解釈〉
c. 私が知っている太郎は魅力的だ。 〈制限的解釈〉

〈連体修飾句〉

- (69) a. #書道部員の太郎は魅力的だ。 〈非制限的解釈〉
b. さっきの太郎は魅力的だ。 〈制限的解釈〉
c. 私にとっての太郎は魅力的だ。 〈制限的解釈〉

(69a)のように、恒常的性質を表すような連体修飾要素は連体修飾句が担う傾
向があるため、範疇限定についてはむしろ連体修飾句で表す方が多いのではな
いと思われる。当然、この場合は準可量化名詞句および不可量化名詞句を制限
的に修飾することはできない。時間限定については、(69b)のように時間副詞的
な成分に助詞「の」を付加することで、ほぼ同様の意味を表すことができる。ま
た、可能世界限定については、(69c)のように、パラフレーズのテストに用いた
「にとっての」を付加することで、ほぼ同じ意味を表せる。時間限定と可能世界
限定の場合に、準可量化名詞句や不可量化名詞句が制限的に修飾できるよう
になるのは、連体修飾節の場合と同じである。

(68)(69)のような対立を見る限りでは、連体修飾節と連体修飾句が表す知的意
味にそれほど大きな差はないように見える。しかし、同様の連体修飾構造を外延
的文脈に置いた場合、時間限定と可能世界限定において、顕著な差異が見受けら
れる。

- (70) a. 書道部に所属する太郎を呼び止めた。
 b. さっき校庭を走っていた太郎を呼び止めた。
 c. 私が知っている太郎を呼び止めた。
- (71) a. 書道部員の太郎を呼び止めた。
 b. *さっきの太郎を呼び止めた。
 c. *私にとっての太郎を呼び止めた。

(70)の連体修飾節の場合には、いずれも非制限的な連体修飾節として解釈可能であるのに対し、(71)の連体修飾句の場合には、範疇限定である(71a)を除き文法的に容認できない。先ほど取り上げた(66)も、(71bc)の類例であろう。

- (72) a. ?? 彼が想像する田舎町を訪れた。
 b. ?? 彼が想像する白川郷に宿泊した。
 c. ?? 彼が想像する長野五輪に出場した。 ((66)の再掲)

なぜ、このような現象が起こるのだろうか。これはおそらく、連体修飾要素の意味的性質により、名詞句のレベルで内包的文脈であることが明示されているからであると考えられる。すなわち、(71bc)や(72)のような連体修飾要素を受けた被修飾名詞句は、主節の意味的性質とは無関係に、内包を表示する名詞句として解釈されるために、主節述語が外延的文脈を要求する外延的述語の場合には、意味的なバッティングが起きて、文法的に成立しないということである。

連体修飾節が内包的述語と共起した場合には内包的文脈と外延的文脈で曖昧性が生じる（制限的解釈と非制限的解釈で曖昧になる）のに対し、連体修飾句が共起した場合には曖昧性が生じず、内包的文脈の解釈のみになるという事実は、この分析を裏付けるものになるだろう。

〈連体修飾節〉

- (73) さっき校庭を走っていた太郎は魅力的だ。(=(68b))

- a. さっき校庭を走っていたときの太郎は、魅力的だ。
- b. 太郎という人がさっき校庭を走っていたが、その人は魅力的だ。

〈連体修飾句〉

(74) さっきの太郎は魅力的だ。(=(69b))

- a. さっき校庭を走っていたときの太郎は、魅力的だ。
- b. *太郎という人がさっき校庭を走っていたが、その人は魅力的だ。

(73)は、内包的文脈（制限的解釈）である(73a)と外延的文脈（非制限的解釈）である(73b)で曖昧であるのに対し、(74)にはそのような曖昧性はなく、内包的文脈（制限的解釈）としての読みしかない。これは、連体修飾要素の意味的性質によって、名詞句のレベルで内包的文脈であることが明示されているからであると考えられる。

ここまで、内包的文脈は原則として内包的述語によってもたらされるものとして扱ってきたが、以上のような現象は、実際には連体修飾要素によりもたらされる場合があることを示唆している。この問題については、第 3 章で改めて論じることになる。

4. おわりに

本章の議論は、表 1 のようにまとめられる（表中の○は制限的修飾が可能であることを、×は非制限的修飾となることを表す）。

表 1 名詞句に対する制限的修飾の可否

	外延的文脈	内包的文脈		
		範疇限定	時間限定	可能世界限定
可量化名詞句	× ³¹	○	○	○
準可量化名詞句	×	×	○	○
不可量化名詞句	×	×	×	○

³¹ 強量化的な限定の場合を除く。

外延的文脈では、項となる名詞句が特定の指示対象として解釈されるため、連体修飾要素に被修飾名詞句を限定する働きはほとんどないと考えられる。一方、内包的文脈においては、項となる名詞句は不特定の属性として解釈され、集合としての被修飾名詞句を分割することが可能になる。しかし、その分割の仕方は決して均質なものではなく、連体修飾要素に応じて、カテゴリーカルな属性によって限定を行う範疇限定、時間領域における属性によって限定を行う時間限定、可能世界における属性によって限定を行う可能世界限定に分けられる。そして、そのような限定の在り方には、個体量と時間量の双方を問題にできる可量化名詞句、時間量のみを問題にできる準可量化名詞句、どちらも問題にできない不可量化名詞句といった被修飾名詞句を制限的に修飾できるかという点に関し、一定の対応関係が認められるのである。

先行研究では「定／不定」といった名詞句の指示性のみと結びつけられていた連体修飾要素の機能は、「外延／内包」、「可量化名詞句／準可量化名詞句／不可量化名詞句」、「範疇限定／時間限定／可能世界限定」といった概念装置を導入することにより、さまざまな現象の記述が容易になるだけでなく、原理的な説明が与えられることになる。

第3章 コピュラ文と連体修飾構造

本章では、コピュラ文の分析を通じて、連体修飾構造が文の解釈に与える影響を考察する。いわゆるカキ料理構文や指定文が成立するためには、名詞句に何らかの意味的な限定が加わる必要があるとされてきたが、先行研究の一般化では捉えきれない構文が存在する。本論文では、当該構文を成立させる限定作用に〈語彙的パラメータ補充〉と〈合成的パラメータ補充〉の2タイプが存在し、例外的にカキ料理構文と指定文が成立する場合の連体修飾要素は、後者のパラメータ補充であるとともに、名詞句の内包性を操作する機能を有していると主張する。これら2つのパラメータ補充の概念を導入することにより、これまで例外とされていた現象が全て説明可能となるだけでなく、カキ料理構文および指定文を一貫した成立条件によって規定することが可能になる。

1. はじめに

日本語の多重主語構文「XはYがZ」には、「象は鼻が長い」（三上 1960）等のように「XのYがZ」と対応関係を持つとされるもののほかに、「カキ料理は広島が本場だ」（いわゆる「カキ料理構文」）のように、「YがXのZだ」と対応関係を持つとされるものが存在する。

- (1) a. カキ料理は広島が本場だ。
- b. 広島がカキ料理の本場だ。

カキ料理構文の成立条件についてはいくつかの重要な先行研究があり、特に対応する「YがXのZだ」に含まれる連体修飾構造「XのZ」の意味的关系を中心に分析が進められてきた。いずれの先行研究も、Zの意味的な空所がXによって埋められることで成立すると考えている点ではおおむね一致していると言えるが、そのような分析には反例が存在する。本章で特に問題にするのは、連体修飾構造が指定文ないしカキ料理構文の成立に関与していると考えられる次

のような例である。

- (2) a. この写真が次郎にとっての洋子だ。 〈指定文〉
b. 次郎にとってはこの写真が洋子だ。 〈カキ料理構文〉
c. ?? この写真が洋子だ。
- (3) a. 袴が江戸時代のズボンだ。 〈指定文〉
b. 江戸時代は袴がズボンだ。 〈カキ料理構文〉
c. ?? 袴がズボンだ。

(2)(3)の例では、連体修飾要素の有無が指定文とカキ料理構文の成立に密接に関わっていると考えられる。

以下、本章では、先行研究で指摘されている反例も含め、例外的な指定文およびカキ料理構文の成立を可能にする「X の Z」における X と Z の意味的関係を明らかにしていく。

2. 先行研究

2.1. カキ料理構文と非飽和名詞

本節では、本章の主要な関心となるカキ料理構文と非飽和名詞との関係を見ていく。カキ料理構文を概観する前に、当該構文の特徴を捉える際に重要となってくる「指定文」と「措定文」の区別について言及しておく。¹

指定文とは、一般的に次のような文を指す。

- (4) a. この小説の作者は太郎だ。
b. (この3人の中での) A 社の社員は花子だ。

指定文は、しばしば以下のような措定文との対比において特徴付けられる。

¹ 指定文と措定文以外にも、日本語には様々なコピュラ文の分類が提案されているが (cf. 西山 2003 等)、ここでは本稿に関わるものだけを取り上げるに留める。

- (5) a. 次郎は学生だ。
- b. 鯨は哺乳類だ。

(4)と(5)はいずれもコピュラ文であるが、以下のような相違がある。第一に、(4)は「この小説の作者／A社の社員は誰かといえば、それは太郎／花子である」という探し当ての文脈で用いられるのに対し、(5)にそのような含意はなく、主語名詞句「次郎／鯨」を「学生／哺乳類」といった属性によって叙述するのみである。第二に、指定文(4)は、述語名詞句を主語に倒置し、助詞を「が」に置き換えることで同じような意味を表せる一方、措定文(5)の場合には、同様の操作を行うと文意が大きく変わってしまう。²

- (4') a. 太郎がこの小説の作者だ。
- b. 花子が(3人の中での)A社の社員だ。
- (5) a. #学生が次郎だ。
- b. #哺乳類が鯨だ。

指定文と措定文を分けるこれらの相違点は、三上(1953: 43-46)において指摘されていたほか、上林(1988: 59)、西山(2003: 144-146)等でも確認されている点である。なお、(4)と(4')のどちらを「指定文／倒置指定文」と呼ぶのかは、先行研究により一定していない。³本稿の議論においてこの区別は特に問題とならないため、以降はどちらも「指定文」という用語で統一する。また、「どのような文を指定文と見なすのか」という論点は本稿の分析とも深く関わる議論である。この問題は、3.1 節で再び取り上げる。

続いて、「カキ料理構文」について見ていく。カキ料理構文とは、三上(1960: 54)で「Xノ」を代行する「Xハ」の文例として挙げられ、野田(1982, 1996)がそ

² 厳密には「は」による指定文と「が」による指定文とでは用いられる環境が異なっている可能性があるが、ここではこの問題に立ち入らない。

³ 例えば上林(1988)、西山(1985)は(4)のようなタイプを倒置指定文、(4')のようなタイプを指定文と呼称しているが、三宅(1996)は逆である。

の意味的性質を詳細に論じた多重主語構文の一種である。

- (6) a. カキ料理ハ、広島ガ本場デス。 (三上 1960: 54)
b. 《展覧会の絵》はムソルグスキーが作曲者だ。

(6)の例(以下、便宜的に「XはYがZだ」と表示する)は、全体としてはXについて叙述する措定文でありながら、述部「YがZだ」に指定文的意味構造を持っている点に特徴がある⁴(西山 2003: 261)。

また、野田(1982: 50)によれば、(6)のカキ料理構文は「Xは」を「Xの」に置き換えた次のような指定文と意味的対応関係を持っているとされる。

- (7) a. 広島がカキ料理の本場です。
b. ムソルグスキーが《展覧会の絵》の作曲者だ。

本稿では、このような操作が統語レベルでも認められるのかどうかという問題には深く立ち入らない。⁵ここで重要な点は、「YがXのZだ」に含まれる連体修飾構造「XのZ」がどのような意味的関係にある場合でもカキ料理構文「XはYがZだ」が成立可能なわけではない、という点である。

- (8) a. 広島が中国地方の都市です。
b. ムソルグスキーがロシアの作曲家だ。
(9) a. #中国地方は広島が都市です。
b. #ロシアはムソルグスキーが作曲家だ。

(7)の「XのZだ」を「都市／作曲家」といった語に置き換えた(8)は、(9)に示

⁴ この場合の「Yが」の「が」は、典型的には「総記」(久野 1973: 28)の「が」であるが、「Yが」が中立叙述である場合もある。

⁵ このような問題を取り上げた研究として西垣内(2016)がある。西垣内(2016)の分析については、3.1節でやや詳しく言及する。

したようにカキ料理構文にすることができない。野田(1982: 53)は、このような事実を受け、カキ料理構文が成立するためには「述語名詞は、物事の重要な一側面を表す「特徴」や「中心」のような名詞でなければならない」と述べる。⁶

それに対し、西山(1990, 2003)は、Z が X にとって重要な側面を表しているとは言えない例を挙げ、野田(1982)の分析の精緻化を試みている。

(10) a. あの男がこの芝居の端役だ。

b. この芝居は、あの男が端役だ。 (西山 2003: 264)

(10)では、Z が「端役」という、必ずしも「この芝居」の重要な一側面を表しているとは言えない名詞となっているが、カキ料理構文が成立している。このような問題に対して、西山(1990, 2003)が導入したのが「非飽和名詞」である。⁷「非飽和名詞」とは、概略次のように定義される。

(11) 非飽和名詞

「X の」というパラメータの値が定まらないかぎり、それ単独では外延(extension)を決めることができず、意味的に充足していない名詞

(西山 2003: 33)

例えば「主役」のような名詞は、「どの劇の」というパラメータが明らかにされなければ外延の決定ができないため、非飽和名詞である。その他にも、「(この大会の) 優勝者」「(A 社の) 社長」「(太郎の) 友人」「(花子の) 父」「(その事故の) 原因」「(この物質の) 特徴」等は、いずれも非飽和名詞であるとされる(なお、非飽和名詞でないものは「飽和名詞」である)。⁸これを踏まえ、西山(1990,

⁶ 同趣旨の主張は、菊地(1997)によってもなされている。

⁷ 西山(1990)では「非飽和名詞句」となっている。「(非) 飽和性」という概念が、語彙レベルの概念なのか、句レベル(あるいはそれ以上)の概念なのかは議論の余地があるが、本稿では結果的に語彙レベルの概念ではないと主張することになる(三宅(2000, 2011)等の議論も参照されたい)。

⁸ 非飽和名詞の大まかなリストは、西山(2003: 269-270)に挙げられている。

2003)はカキ料理構文の成立条件を次のように規定する。

(12) カキ料理構文の成立条件

「Y が X の Z (であること)」という形をもつ文において、「X の Z」が述語名詞句であるとき、Z が非飽和名詞で、X がそのパラメータの値を表すときにかぎり、カキ料理構文「X は、Y が Z だ」を構築することができる。

(西山 2003: 297-298)

西山の規定に基づけば、先に挙げた(6)と(9)でカキ料理構文の成立可否が異なるのは、前者は Z が「本場」「作曲者」といった非飽和名詞であるが、後者は「都市」「作曲家」といった飽和名詞であるからということになる。

2.2. カキ料理構文の例外現象

前節では、先行研究で主張されているカキ料理構文の成立条件、およびそれに関わる諸概念を概観してきた。しかし、先行研究の分析には、一見反例と思われる現象が存在する。以下、(12)の例外となる 2 つの現象を概観し、問題となっている現象に対する先行研究の分析に検討を加える。

例外現象の 1 つ目は、西山(2003)が取り上げ、小屋(2011)、小屋・辻(2013)が「擬似カキ料理構文」と呼んだ次のような文である。

(13) a. これが、洋子のヴァイオリンだ。

b. 洋子は、これがヴァイオリンだ。⁹ (西山 2003: 299)

(14) a. スラム街が、私の学校だ。

b. 私は、スラム街が学校だ。 (小屋・辻 2013: 26)

(13)(14)の Z である「ヴァイオリン」や「学校」は、いずれも飽和名詞である。

⁹ 西山(2003)の判定は「?」であるが、西山(2003)自身も文脈によっては許容されることを認めているため、ここでは特に判定を示す記号を付けていない。

しかし、西山(2003: 299)も指摘するように、(13b)は例えば「洋子」が若い女の子で、板切れや細い棒を「ヴァイオリン」に見立てているような場合にはカキ料理構文として成立しうる。(14b)も、「私」の見立てによって当該構文が成立している点では同様である。つまり、これらの例は、Zが飽和名詞であってもカキ料理構文が成立する場合があることを示している。

このような例の観察を通じ、小屋・辻(2013)は擬似カキ料理構文の成立条件を次のように規定する。

(15) 擬似カキ料理構文の成立条件

- a. 「XはYをZと見なす」という見立て内容が自然であること。
- b. 上の条件が満たされた場合にのみ、「XはYがZだ」という指定文が「XにとってのZ」という解釈を可能とし、「XはYがZだ」という擬似カキ料理構文が成立する。

(小屋・辻 2013: 27)

この規定に従えば、「XのZ」に「見立て」の語用論的關係が読み取りやすければ擬似カキ料理構文が成立するということになる。

小屋・辻(2013)は、擬似カキ料理構文の成立にどのような語用論的な要因が関与しているのかを明らかにしたという点で重要である。しかし、どのような場合に「見立て」が可能となるのか、という問題は依然として残されている。ここで注目したいのが、「YがXのZだ」に対応する擬似カキ料理構文が成立するのは、意志的な主体¹⁰を表す「X(の)」が「Zだ」と共起したときに限る、という事実である。

(16) a. これが、イタリア製のヴァイオリンだ。

b. *イタリア製は、これがヴァイオリンだ。

¹⁰ ここでは、地域名や施設名であっても、なんらかの組織や共同体と見なせる場合には「意志的な主体」となりうるものとしておく。

(16)は、(13)の「洋子」を「イタリア製」という叙述的な名詞句に置き換えた例である。このような場合、どのような文脈においても擬似カキ料理構文が成立することはない。(16)の振る舞いは、「語用論的に被修飾名詞句が非飽和名詞として解釈されている」とする西山(2003)、小屋・辻(2013)の分析では、十分な説明が得られないだろう。従って、擬似カキ料理構文の成立に関して、何らかの意味論的な制約の関与を検討する必要がある。

例外現象の2つ目は、庵(1995)が指摘した次のような例である。

(17) a. 山口百恵があの頃のアイドル歌手だった。

b. あの頃は山口百恵がアイドル歌手だった。 (庵 1995: 92)

(18) a. 貴乃花が、あの時の横綱だった。

b. あの時は、貴乃花が横綱だった。 (西山 2013: 145)

(17)(18)において、Zに相当する「アイドル歌手／横綱」は飽和名詞であると考えられる。しかし、それぞれのbの例文は、全体としては「あの頃／あの時」についての措定文になっており、述部に「山口百恵がアイドル歌手だった／貴乃花が横綱だった」という指定文の意味構造を有しているため、カキ料理構文と同様の構造が成立している。庵(1995: 93)はこのような例について「「X」と「YがZだ」の間に叙述(predication)関係が成り立つか否かという運用論的(pragmatic)要因も関与しているのである」と述べている。また、西山(2013)もこの例を取り上げ、次のように結論付けている。

「あの時」は、名詞「横綱」自体を修飾する形容詞限定ではなく、「横綱である」もしくは「横綱の地位を占める」という述語「地位を占める」に掛かる副詞的限定なのである。 (西山 2013: 149-150)

すなわち、西山(2013)は「あの時の横綱」における「あの時」はパラメータの値を埋めておらず、当該の文をカキ料理構文とは見なさないという立場をとつ

ているのである。

しかし、先行研究の説明にはいずれも疑問が残る。そもそも、副詞的成分による「～の」の限定には、意味的な制約があるからである。

- (19) a. ?突然の／?あいにくの／あの時の 男性 (「男性」＝人)
 b. ?突然の／?あいにくの／あの時の 雑誌 (「雑誌」＝物)
 c. 突然の／ あいにくの／あの時の 台風 (「台風」＝自然現象)
 d. 突然の／ あいにくの／あの時の 事故 (「事故」＝出来事)

(19)に示したように、「～の」による副詞的限定は、原則として自然現象や出来事等といったイベント性を持つ名詞句以外には行えない。例外的なのが、「あの時」「今日」「3年前」等といった、時の副詞的成分である。このタイプの副詞的成分は、人や物であっても限定を加えることができる上に、(17)(18)で示したようなカキ料理構文と同様の構造を構成することが可能である。

(17)(18)の成立を運用論的（語用論的）な動機によって説明しようとするにせよ、「あの時（の）」を副詞的限定だと仮定するにせよ、なぜ時の副詞的成分である「X（の）」に限ってそれが起こるのかを十分に説明することができなくなってしまう。これらの事実を説明するためには、当該環境における「X（の）」の意味的性質をより詳しく観察しなければならないだろう。

3. 分析

例外現象に限らず、カキ料理構文の成立に関して問題となったのは、いずれも「XはYがZだ」に対応する「YがXのZだ」における「XのZ」という連体修飾構造の関係、特に「X（の）」という連体修飾要素の意味的性質であった。以下では、「XはYがZだ」の成立を可能にする連体修飾構造「XのZ」について、その内実を明らかにしていく。

3.1. 〈語彙的パラメータ補充〉と〈合成的パラメータ補充〉

「XはYがZだ」に対応する「XのZ」の分析に入る前に、2.1節でも取り上げた指定文という概念について、ここで改めて取り上げておく必要がある。指定文を統語的に分析した西垣内(2016)は、指定文が2つの項をとる「中核名詞句」(西垣内 2016: 138)から派生されるとして、中核名詞句に以下のような構造を与えている。

(20) [NP この小説 (の) [N_r 太郎 (という) [N 作者]]]

中核名詞句は、主名詞(「作者」)の意味範囲を限定(delimit)する外項(「この小説」)と、中核名詞句の意味内容を「過不足なく指定(exhaustively specify)」する内項(「太郎」)からなる。本章はコピュラ文を通じて日本語の連体修飾構造に関わる意味的な問題の一端を明らかにしようとするものであるので、統語論の技術的な問題の詳細に立ち入ることはしないが、西垣内(2016)が想定する派生関係を本稿に関わる範囲で示しておく。

(21) [FocP 太郎が [NP この小説 (の) [~~N_r 太郎 (という)~~ [N 作者]]] だ]

(22) [TopP この小説は [FocP 太郎が [NP ~~この小説 (の)~~ [~~N_r 太郎 (という)~~ [N 作者]]] だ]]

(20)の内項「太郎」が[+F]素性をチェックするために FocP (=Focus Phrase) 指定部に移動すると、(21) (= (4'a)) のような指定文が派生される。さらに、そこから NP 指定部の「この作品」が TopP (=Topic Phrase) 指定部に移動したのが(22)のようなカキ料理構文である。このように、西垣内(2016)は指定文とカキ料理構文が意味的な対応関係にあるだけでなく、統語的な派生関係にあるものと見なしているのである。¹¹

¹¹ 西垣内(2016)のような統語論的な研究の他、カキ料理構文を指定文のバリエーションと認める研究としては、メンタルスペース理論の観点から日本語のコピュラ文を論じた坂原(1990)があ

ここで注意しなければならないのが、西垣内(2016)は、中核名詞句の内項に「過不足なく指定」という規定を導入することで、指定文という用語を従来よりも狭い意味で使っているという点である。以下に(4)を再掲する。

(23)a. この小説の作者は太郎だ。

b. (この 3 人の中での) A 社の社員は花子だ。 ((4)の再掲)

西垣内(2016)において、(23a)は「太郎」が「この小説の作者」という意味内容を「過不足なく指定」しているために指定文と見なされるが、(23b)は「A 社の社員」が複数の対象を表しており、「花子」でもって「過不足なく指定」を行うことができないため、(23a)と同様の指定文とは見なされない。従って、(23a)のような例ではそのままカキ料理構文が派生されるが、(23b)のような例は「A 社」を外項にはできず、「この 3 人の中で (の)」といった限定要素を外項としてカキ料理構文を派生させなければならない。¹²

本稿では、(23)の各例を引き続き指定文と呼称するが、西垣内(2016)が示した(23ab)の差異は重要な指摘であるように思われる。西垣内(2016)の主張は、潜在的な限定要素を必要としない指定文(=(23a)、以下、便宜的に〈指定文 I〉と呼称する)からは原則としてカキ料理構文が派生可能であるが、潜在的な限定要素を必要とする指定文(=(23b)、以下、便宜的に〈指定文 II〉と呼称する)の場合には直接カキ料理構文が派生できないというものである。これは事実上、指定文 I を構成できる「X の Z」という連体修飾構造を持つ指定文であれば、Z が非飽和名詞でない場合でも、その「X の Z」に「パラメータの値＋非飽和名詞」(中核名詞句における外項と主名詞)と同質の意味的關係が認められることを示し

る。坂原(1990)の言う「同定文」には、本稿の指定文、カキ料理構文以外にも、「源氏物語は(なら) 作者は、紫式部だ」等の文が含まれる (cf. 坂原 1990: 43)。

¹² ただし、西垣内(2016)の分析においては次のような例の扱いが問題となるだろう。

(i) この芝居は田村正和が端役だ。 (菊地 1997: 97)

(i)は、「田村正和」が「この芝居の端役」を「過不足なく指定」していなくとも十分成立するように思われる。このような例から、カキ料理構文の成立(あるいは、安定した解釈)には語用論的な要因の関与があることは認めざるをえないが、本論文の議論はこれと矛盾するものではなく、意味論的要因と語用論的要因の境界を明らかにするものである。

ている。このような前提のもとで、次の例を見ていきたい。

- (24) a. この写真が次郎にとっての洋子だ。 〈指定文 I〉
b. 次郎にとってはこの写真が洋子だ。 〈カキ料理構文〉
((2ab)の再掲)
- (25) a. 明治維新が日本にとってのフランス革命だ。 〈指定文 I〉
b. 日本にとっては明治維新がフランス革命だ。 〈カキ料理構文〉

(24)(25)は、擬似カキ料理構文の分析の際に小屋・辻(2013)が想定していた「X にとっての Z」という連体修飾要素を明示化した文である。また、「にとつての」という連体複合辞は、第 2 章で論じた可能世界限定を行う連体修飾要素でもある。これらの連体修飾要素を伴った文は、Z が非飽和名詞であるかどうかにかかわらず、指定文 I 及びカキ料理構文と同様の構造を作り出すことができる。つまり、「～にとつての」という可能世界限定は、被修飾名詞句の意味的な性質を問わず、非飽和名詞のパラメータの値を埋めるのとほぼ同様の操作（西垣内(2016)の中核名詞句における外項を占める操作）を行うことが可能であると言える。

従来考えられてきたパラメータの補充は、非飽和名詞に語彙的に備わっている空所を埋める操作であるが、ここで見られるパラメータの補充は、連体修飾要素「X (の)」と被修飾名詞句 Z の意味的な合成によって臨時的に生じたパラメータの値を埋めるものである。加えて、(24a)(25a)の連体修飾要素は、取り除いてしまうと指定文そのものが成立しなくなってしまう場合があるという点でも、通常のパラメータの補充と異なる。

- (26) a. ?? この写真が洋子だ。 ((2c)の再掲)
b. ?? 明治維新がフランス革命だ。
- (27) a. 太郎が作者だ。(cf. 太郎がこの小説の作者だ。)
b. 花子が A 社の社員だ。(cf. 花子がこの 3 人の中での A 社の社員だ。)

(26)(27)の対立が示すように、(24a)(25a)の連体修飾要素は、取り除いてしまうと指定文自体の成立が困難になってしまうことがある。これは、(24)(25)の指定文構造を成立させているのが、被修飾名詞句 Z の意味的性質ではなく、連体修飾要素「X (の)」の意味的性質であるからだと考えられる。

以上の点を踏まえ、本研究では前者を〈語彙的パラメータ補充〉、後者を〈合成的パラメータ補充〉と呼んで区別する。

(28) パラメータ補充のタイプ

a. 〈語彙的パラメータ補充〉

語彙的にパラメータの補充を要求する名詞（非飽和名詞）のパラメータの値を埋める操作。

b. 〈合成的パラメータ補充〉

修飾要素と被修飾要素の意味的関係によって、被修飾名詞句に臨時的に読み込まれたパラメータの値を埋める操作。

「Y が X の Z だ」における「X の Z」にこのようなアプローチをとることにより、2.2 節で観察した例外現象に対し、一貫した説明を与えることが可能となる。まず、擬似カキ料理構文を見ていく。

(29) a. これが、洋子にとってのヴァイオリンだ。

b. 洋子にとっては、これがヴァイオリンだ。

(30) a. スラム街が、私にとっての学校だ。

b. 私にとっては、スラム街が学校だ。

(31) a. *これが、イタリア製にとってのヴァイオリンだ。

b. *イタリア製にとっては、これがヴァイオリンだ。

以上は(13)～(15)に「にとって」を挿入した文である。(29)(30)の例は指定文 I 及びカキ料理構文として容認されるのに対し、いかなる文脈でも容認できなかった

(31)は依然として容認できない。つまり、擬似カキ料理構文にも「X (の)」は意志的な主体でなければならない」という意味論的な制約があると言える。その上で、「X の Z」という連体修飾構造に対し、可能世界限定による合成的パラメータ補充の関係を語用論的に読み込みやすいか」が問題になっていたのが擬似カキ料理構文なのである。

このような複合辞を含む文は、従来カキ料理構文と見なされてこなかった。しかし、(29)(30)のような例は、「Y が X の Z だ」に対応する「X は Y が Z だ」を持ち、全体としては X を主題とする措定文でありながら「Y が Z だ」に指定文の構造を有していることから、本稿ではこのような例もカキ料理構文と見なす。このような見方をとることによって、むしろ例外的であるとされてきたカキ料理構文に対しても、一貫した説明を与えることが可能になると考えられる。

同様に、「あの頃は山口百恵がアイドル歌手だ」タイプのカキ料理構文についても、合成的パラメータ補充の概念を用いて説明をすることが可能である。

(32) a. 袴が江戸時代のズボンだ。

b. 江戸時代は袴がズボンだ。

(33) a. 麦飯があの時の主食だった。

b. あの時は麦飯が主食だった。

時の副詞的成分は、「X の Z」という連体修飾構造となることで Z が飽和名詞であっても指定文 I 及びカキ料理構文を構成することが可能である。加えて、このタイプに現れる連体修飾要素は、時の副詞的成分によって対象の時間的な現れ方を限定しているところから、本論文で言う時間限定と同一の意味的操作を行っていると言ってよい。(32)(33)のような時間限定を行う「X (の)」を合成的パラメータ補充の一種と考えることで、カキ料理構文が成立するという事実が無理なく説明される。¹³同時に、他の副詞的成分と時の副詞的成分の意味的な差

¹³ ただし、節による時間限定は、合成的パラメータ補充を構成できない。

(i) ?? 袴が、江戸時代に履かれたズボンだ。

異も分析的に捉え直すことができる。すなわち、他の副詞的成分は、「は」との結合に意味的な問題があるというだけでなく（「突然は」「あいにくは」といった表現自体が不自然）、時間限定による合成的パラメータ補充を行えないために、カキ料理構文を構成できないのである。

先行研究においては、個々の例外現象に独立した説明が与えられており、(12)の一般化に大きな問題を残していた。合成的パラメータ補充という概念の導入により、全く別の要因により説明されていたこれらの例外現象は、「X の Z」の意味的關係に基づく統一的な要因によって説明されることになる。

さらに、これらの構造をカキ料理構文であると認めるならば、カキ料理構文の一般的な成立条件は次のようなものとなるだろう。

(34) カキ料理構文の成立条件

「Y が X の Z (であること)」という形をもつ文において、「X の Z」が述語名詞句であるとき、X が Z のパラメータの値を表すときにかぎり、カキ料理構文「X は、Y が Z だ」を構築することができる。

(西山(2003: 297-298)をもとに作成。下線部は変更箇所。)

(34)において、(12)からの変更点は「Z が非飽和名詞で」という文言を取り除いたのみである。カキ料理構文を成立させる連体修飾構造「X の Z」に、被修飾名詞句である Z に由来するもの（語彙的パラメータ補充）と連体修飾要素である X に由来するもの（合成的パラメータ補充）を認めることで、個々の例外現象を同時に射程に収められるだけでなく、最小限の修正を施したより一般的な成立条件のもとで、統一的にカキ料理構文の成立条件を示すことが可能になるのである。

3.2. 〈合成的パラメータ補充〉の意味的分類と名詞句の内包性

前節の分析で、2つのタイプの合成的パラメータ補充（X が意志的な主体になるタイプと時間副詞となるタイプ）を見てきた。本節では、それぞれの合成的パ

ラメータ補充の異同、および合成的パラメータ補充と名詞句の内包性の関わりについて見ていく。なお、合成的パラメータ補充は本章で言及したものに限らない可能性がある。この点は、指定文 II の成立とも関わる興味深い問題ではあるが、詳細な議論は今後の課題としたい。¹⁴

既に述べたように、合成的パラメータ補充には可能世界限定によって成立するタイプと時間限定によって成立するタイプが存在することから、ここではそれぞれ「可能世界タイプ」および「時間タイプ」と仮称する。これらの合成的パラメータ補充は、次のような点で通常の修飾限定と異なっている。まずは通常の修飾限定から見ていく。

(35) a. 広島は中国地方の都市だ。

b. 広島は都市だ。

(35)は措定文であり、指定文とは意味論的にも統語論的にも独立の構文であると考えられる点に注意されたい。仮に(35a)のような措定文を「A は B の C だ」と表記すると、「B (の)」が通常の修飾限定である場合、「A は B の C だ」(=(35a)) が真であるならば、そこから B を取り除いた「A は C だ」(=(35b)) も常に真である。なぜなら、措定文における主語名詞句と述語名詞句の関係は、一般的に「 $A \in (B \text{ の } C)$ 」(つまり、「広島」は「中国地方の都市」の要素)であり、「B の C」で表された対象が常に C の真部分集合に相当するのであれば、「 $A \in C$ 」(「広島」が「都市」の要素)も原則として成立することになるからである。

¹⁴ 例えば、西垣内(2016)が「過不足なく指定」という意味関係がないのにもかかわらず成立するとした指定文(本章における指定文 II)には、潜在的な外項が想定されているが、それを言語化した場合に、合成的パラメータ補充と呼べる可能性がある。

(i) a. 太郎が、この 3 人の中での警察官だ。

b. この 3 人の中では、太郎が警察官だ。

西垣内(2016)が潜在的なものとして想定していた外項を明示した(ia)は、指定文 I として成立する。さらに(ib)のように、Z が非飽和名詞でなくとも対応するカキ料理構文を構築することが可能である。しかし、(ia)に見られる連体修飾要素は、取り除いても指定文が成立しなくなることはおそらくないため(むしろ連体修飾要素を明示した(ia)はやや落ち着きが悪く、ないほうが容認しやすい)、他の合成的パラメータ補充と同等に扱うのはためられる。(i)に見られる連体修飾要素の位置付けについては、今後議論していきたい。

他方、「AはBのCだ」が真であっても、「B(の)」がパラメータ補充を行っている場合、対応する「AはCだ」は必ずしも真にならない。これは語彙的パラメータ補充の場合も同様である。

(36) a. 紫式部は源氏物語の作者だ。(cf. 紫式部は平安時代の作家だ。)

b. #紫式部は作者だ。(cf. 紫式部は作家だ。)

(37) a. 笹はパンダにとってのご馳走だ。(cf. 笹はイネ科の植物だ。)

b. #笹はご馳走だ。(cf. 笹は植物だ。)

(38) a. 袴は江戸時代のズボンだ。(cf. 袴は日本の礼服だ。)

b. #袴はズボンだ。(cf. 袴は礼服だ。)

(36)～(38)の a と b は、先行文脈次第では必ずしも真理値が一致しない。「B(の)」がパラメータ補充を行っている場合、「BのC」は必ずしもCの真部分集合にならず、Cがどのような集合を表しうるかは、「B(の)」にどのような連体修飾要素が現れるのかによって変動してしまうからである。

被修飾名詞句の表示する対象を変動させてしまうという点では、いずれのパラメータ補充も同じであると言える。一方で、可能世界タイプと時間タイプの合成的パラメータ補充には、指定文 I およびカキ料理構文を構成可能にする Z の範囲に関して、次のような差異がある。

〈可能世界タイプ〉

(39) a. 毛筆が太郎にとっての鉛筆だ。

b. 太郎にとっては毛筆が鉛筆だ。

(40) a. 地元の山が次郎にとっての富士山だ。

b. 次郎にとっては地元の山が富士山だ。

〈時間タイプ〉

(41) a. 毛筆があの時代の鉛筆だった。

b. あの時代は毛筆が鉛筆だった。

(42) a. *地元の山があの時代の富士山だった。

b. *あの時代は地元の山が富士山だった。

可能世界タイプは、(39)「鉛筆」と「毛筆」のように Z と Y が集合論的に全く異なる場合や、(40)のように Z が準可量化名詞句の場合でさえも成立し、Z にほとんど意味的な制限がない。それに対し、時間タイプは、(41)のように集合論的に異なる対象であっても、時間変遷とともに対象物の機能が移ったと解釈されるような場合には成立するが、(42)のように準可量化名詞句が Z である場合には成立せず、可能世界タイプと異なっている。

では、なぜこれらの合成的パラメータ補充にこのような差異が生じるのだろうか。また、なぜ可能世界限定と時間限定を行う連体修飾要素は、合成的パラメータ補充を構成できるのだろうか。

本論文では、名詞句の内包性が合成的パラメータ補充の成立と一定の関係を持っていると考ええる。このことを説明するために、指定文という構造を、内包や外延という概念で再分析する必要がある。本論文の枠組みに基づけば、指定文は、「変域の値を指定された名詞句で内包を表示し、それに該当する外延を取り上げる文」と表現することができる。¹⁵加えて、問題になっている例外的な指定文は、連体修飾要素により、何らかのレベルで変域の拡張が起きていると考えられる。

(43) a. この写真が次郎にとっての洋子だ。

b. 袴が江戸時代のズボンだ。 ((2a)(3a)の再掲)

例えば(43a)の指定文は、「洋子」が「次郎にとっての」という可能世界限定によって変域の拡張（どの可能世界における「洋子」か）とその値の設定（値＝「次

¹⁵ 以下に取り上げるのは合成的パラメータ補充を行っている例であるが、指定文に関するこの規定は語彙的パラメータ補充を行っている場合にも当てはまる。ただし、この規定は、必ずしも指定文が持つ情報構造等の諸特徴を十全に捉えることを意図したものではない。

郎の心内世界」)を受けた上で、「次郎にとっての洋子」という連体修飾構造で表示された内包に該当するものとして、外延である「この写真」を取り上げている。また(43b)は、「ズボン」が「江戸時代の」という時間限定によって変域の拡張(どの時間領域における「ズボン」か)と値の指定(値＝「江戸時代」)を受け、「袴」を該当する外延として取り上げている。可能世界限定と時間限定は、被修飾名詞句がとりうる属性、すなわち内包によって限定を行う操作であり、そのような限定を伴う連体修飾構造は内包を表示するものとして解釈されるのである(cf. 第2章)。

(43)では、述語の連体修飾構造が内包を表示し、連体修飾要素が何らかの変域の値になっているという点が、指定文構造を構成する上で不可欠である。(43a)を例にとると、「洋子」という名詞は、裸の形ではそれ自体で単一の外延を表しており、改めて外延を指定する必要はない。しかし、可能世界限定によって、ひとたび可能世界における属性が問題にされるようになると、「洋子」は外延ではなく内包を表示するようになり、外延が単一に定まらなくなると同時に、本来「洋子」でないものを外延として取り上げることが可能になる。このような操作を経ることで、「何が(次郎によって)洋子と見なされているのか」、すなわち、何が「次郎にとっての洋子」の項を埋めているのかという指定文的な意味構造が構築可能になるのである。一方(43b)の場合、「ズボン」は単一の外延を表しているとは言えないが、指定の対象が「袴」となっており、本来「ズボン」でないものが外延として取り上げられるという点では、(43b)と同じである。ここでもまた、連体修飾要素(時間限定)によって変域の値が示されるという操作が構文の成立に不可欠なものとして機能している。「洋子」等の準可量化名詞句が、(43a)のように項を要求する環境(ガによる指定文の述語)に現れるということは、上林(1988)、西山(2003)といった指示理論や、坂原(1990)等のメンタルスペース理論に基づくコピュラ文分析では、十分な説明が得られない。名詞句の内包性に着目した本論文の枠組みでは、可能世界と時間領域の変域を操作した際に名詞句が有標な振る舞いをすることが、意味論的に妥当な形で記述可能となる。

以上の分析に基づけば、2つのタイプの合成的パラメータ補充に見られる差異

は、次のように説明することができる。可能世界タイプは、意志的な主体を拡張された変域として、特定の可能世界に Z を振り分けるのであるから、現実世界において Z と Y が集合論的に異なった対象を指していても、問題とされる可能世界において対応関係が存在してさえいれば問題ない。一方、時間タイプは、時点を拡張された変域として Z を振り分けることになるため、Z が時間経過によって指示対象の変わらない準可量化名詞句である場合には集合論的な矛盾をきたして成立しないのに対し、可量化名詞句の場合には、現時点でのある対象（例えば「鉛筆」）が他の時点の別の対象（例えば「毛筆」）としてルースに理解されるため、指定構造が構成可能になるのである。¹⁶このように、2つのタイプの合成的パラメータ補充に見られる差異は、なぜこれらが合成的パラメータ補充を構成するのかという問題に対する本章の説明とも整合的である。

4. おわりに

本研究では、主に以下の二点を主張した。

- ① 連体修飾構造の意味的な性質から、パラメータ補充には〈語彙的パラメータ補充〉と〈合成的パラメータ補充〉という2つのタイプが想定できる。
- ② 〈合成的パラメータ補充〉という概念の導入により、これまで無関係に思われていたカキ料理構文の例外現象が統一的に分析できるようになる。

また、本論文の可能世界限定と時間限定という修飾機能が、合成的パラメータ補充の成立を可能にすることも、併せて主張した。

一方で、残された課題も多い。本研究では、合成的パラメータ補充という操作を、ある種の変域の拡張と捉えて論じたが、そこで問題とされた変域の拡張という概念の内実には踏み込めていない。また、日本語にはここで取り上げた以外に

¹⁶ ただし、「横綱」のような時間とともに入れ替わり可能な名詞は、直観的には変域の拡張が行われていないように思われる。そのような見方をとった場合、「横綱」は時点をパラメータとする非飽和名詞ということになるが、詳細な議論は機会を改めたい。

も多様なコピュラ文のタイプが指摘されているが、それらが本稿の議論とどのように関わるのかといったことについては十分に検討できなかった。本章で取り上げたものと類似の意味的性質を持つ連体修飾要素が措定文においてどのような振る舞いを見せるのかという点は、部分的に第 4 章でも論じるが、より体系的なコピュラ文の記述については、今後の課題としたい。

第4章 存在文と連体修飾構造

本章では、連体修飾構造が存在文の意味解釈にどのような影響を与えるのかを問題とする。存在文の中には、従来の先行研究で指摘のなかった状態変化的な意味を表すタイプが存在する。この種の存在文は、記述的観察がなされてこなかった類型であるというだけでなく、先行研究が示す枠組みに対し、理論的にも重要な論点をもたらすものであると考えられる。ここでは、当該の存在文を〈状態変化存在文〉と呼び、記述的観察および本論文の枠組みにおける理論的位置付けを行った。結論として、状態変化存在文には、主語名詞句の連体修飾要素等に一定の意味的な制約が存在すること、さらに、それらの記述的特徴が、名詞句の内包性に基づく連体修飾構造の枠組みによって、原理的にも説明可能なものであることを示した。

1. はじめに

日本語の存在文については、金水(2002, 2006)、西山(1994, 2003, 2013)などといった先行研究によってその意味的分類と理論的体系化が進められてきた。しかし、(1)に示したような存在文は先行研究の枠組みで捉えることが難しく、さらに検討する余地があるように思われる。

- (1) a. くよくよ泣いていた太郎はもういない。
- b. 多くの登山客で賑わった富士山はもうない。

これらの状態変化的な解釈を持つ存在文は、これまで存在文の類型として指摘がなかっただけでなく、いずれの先行研究の枠組みでも扱うことが難しく、記述的・理論的に大きな問題となる。本章では、このような存在文に現れる主語名詞句の意味的特徴、およびその理論的な位置付けを本論文の枠組みに基づき明らかにする。

2. 先行研究

西山(1994, 2003, 2013)は、従来場所表現と結びつけられてきた存在文は、大きく「I 場所表現を伴うタイプ」と「II 場所表現を伴わないタイプ」に分けられると主張する。この分類は、西山が主張する「指示的名詞句／非指示的名詞句」という対立とも関係している。

I 場所表現を伴うタイプ

- (i) 場所存在文 (例：机の上にバナナがある)
- (ii) 所在文 (例：おかあさんは、台所にいる)
- (iii) 存現文 (例：おや、あんなところにリスがいるよ)

II 場所表現を伴わないタイプ

- (i) 実在文¹ (例：ペガサスは存在しない)
- (ii) 絶対存在文 (例：太郎の好きな食べ物がある)
- (iii) 所有文 (例：山田先生には借金がある)
- (iv) リスト存在文 (例：甲：母の世話をする人はいないよ。
乙：洋子と佐知子がいるじゃないか。)

(西山 2013: 245)

上記の存在文のうち、本論文の議論と直接関わるのは「場所表現を伴うタイプ」の「場所存在文」「所在文」と「場所表現を伴わないタイプ」の「絶対存在文」である。以下、それぞれの存在文に対する西山の観察を概観していく。

〈場所存在文〉

- (2) a. 机の上に本がある。
- b. 公園に女の子がいる。 (西山 2003: 395)

¹ 西山(2003)においては、「間スペース対応存在文」として再定式化されている。

〈所在文〉

- (3) a. お母さんは、台所にいる。
b. 洋子のカバンは、車のなかにある。 (西山 2003: 395)

場所存在文とは、西山によれば「空間的場所における対象の有無を表す」(西山 2003: 395)である。場所存在文である(2)における「本／女の子」等の名詞句は、「机の上／公園」という具体的な空間的場所を占める対象として捉えられる。また、この意味で、主語名詞句は世界の中のある個体を指しており、指示的名詞句である。(3)の所在文は、意味的に場所存在文とほぼ同じであると言えるが、場所存在文の主語名詞句が主として不定名詞句であるのに対し、所在文の主語名詞句は定名詞句であるという違いがある。従って、「お母さんはどこにいるの？」という問いかけに対しては、「お母さんが台所にいる」のような場所存在文ではなく、(3a)のような所在文で答えるのが適当である。

続いて、絶対存在文について見ていく。

〈絶対存在文〉

- (4) a. あなたより美しいひとはいない。
b. 鼻が短い象などいない。
c. 自分の父親を尊敬している若者が多い。 (西山 2013: 257)

絶対存在文である(4a)は、「あなたより美しいひと」がどこか空間的な場所を占めているかどうかを問題にしているわけではない。(4bc)も、物理的存在を問題にしていないという点で同じである。このように、絶対存在文は、具体的な空間的場所を占める存在について述べているのではなく、「命題関数 $F(x)$ を充足する値の有無や多少を述べる」(西山 2013: 257) 文であり、主語名詞句は世界の中に指示対象を持たない非指示的名詞句(変項名詞句)である。²

² ただし、名詞句が命題関数を表せるのかという点については、井元(2006)、金水(2015)などで批判的に検討されている。

また、西山は、絶対存在文に見られる特徴として、しばしば非存在文に言い換えができるという点を挙げている。

- (4') a. 誰もあなたより美しくない。
b. どんな象も鼻が短くない。
c. 多くの若者は、自分の父親を尊敬している。（西山 2013: 257）

(4)の存在文で表されていることとほぼ同じ内容を、(4')のような非存在文の形で言い換えることができる。これは、絶対存在文が出来事としての存在について述べているのではないからである。以上のような特徴は、場所存在文や所在文には見られず、絶対存在文に特徴的なものであると言える。

次に、西山とは異なった方向性から存在文を扱った研究として、金水(2002, 2006)を取り上げる。金水の分析は、金水(1982)に遡る日本語存在表現の通時的な研究に端を発している。従って、指示性を主眼に置いた西山の分析とは関心も動機付けも異なるが、結果的に示された体系は西山の分類ともよく対応する。

金水は、二格名詞句の必須性といった存在動詞の統語的性質から、存在文を「空間的存在文」と「限量的存在文」に分けている。

〈空間的存在文〉

所在文 ……………お父さんは（{会社／アメリカ／どこか}に）いる。

生死文・実在文 ……お父さんはもういません。

眼前描写文 ……………あ、子供が {いる／*ある}。

擬似限量的存在文 …昔、太郎という男の子がある山奥の村に
{いた／*あった}。

〈限量的存在文〉

部分集合文 ……………最近は、教科書以外の本は一冊も読まない学生が
{いる／ある}。

初出導入文 ……………昔、ある山奥の村に、太郎という男の子が
{いた／あった}。

所有文 ……………私には婚約者が {ある／いる}。

リスト存在文 ……………当時のパンの会のメンバーには、北原白秋、高村光
太郎、木下杢太郎、吉井勇らが {あった／いた}。

この中で本論文の議論と関わるのは、「空間的存在文」の「所在文」と「限量的存在文」の「部分集合文」である。以下、これらの存在文に絞って金水の分析をたどっていく。

まず、所在文について、その統語的・意味的特徴を見ていく。

〈所在文〉

(5) お父さんは ({会社／アメリカ／どこか} に) いる。(金水 2002: 481)

所在文とは、存在していることが前提となっている名詞句の指示対象を空間に位置付ける文である (cf. 金水 2002: 481)。所在文である(5)は、「お父さん」という存在前提を持った対象を、任意の空間に位置付けていると言える。動詞の統語的性質から見ると、所在文における存在動詞は場所項を必須とするので、主語と場所を項として要求する二項述語（二項存在動詞）である。また、二項存在動詞の特性として、有生主語の場合「いる」のみを選択という点が挙げられる。従って、(5)の「いる」を「ある」という存在動詞に置き換えることはできない。一方で、部分集合文はこれと異なった性質を持つ。

〈部分集合文〉³

(6) 最近、教科書以外の本は一冊も読まない学生が {いる／ある}。

(金水 2002: 483)

³ 「部分集合文」という用語は寺村(1982)による。

部分集合文は、「主として連体修飾節を用いて部分集合を言語的に設定し、その集合の要素の有無多少について述べる」（金水 2002: 483）存在文であるとされる。(6)は「教科書以外の本は一冊も読まない学生」という集合が、話題となっている可能世界においてそもそも存在するかどうかを問題にしているという点で、所在文とは異なっている。部分集合文における存在動詞は、主語のみを項とする一項述語（一項存在動詞）であり、場所名詞句は必ずしも必須ではない。ここで重要なのは、一項存在動詞が用いられる場合、有生の主語でも「いる／ある」で交替可能である、という点である。そのため、(6)の存在動詞は、有生物を主語としているにもかかわらず、「いる／ある」の両方を用いることができる。⁴

以上の記述からも明らかなように、「指示的名詞句／非指示的名詞句（変項名詞句）」という概念を用いていないものの、金水の「所在文／部分集合文」は、西山の「場所存在文・所在文／絶対存在文」とほぼ同じ類型を指していると言える（ただし、金水は統語的性質に基づいて存在動詞を分類しているため、西山の場所存在文は所在文と区別されないことになる）。

先行研究の分析は、表 1 のようにまとめられる。本論文においても西山の「場所存在文」と「所在文」の区別は問題にならないため、以下、先行研究に言及する必要がある場合を除き、用語は金水のものに統一する。

表 1 先行研究における存在文の分析

分類	主語名詞句の指示性	非存在文への言い換え	有生主語の存在動詞
所在文	指示的	不可	「いる」
部分集合文	非指示的(変項名詞句)	可	「いる／ある」

西山と金水の分析は、存在文の意味的・統語的特徴を体系的に示した研究として、極めて重要である。これらの先行研究でなされた基本的な観察は、本論文で

⁴ ただし、有生主語における「ある」の容認度は、若年層において下がってきているとされる（金水 2002: 478）。なお、論文筆者（1990 年、神奈川県生まれ）は、「いる」よりも「ある」のほうが相対的に容認しにくい、「？」を付すほどではないと考える。

も引き継いでいく。しかし、連体修飾構造の意味的性質と文解釈との関わりを問題とする本論文の立場からすれば、なお2点の課題が指摘できる。

1点目は、記述的な問題である。西山および金水で示された枠組みでは、次のような存在文に状態変化的な解釈があることを予測できない。

- (7) a. くよくよ泣いていた太郎はもういない。
- b. 多くの登山客で賑わった富士山はもうない。 ((1)の再掲)
- (8) a. (今の) 太郎は(もう) くよくよ泣いていない。
- b. (今の) 富士山は(もう) 多くの登山客で賑わっていない。

(7)は、いくつかの解釈で曖昧である。1つは、「太郎／富士山」がもうこの世に存在しないという解釈である。本論文では詳しく取り上げなかったが、これは金水(2002, 2006)における「生死文・実在文」に相当すると考えられる。そしてもう1つは、「太郎は以前くよくよ泣いていたが、今では違う」というような、「太郎／富士山」の状態変化に言及する解釈である(以下、当該の例については後者の解釈を問題とする)。⁵このような解釈の場合、(8)のような非存在文に言い換えることができる。また、(7)においては、そもそも「どこで」ということを問題とする場所名詞句は必須とされていない。以上の点から、(7)のような存在文は、空間的存在を表しておらず、部分集合文に近い性質を有していると言える。しかし、(7)には部分集合文の特徴にとどまらない振る舞いも観察される。

- (9) a. *くよくよ泣いていた太郎 (は誰であるか) を尋ねた。
- (cf. くよくよ泣いていた人 (は誰であるか) を尋ねた。)
- b. *多くの登山客で賑わった富士山 (はどれであるか) を尋ねた。
- (cf. 多くの登山客で賑わった山 (はどれであるか) を尋ねた。)

⁵ (7)は「太郎はもうここにはいない／富士山はもうここにはない」というような所在文的な解釈も不可能ではないかもしれないが、当該の表現でそのような解釈を得ることは極めて難しいと考えられるので、ここでは問題にしない。

(7) a. *くよくよ泣いていた太郎はもうない。

「尋ねた」という動詞によってその名詞句の値を問えるかどうかは、当該の名詞句が非指示的名詞句（変項名詞句）として振る舞えるかどうかの指標の 1 つである（西山 1988: 119-120）。(9)に示したように、「太郎」や「富士山」といった名詞句は「尋ねる」によって値を問うことができないため、西山の非指示定名詞句（変項名詞句）として解釈することはできない（つまり、指示的名詞句としてしか解釈できない）と考えられる。さらに、存在動詞については、(7'a)に示したように、有生の主語の場合であっても「ある／ない」を用いることができない。すると、(7)の存在文は、西山における絶対存在文、金水における部分集合文のいずれにも属さないことになる。

本論文では、(7)に対して(8)のような言い換えが可能な存在文を〈状態変化存在文〉と呼ぶことにする。ここまで見てきた状態変化存在文の特徴は、表 2 のようにまとめられる（参考のため、表 1 も再掲する）。

表 2 状態変化存在文の意味的特徴

分類	主語名詞句の指示性	非存在文への言い換え	有生主語の存在動詞
状態変化存在文	指示的	可	「いる」

表 1 先行研究における存在文の分析（再掲）

分類	主語名詞句の指示性	非存在文への言い換え	有生主語の存在動詞
所在文	指示的	不可	「いる」
部分集合文	非指示的(変項名詞句)	可	「いる／ある」

表 1 と表 2 の比較から明らかなように、状態変化存在文は所在文と部分集合文の特徴を併せ持っている。「主語名詞句の指示性」から見れば「指示的」、「有生主語の存在動詞」は「いる」のみであり、所在文に近い振る舞いを見せるが、

「非存在文への言い換え」が可能であり、具体的な空間的存在を問題にしないという点で部分集合文とも類似する。すなわち、状態変化存在文は、先行研究のどのタイプの存在文にも分類することができないのである。3 節で詳細に論じるが、状態変化存在文は連体修飾要素を必須とするなど、その成立に連体修飾構造の意味的性質が重要な役割を果たしていると考えられる。このような特徴を含め、当該の存在文をどのように位置付けるのかという点で、先行研究の分析には記述的な問題が残されていると言える。

問題点の 2 点目は、理論的な分析に関するものである。西山は一連の研究の中で、「指示的名詞句／非指示的名詞句（変項名詞句）」の対立を、存在文のみならずコピュラ文に現れる名詞句にも適用し、これらの概念の有効性を主張している。

(10) a. 〈指示的名詞句〉

彼は校庭にいる。〈所在文〉 → 太郎は医者だ。〈措定文〉

b. 〈非指示的名詞句〉（〈変項名詞句〉）

眠れない人がいる。〈絶対存在文〉 → 幹事は太郎だ。〈倒置指定文〉

西山によれば、所在文の主語名詞句は指示的名詞句であり、措定文（cf. 第 3 章）の主語名詞句も同じく指示的名詞句である。また、絶対存在文の主語名詞句は非指示的名詞句（変項名詞句）とされ、同様に変項名詞句を含む（倒置）指定文と密接な関係があることを、西山は強調する（cf. 西山 2013: 254-256 等）。

しかし、既に見てきたように、本章において問題にする状態変化存在文は、所在文と部分集合文（絶対存在文）のどちらにも分類できない。⁶従って、状態変化存在文における主語名詞句の意味論的な位置付けについて、理論的に不明確な点が残されることになる。

⁶ 唯一近い解釈を持つと考えられるのは金水の「生死文・実在文」であるが、(7)でも確認したように、状態変化存在文の解釈は生死文とは独立に存在する。

3. 分析

本節から、状態変化存在文の具体的な分析に入る。2 節で指摘した先行研究の問題点に沿って、まず状態変化存在文の記述的特徴を観察する。続いて、状態変化存在文の理論的な位置付けを、名詞句の内包性に基づく枠組みから行い、状態変化存在文に見られる記述的特徴が、本論文が提示する理論的な枠組みから自然に予測されることを示す。

3.1. 〈状態変化存在文〉の記述的特徴

状態変化存在文には、2 節で概観した以外にもいくつかの記述的特徴を指摘することができる。以下、3 つの主だった特徴を見ていく。

1 点目は、連体修飾要素が必須であるという点である。

- (11) くよくよ泣いていた太郎はもういない。(=(7a))
- a. 太郎という人はもうこの世にいない。
 - b. 以前、太郎はよく泣いていたが、今ではあまり泣かない。
- (12) 太郎はもういない。
- a. 太郎という人はもうこの世にいない。
 - b. *以前、太郎はよく泣いていたが、今ではあまり泣かない。

連体修飾要素を伴った(11)は、(11a)のような生死文の解釈と(11b)のような状態変化存在文の解釈で曖昧である。一方で、連体修飾要素を欠いた(12)は、(12a)のように生死文と解釈することはできても、状態変化存在文として解釈することができない。状態変化存在文は、状態 P から¬P に移る（あるいはその逆）であることを表す。そして、その P は原則として名詞句ではなく連体修飾要素で表されることになるため、連体修飾要素を伴わない(12)に状態変化存在文の解釈がないのは当然であると言えるが、この点については 3.2 節でより原理的な説

明を行う。⁷

2 点目は、連体修飾要素の意味的性質に関わるものである。連体修飾要素が恒常的な性質を表す場合、状態変化存在文は成立しない。

(13) この町で生まれた次郎はもういない。

- a. 次郎という人はもうこの世にいない。
- b. *以前、次郎はこの町で生まれたが、今では生まれていない。

(14) 世界最古の歴史を持つメソポタミア文明はもうない。

- a. 世界最古の歴史を持つメソポタミア文明はもうこの世にない。
- b. *以前、メソポタミア文明は世界最古の歴史を持っていたが、今では持っていない。

(13)の存在文は、「この町で生まれた」という、被修飾名詞句「次郎」についての恒常的な性質を表す連体修飾要素が現れているが、この場合には、「次郎」が「今ではこの町で生まれていない」という状態变化的な解釈を得ることはできない。(14)の場合も同様であり、「世界最古の歴史を持つ」という恒常的な意味を表す連体修飾要素が現れているために、「メソポタミア文明」に対して状態变化的な解釈をすることは不可能である。これらの事実を踏まえると、状態変化存在文が成立するためには、連体修飾要素が一時的な性質によって被修飾名詞句を限定している必要があることが分かる。

記述的特徴の 3 点目は、主語名詞句の指示性に関する制約である。状態変化存在文の主語名詞句は、準可量化名詞句、あるいはそれに相当する指示性を有していなければならない。

⁷ 連体修飾要素と並んで、「もう／すでに／今は」といった限界的な意味を表す副詞的成分も状態変化存在文の成立に関わっている。これらの副詞的成分は、「太郎はもう大人だ」(≡「太郎は大人になった」)のように、他の構文においても状態变化的な解釈を補助する働きを持つ。このような副詞的成分がほぼ義務的に用いられるのは、後述するように、そもそも存在動詞によって状態変化を表すという、意味的に有標な操作を行っているためであると考えられる。

(15) a. 子供のように駄々をこねた彼女はもういない。

(cf. 彼女はもう子供のように駄々をこねていない。)

b. 出会った頃輝いていたあの人はもういない。

(cf. あの人はもう輝いていない。)

(16) a. 武士道を信じていた日本人はもういない。

(cf. 日本人はもう武士道を信じていない。)

b. 「安かろう悪かろう」と言われた中国製品はもうない。

(cf. 中国製品はもう「安かろう悪かろう」と言われていない。)

ここまでの例は個体を表す固有名詞に限ってきたが、(15)に示したように、「彼女」(代名詞)、「あの人」(限定詞付きの名詞句)といった他の準可量化名詞句においても状態変化存在文を構成することが可能である。普通名詞が用いられている(16)についても、これらを状態変化存在文として解釈する限りにおいて、「日本人／中国製品」といった名詞句は総称的な準可量化名詞句として解釈されている。⁸以上のように、状態変化存在文の主語名詞句は、準可量化名詞句（あるいは、それに相当する名詞句）に限られる。

以上の観察をまとめると、以下のようになる。

(17) 〈状態変化存在文〉の記述的特徴

a. 主語名詞句には連体修飾要素が必須である。

b. 連体修飾要素は一時的性質を表していなければならない。

c. 主語名詞句は準可量化名詞句相当でなければならない。

そもそも、典型的な状態性述語であるとされる存在動詞が「状態変化」を表す

⁸ 総称的な名詞句をどのように位置付けるかは、先行研究によって必ずしも見解が一致しているわけではない。本論文では、(16)の状態変化存在文とほぼ同じ解釈を持つ cf. の文において、主語名詞句を個体量化できないことから（例えば「2 人の日本人はもう武士道を信じていない」≠「日本人はもう武士道を信じていない」）、総称的な名詞句を準可量化名詞句と同程度の指示性を持つものとしている。

というのは、意味的に極めて異例のことであると言える。このような異例の解釈が可能なのは、上記のような条件が全てクリアされることで、文に対し状態变化的な解釈が得られる環境が整えられるからであると考えられる（注 7 も参照）。このことは、連体修飾構造の意味的な性質が存在文の解釈に影響を及ぼしていることを示唆している。次節では、これらの状態変化存在文に見られる記述的特徴が、名詞句の内包性に基づく本論文の枠組みによって説明されることを示す。

本節の最後に、記述的特徴に関して一つ補足しておく。ここまでの例から明らかのように、状態変化存在文は否定文において成立しやすい傾向にある。しかし、肯定文において全く成立しないというわけではない（以下の例文(18b)は実例である）。

(18) a. パーティーの最中には、精一杯のおしゃれをした私がいるだろう。

b. たっぷり話したあとには、着実に上達した自分が、きっといます。

(英会話教室の広告)

(18') a. パーティーの最中には、私は精一杯のおしゃれをしているだろう。

b. たっぷり話したあとには、きっと自分は着実に上達している。

(18a)は、「今の私はおしゃれではないが、パーティーが行われている最中にはおしゃれになっている」という状態变化的な解釈を有している。同様に(18b)も、「今は英語が下手だが、たっぷり話したあとにはきっと着実に上達する」という状態变化的な解釈が可能である。実際に、否定文のものと形は異なるが、(18)はそれほど意味を変えずに非存在文である(18')へと言い換えることが可能である。先に「状態変化存在文は、状態 P から \neg P に移る（あるいはその逆）であることを表す」と述べたが、肯定文における状態変化存在文はまさに「その逆」に相当し、「状態 \neg P から P に移る」ことを表す構文であると言える。すなわち、(18)においては、「おしゃれをしていない／上達していない」($=\neg$ P) という状態から、「おしゃれをした／上達した」($=$ P) という状態変化が読み取れるのである。

(18)を状態変化存在文と認めるならば、肯定文においてもこの構文が成立する

ということになる。ただし、否定文に比べ、時間領域の設定やモダリティ要素等との共起が義務的になる等、より強い制約が働いている可能性がある。

(19) a. ?精一杯のおしゃれをした私がいるだろう。

b. ?着実に上達した自分が、きっといます。

(20) a. ?パーティーの最中には、精一杯のおしゃれをした私がいる。

b. ?たっぷり話したあとには、着実に上達した自分がいます。

(18)から時間副詞的成分を取り除いたのが(19)、モダリティ要素を取り除いたのが(20)である。これらは状態変化存在文として解釈できないというだけでなく、文法的にも不安定である。

このような差異が生じるのは、肯定文において状態变化的な解釈（状態 P に対する一P）が想定しにくいためであると考えられる。否定文（例えば、「くよくよ泣いていた太郎はもういない」）においては、述部に否定が現れるため、状態 P（「くよくよ泣いていた」）に対して、現在は一P（「くよくよ泣いていない」）にあることが形態的に明示されることになる。一方、肯定文（例えば、「パーティーの最中には、精一杯のおしゃれをした私がいるだろう」）の場合には、状態 P（「精一杯のおしゃれをした」）に対して、一P（「精一杯のおしゃれをしていない」）という状態が、そのままの形（「精一杯のおしゃれをした私がいる」）では明示されないことになる。だからこそ、現時点において状態一Pであること（Pが実現していないこと）を明示するために、時間副詞的成分やモダリティ要素が必須になるのである。肯定文の場合、これらの文法的要素の助けを借りてはじめて、Pに対する一Pという状態を表せることになる。

肯定文としての状態変化存在文については以上のように考えられるが、現時点ではこれ以上詳細な議論をする用意がない。肯定文と否定文の非対称的な振る舞いについては、部分集合文においても金水(2006: 32)が指摘している興味深い問題であるが、本論文ではこれ以上この問題に立ち入らないでおく。

3.2. 〈状態変化存在文〉の理論的位置付け

前節での記述的観察を受け、本節では状態変化存在文の理論的位置付けを行う。そのためにはまず、存在動詞そのものの意味的な性質について論じなければならない。

本論文の枠組みに基づけば、存在動詞は内包的述語の一種に分類される。以下に示すように、存在動詞は同一対象指示の他の名詞句に置き換えられない場合があり、外延的文脈と内包的文脈との間で曖昧性が生じる。

- (21) a. この大学に花子がいる。
b. 花子 = 言語学を研究する女性
c. ∴ # この大学に 言語学を研究する女性 がいる。

- (22) この大学に 言語学を研究する女性 がいる。
a. 言語学を研究するある女性が、この大学のどこかにいる。
b. 言語学を研究する女性が、誰であれこの大学にいる。

(21c)の「この大学に言語学を研究する女性がいる」は、「言語学を研究する女性」が特定の対象を表示していないとき、(21a)と真理値が一致せず、(21)は妥当な推論であると言えなくなる。また、(22)に示したように、存在文は「言語学を研究する女性」で特定の対象を問題にする場合と不特定の属性を問題にする場合とがあり、外延的文脈と内包的文脈で曖昧であると言える。(22a)の解釈は先行研究における所在文に、(22b)の解釈は部分集合文に、ほぼ対応する。すなわち、先行研究における「指示的名詞句／非指示的名詞（変項名詞句）」、「一項存在動詞／二項存在動詞」といった特徴で捉えられてきた存在文の分類は、本論文における「外延的文脈／内包的文脈」という対立として捉え直されることになるのである。ただし、一般的に内包的述語が（特に可量化名詞句を項とした場合）内包的文脈に傾きやすいのに対し、存在動詞においては、内包的文脈と外延的文脈がほとんど拮抗しており、その意味で内包的述語の中でも特異な地位を

占めていると言える（この点については、第2章でも簡単に触れた）。

さて、ここで重要なのは、状態変化存在文が内包的文脈として解釈された存在文であり、主語名詞句が表示しているのは外延（指示対象）ではなく内包（属性）であるという点である。状態変化存在文も、同一対象指示の他の名詞句への置き換え、および意味的な曖昧性という観点において、内包的文脈としての性質が観察される。

- (23) a. 花子はもういない。
b. 花子＝差別に苦しめられたキリシタン
c. ∴ #差別に苦しめられたキリシタンはもういない。

- (24) 差別に苦しめられたキリシタンはもういない。
a. 差別に苦しめられたあるキリシタンは、もうこの世にいない。
b. キリシタンは、誰であれもう差別に苦しめられていない。

(23c)を状態変化存在文として解釈する限りにおいて、(23)の推論は妥当ではない。また、(24)の文には(24ab)に示したような曖昧性がある。そのうち、不特定の解釈である(24b)は内包的文脈であると同時に、状態変化存在文の解釈に対応すると考えられる。⁹

また、次のような環境においても、状態変化存在文が内包的文脈に対応することが確かめられる。

- (25) a. 10年前の太郎はもういない。
(cf. 太郎はもう10年前のようではない。)
b. あの時代の富士山はもうない。
(cf. 富士山はもうあの時代のようにではない。)

⁹ なお、特定の解釈（外延的文脈）に対応するのは生死文である。

(26) a. *10 年前の太郎が歩いていた。

b. *あの時代の富士山を訪れた。

状態変化存在文は時間副詞的な連体修飾句によって時間限定を行っても成立する。第 2 章でも論じたように、この種の連体修飾要素を伴った場合には、名詞句のレベルで内包的文脈であることが強制されるため、(26)のような外延的文脈に現れることができない。つまり、(25)のように「10 年前の／あの時代の」といった連体修飾要素と共起できることは、状態変化存在文は内包的文脈を構成していることの傍証となるのである。

以上を踏まえ、本論文では状態変化存在文における主語名詞句を、「時間領域における内包を表示する名詞句」と規定する。このような分析により、(17)の記述的特徴に原理的な説明が与えられることになる。まず、(17a)「主語名詞句には連体修飾要素が必須である」という点から説明する。準可量化名詞句が裸の形では外延的文脈しか構成できないという事実は、既に第 2 章で指摘した。

(27) a. 太郎／彼 が好きです。 (第 2 章(31b)の再掲)

b. 警察官が好きです。

(27a)は、「好きだ」という内包的述語が用いられているのにもかかわらず、内包的文脈として解釈することはできない。一方、(27b)のように可量化名詞句が用いられている場合は、裸の形でも「誰であれ、警察官が好きだ」というような内包的文脈として解釈することができる。このような差異は、「太郎／彼」といった準可量化名詞句が、裸の形では何ら属性を示すことができず、外延を表示するのみであるからだと考えられる。このことから、(17a)の振る舞いが説明される。つまり、状態変化存在文においては、準可量化名詞句が裸の形では内包的文脈を構成できないために、連体修飾要素が必須となっているのである。

続いて、(17b)「連体修飾要素は一時的性質を表していなければならない」という点を説明する。これは、状態変化存在文の主語名詞句に対し、連体修飾要素

が時間限定を行わなければならないからである。

(28) a. 沢山の雪が積もった白川郷はとても魅力的だ。〈制限的解釈〉

b. #外貨の獲得が見込める白川郷はとても魅力的だ。〈非制限的解釈〉

(第2章(57b)(56b)の再掲)

時間限定は、被修飾名詞句を時間領域における現れ方で限定する制限的修飾であり、連体修飾要素は(28a)のように一時的性質を表していなければならない。(28b)のように恒常的性質を表している場合には、範疇限定としてしか解釈できず、単一の外延しか持たない準可量化名詞句を修飾しても、非制限的な解釈となる。以上の事実から、(17b)が説明される。状態変化存在文は、主語名詞句の状態変化、すなわち、時間経過によって変化する属性を問題にする存在文である。従って、被修飾名詞句の時間領域における現れ方を内包的に表示する時間限定が義務的に行われることは、ごく自然なことだと言える。¹⁰

最後に、(17c)「主語名詞句は準可量化名詞句相当でなければならない」という点を説明する。これは、時間限定を受ける被修飾名詞句が、基本的には準可量化名詞句に限られるからであると考えられる。

(29) a. ぬるくなったビールはまずい。

(cf. ぬるくなったときのビールはまずい。)

¹⁰ ただし、状態変化存在文に現れる連体修飾要素は、他の環境に現れる連体修飾要素と比べ、より広い範囲の時間限定を行える可能性がある。

(i) a. 誰に対しても優しい太郎は私の憧れだ。

b. 誰に対しても優しい太郎はもういない。

「優しい」のような連体修飾要素は、(ia)「憧れだ」のような内包的述語と共に起しても、準可量化名詞句「太郎」に対して時間限定を行うことはできない。一方、(ib)のように状態変化存在文としてであれば、(やや判定は微妙であるものの)「優しい」が「太郎」に対して時間限定を行うことが可能であるように思われる。このことから、状態変化存在文の場合、被修飾名詞句が持つ「内在的性質」だけでなく、被修飾名詞句の「外在的性質」(評価)によっても、時間限定が可能であると言える。このような差異が生じるのは、状態変化存在文が「もう」等の限界的な意味を表す副詞と共に起することで、連体修飾要素に対し時間限定的な解釈が得られやすくなっているためであると考えられるが、詳細は今後の課題としなければならない。

b. あの頃の日本人は勤勉だ。

(29)は可量化名詞句が時間限定を受けた例であるが、いずれも総称的な解釈になっており、準可量化名詞句に相当する。このようなことが起こるのは、対象の異なった時間領域における属性に言及するためには、既に対象を個体（総称を含む）として同定し、判断の対象として把握していなければならないからであると考えられる。(29)のような現象から、(17c)の特徴にも説明が与えられる。すなわち、状態変化存在文の主語名詞句が準可量化名詞句でなければならないのは、時間限定を受ける被修飾名詞句が義務的に準可量化名詞句、あるいはそれに相当する指示性を有する名詞句でなければならないからである。

以上、状態変化存在文の主語名詞句を、「時間領域における内包を表示する名詞句」と見なし、議論を進めてきた。状態変化存在文においては、準可量化名詞句を内包的に解釈しなければならないため、連体修飾要素が必須となる。さらに、連体修飾要素は時間限定を行っていないなければならないため、原則として一時的性質を表すものしか現れず、それに伴い被修飾名詞句は準可量化名詞句相当のものとして解釈される。「時間領域における内包を表示する名詞句」を主語名詞句とする存在文が、対象の時間領域における属性の有無に言及する文として解釈されることは、ごく自然なことである。このように、本論文の枠組みに基づけば、内包的文脈および時間限定という概念から状態変化存在文という類型が予測可能であるだけでなく、当該の構文に観察される記述的特徴に対し、原理的な説明を与えることが可能になるのである。

加えて、以上のような分析は、状態変化存在文以外にも適用することができる。ここではそのような構文として、いわゆる措定文を取り上げる（以下、措定文において名詞述語と形容詞述語は区別しない）。

〈措定文〉

(30) a. 雪国で生まれ育った花子は美人だ。

b. 輝かしい経歴を持つ次郎は優しい。

(31) a 舞台に立っている花子は美人だ。

b. 子供たちと接する次郎は優しい。

(30)では、恒常的性質を表す連体修飾要素が用いられており、(31)では、一時的性質を表す連体修飾要素が用いられている。例えば(30a)は、「花子は雪国で生まれ育っていて、美人である」というような非制限的な解釈しかない。一方、(31a)は、「花子が舞台に立っていて、美人である」という非制限的解釈と、「花子は演技中以外では凡庸に見えるが、舞台に立っているときには美人に見える」というような制限的な解釈が可能である。(30b)と(31b)の解釈も、これらに準ずると言ってよいだろう。

上林(1988)、西山(2003)等の先行研究では、これらの措定文はいずれも区別されることはない。しかし、(30)と(31)の措定文は、上述のように曖昧性に関して異なっており、意味論的に区別することが可能である。これらの措定文が持つ曖昧性の差異を(30a)(31a)を例にして示すと、次のようになる。

(32) 雪国で生まれ育った花子は美人だ。(=(30a))

a. 花子は雪国で生まれ育っており、美人だ。

b. *花子は雪国で生まれ育った場合に限って、美人だ。

(33) 舞台に立っている花子は美人だ。(=(31a))

a. 花子は舞台に立っており、美人だ。

b. 花子は舞台に立っている場合に限って、美人だ。

(30)のタイプの措定文には、(32a)のように主語名詞句「花子」で指示された対象を問題にする解釈しか存在せず、(32b)のように解釈することはできない。一方、(31)のタイプの措定文では、(33a)のような主語名詞句で指示された対象を問題にする解釈だけでなく、(33b)のような「花子」の属性を問題にする解釈が可能である。以下、(32)のような曖昧性を持たない措定文を〈個体措定文〉、(33)のような曖昧性を有する措定文を〈場面措定文〉と呼び、区別しておく。個体措

定文は、主語名詞句の時間的な内部構造に言及しない措定文であり、場面措定文は、ある時間領域において対象が有する属性を問題にする措定文である。

では、場面措定文に限って上記のような曖昧性が生じる要因は何であろうか。それは、連体修飾要素が時間限定を行うことが可能であるかどうか、すなわち、主語名詞句が「時間領域における内包を表示する名詞句」を表示できるかどうかであると考えられる。個体措定文である(30)では、連体修飾要素が「雪国で生まれ育った／輝かしい経歴を持つ」等の恒常的な性質を表しているために、時間限定の機能がない（範疇限定の機能しかない）。従って、主語名詞句「雪国で生まれ育った花子」は外延的文脈（＝(32a)の解釈）としてしか解釈されず、「時間領域における内包を表示する名詞句」となることはない。それに対し、場面措定文である(31)では「舞台に立っている／子供たちと接する」といった一時的な性質を表しているために、時間限定をすることが可能になっている。これにより、主語名詞句「舞台に立っている花子」を、外延的文脈（＝(33a)の解釈）のみならず内包的文脈（＝(33b)の解釈）で解釈し、「時間領域における内包を表示する名詞句」と見なすことが可能になっているのだと考えられる。

以上の観察から、状態変化存在文の主語名詞句に関する「時間領域における内包を表示する名詞句」という規定は、場面措定文の主語名詞句にも適用可能であると考えられる。個体措定文である(30)と場面措定文である(31)に見られた対立は、基本的に次のような存在文における対立と並行的である。

(34) この町で生まれた次郎はもういない。

- a. 次郎という人はもうこの世にいない。
- b. *以前、次郎はこの町で生まれたが、今では生まれていない。

((13)の再掲)

(35) 小さなことで怒っていた次郎はもういない。

- a. 次郎という人はもうこの世にいない。
- b. 以前、次郎は小さなことで怒っていたが、今では怒らない。

存在文においても、恒常的性質を表す連体修飾要素が現れている(34)では曖昧性が生じず、生死文(=(34a))としてしか解釈できない。他方、一時的性質を表す連体修飾要素が現れている(35)では生死文(=(35a))と状態変化存在文(=(35b))の2つの解釈が生じる。このような差異は、(32)(33)で見た個体措定文と場面措定文の対立と同質のものであると考えられる。(34)の主語名詞句「この町で生まれた太郎」は、連体修飾要素に恒常的性質を表すものが現れているために「時間領域における内包を表示する名詞句」と解釈できない(外延的文脈としてしか解釈できない)。それに対し、(35)の主語名詞句「小さなことで怒っていた次郎」は、連体修飾要素に一時的性質を表すものが現われているために「時間領域における内包を表示する名詞句」としての解釈が可能(外延的文脈と内包的文脈で曖昧)である。すなわち、生死文と個体措定文、状態変化存在文と場面措定文は、主語名詞句の意味的性質を介し、一定の対応関係にあると言えるのである。

以上のように、連体修飾構造の意味的性質が与える影響は、存在文に限らず、コピュラ文にも観察することができる。「時間領域における内包を表示する名詞句」は、存在文に現れた場合には状態変化存在文として、コピュラ文に現れた場合には場面措定文として解釈されることになる。これらの現象は、連体修飾要素の持つ限定機能の差異が、存在文やコピュラ文といった構文全体の解釈に影響を及ぼすことの証左となる。

4. おわりに

本論文の主張をまとめると、以下のようになる。

- ① 存在文には、主語名詞句の状態変化を表す状態変化存在文という類型があり、連体修飾要素や主語名詞句の指示性に意味的な制約がある。
- ② 存在動詞を内包的述語の一種として捉えることで、状態変化存在文の理論的位置付けを明確にできるだけでなく、状態変化存在文に見られる記述的特徴に対し、原理的な説明を与えることが可能になる。

状態変化存在文は、従来記述的に指摘がなく、先行研究の枠組みではその理論的な位置付けも容易ではなかった。それは、状態変化存在文の成立が連体修飾要素の意味的性質と密接な関わりを持ち、連体修飾構造と文解釈全体との相互作用を問題にしなければならなかったからである。状態変化存在文に見られる連体修飾要素等の意味的制約は、連体修飾構造と名詞句の内包性との対応関係を扱った本論文の枠組みによって、理論的な説明が与えられることになる。

しかし、本章で扱いきれなかった論点も多い。ここでは主として時間領域における属性を問題とする内包性について議論したが、一方で、可能世界における属性を問題とした場合に、存在文がどのような解釈を受けるのかという点については論じることができなかった。実際、次のような存在文においては、主語名詞句が可能世界限定を受けているように思われる。

(36) (自分の記憶と全く違う様子の太郎を見て。)

a. ここに私が知っている太郎はいない。

(期待していた富士山に登ってみて。)

b. そこに私が夢見た富士山はなかった。

(36)は、いずれも外延的文脈と内包的文脈の間で曖昧であり、本章の状態変化存在文に関する議論と並行的に捉えられる面がある。このような存在文の位置付けについては、さらに考察を深めていく必要がある。

その他、先行研究における存在文の体系と、本論文における「外延／内包」に基づく存在文の分類が、どのように対応するのかという点についても、十分に議論できなかった。例えばリスト存在文などの主語名詞句がどのように解釈されているのか等、興味深い問題が多々残されているが、いずれも今後の課題としない。

第5章 可能世界における属性を問題とする述語

本論文においては、名詞句の内包性が問題にされる環境を、可能世界における属性または時間領域における属性が問題にされる環境として捉えている。このような枠組みに基づき、本章では、可能世界における属性を問題にする内包的述語を分析し、主節述語が連体修飾構造の意味解釈に与える影響を考察する。まず、内包的述語と呼べるものの中でも、その意味的な違いによって、項に現れる連体修飾要素の限定可能な範囲が異なる場合があることを示す。その上で、そのような意味の差は、一方の内包的述語が、連体修飾要素を義務的に可能世界における属性として解釈しているために生じていると考えられることを、本論文の概念装置を用いて説明する。

1. はじめに

連体修飾句（助詞「の」を伴う修飾句）については、いくつかの先行研究があるが、どのような連体修飾句がどのような名詞句を意味的に限定可能であるかという観点からの分析は十分に行われているとは言えない。一方で、内包的述語の分析を進める際には、多様な連体修飾句に見られる意味的相違を検討することが、重要な足掛かりとなる。なぜなら、連体修飾句は、特定の環境下で被修飾名詞句を制限修飾できるかという点において対照的な振る舞いを見せることがあり、そのような振る舞いの差異が主節述語の意味的性質と密接に関わっていると考えられるからである。

- | | | |
|-----|---------------------------------|----------|
| (1) | a. <u>仕事場の太郎</u> は真面目だ。 | 〈制限的解釈〉 |
| | b. <u>スーツ姿の花子</u> はかっこいい。 | 〈制限的解釈〉 |
| (2) | a. <u>医者<u>の</u>太郎</u> は真面目だ。 | 〈非制限的解釈〉 |
| | b. <u>小説家<u>の</u>花子</u> はかっこいい。 | 〈非制限的解釈〉 |

(1a)の連体修飾句は、「普段はだらしがないが、仕事場にいるとき、太郎は真面

目だ」というように、定指示名詞句「太郎」を制限的に修飾することが可能である。(1b)も、「スーツ姿でいるときに限ってカッコいい」と解釈できる点では同じである。すなわち、これらの連体修飾句では、本研究でいうところの準可量化名詞句が時間限定を受けていると言える。それに対し、(2a)の連体修飾句は、「太郎は医者という職業で、真面目だ」というような、非制限的な解釈しかできない。これは(2b)も同様である。

一方で、次のような環境においては、いずれの連体修飾構造も制限的に解釈される。

- (3) a. 私は仕事場の太郎を思い浮かべた。 〈制限的解釈〉
 b. 次郎にはスーツ姿の花子など信じられない。 〈制限的解釈〉
- (4) a. 私は医者の太郎を思い浮かべた。 〈制限的解釈〉
 b. 次郎には小説家の花子など信じられない。 〈制限的解釈〉

(3)と(4)は、(1)と(2)の主節述語を「思い浮かべる」「信じる」に置き換えた例である。(3)の連体修飾句は、依然として制限的な解釈が可能であり、この限りでは特に問題とならない。しかし、(2)の環境では非制限的にしか解釈できなかった連体修飾句は、(4)では制限的に解釈することが可能となっている。このことは、連体修飾句のみならず、主節述語の持つ意味的性質も、連体修飾構造の解釈に影響を及ぼしていることを示唆している。

(1)～(4)のような対立を踏まえ、本章では次のような問題提起を行う。

- i. それぞれの連体修飾句にはどのような意味的な差異が見られるのか。
- ii. 連体修飾句による準可量化名詞句の制限的修飾を可能にする主節述語の意味的性質はどのようなものか。

以下、i と ii の問いに答える形で、議論を進めていく。

2. 先行研究

連体修飾句を意味的な限定が可能であるか(「制限的用法」か「非制限的用法」か)という観点から明示的に論じた研究は、管見の限りあまりない。¹例外的に、西山(2003)は、「NP₁のNP₂」という構造について、対象を制限的に修飾できるかという観点から、やや詳しく言及している。

西山(2003)は、意味論的観点から「NP₁のNP₂」という構造を以下のタイプに分類する。

表 1 西山(2003)による「NP₁のNP₂」の分類²

分類		例 ³
タイプ A	NP ₁ と関係 R を有する NP ₂	「太郎の教科書」「研究室のあの人」 「友人の鞆」
タイプ B	NP ₁ デアル NP ₂	「男性の研究者」「大学生の花子」 「重病の友人」
タイプ C	時間領域 NP ₁ における、NP ₂ の指示対象の断片の固定	「昨日の次郎」「大正時代の日本人」 「3 年前の彼」
タイプ D	非飽和名詞 (句) NP ₂ とパラメータの値 NP ₁	「筑波大学の学長」「事故の原因」 「太郎の友人」
タイプ E	行為名詞 (句) NP ₂ と項 NP ₁	「言語学の研究」「方言の調査」 「ゴジラの出没」

表 1 のうち、「タイプ D」と「タイプ E」は、被修飾名詞句が「非飽和名詞 (句)」
「行為名詞 (句)」であるという特殊な語彙指定を受けており、「太郎」「富士山」

¹ 比較的大きな枠組みのもとで連体修飾句の分析を試みた研究としては大島(1998, 2010)、丹羽(2010)などがあるが、いずれも「制限的／非制限的」という観点からの分析は行われていない。

² ここで取り上げている例は、必ずしも「の」の用法を網羅的に挙げたものではない。例えば、「北の宮沢賢治、南の新美南吉」「イワンのバカ」などの例は、いずれの分類にも該当しないように思われる。また、西川(2013)、西山(2013)ではこれに加えて「タイプ F」「タイプ G」という分類が立てられているが、本研究の議論に影響はないので、ここでは特に取り上げない。

³ 例は本論文筆者による。

等の定指示名詞句（準可量化名詞句）は現れることはない。従って、当面議論の対象からは外れることになる。以下、西山(2003)のタイプ A～C について、具体例とともに見ていく。

タイプ A

- (5) a. この会社の山田太郎
b. 二階の彼女 (西山 2003: 17)

タイプ A は、「NP₁ と関係 R を有する NP₂」という関係にある連体修飾構造である。例えば(5a)は、文脈次第で「この会社にいる山田太郎／この会社に勤めている山田太郎／この会社を設立した山田太郎／…」というように、語用論的に多様な解釈を持ちうる。この点は(5b)も同様である。従って、タイプ A に分類される(5)は、これ自体が意味論的に曖昧 (ambiguous) なのではなく、不明瞭 (vague) なのであり、意味論的には「NP₁ と関係 R を有する NP₂」という以上のことは表していないと言える。

タイプ B

- (6) a. 運転手の田中君
b. 病気の君 (西山 2003: 23)

続いて、タイプ B に分類されるのは、(6)のような、「NP₁」と「NP₂」の間に叙述関係が認められる連体修飾構造である。タイプ B は、タイプ A と異なり、語用論的に多様な解釈にはなりえず、「NP₁ デアル NP₂」（「運転手デアル田中君／病気デアル君」）という意味的な関係が成立している。

タイプ C

- (7) a. 東京オリンピック当時の君
b. 着物を着た時の洋子 (西山 2003: 31)

タイプ C には、(7)のような例が該当する。タイプ C は、原則として指示詞付きの名詞句や固有名詞、代名詞といった定指示名詞句が被修飾名詞句となり、「時間領域 NP₁における、NP₂の指示対象の断片の固定」を行う。例えば(7)は、「君／洋子」という対象について、「東京オリンピック当時／着物を着た時」という時間領域の断片を取り出している。ここまでの説明からも明らかなように、タイプ C に現れる連体修飾句は、本論文の用語で言えば、「時間限定を行う連体修飾句」ということになるだろう。

以上、西山(2003)のタイプ A～C の意味的特徴について見てきたが、それでは、制限的修飾の可否という点から見て、これらの連体修飾構造はどのようにまとめられるのだろうか。西山(2003)は、タイプ A・B について、NP₂が「定指示名詞句」の場合、修飾語 NP₁は非制限的になるとする（西山 2003: 18, 23）一方で、タイプ C の場合には「NP₁は NP₂にたいしてある限定を与えているという意味ではむしろ制限的な修飾語なのである」（西山 2003: 32）と述べる。

実際に、次のような例では、定指示名詞句を被修飾名詞句とするタイプ A・B は非制限的になり、タイプ C は制限的となっている。

タイプ A

- (8) a. 隣の部屋のあの妙な音が嫌でたまらない。
b. ぼくは、あの妙な音が嫌でたまらない。 （西山 2003: 18）

タイプ B

- (9) a. 運転手の田中君は誰にでも優しい人だ。
b. 田中君は誰にでも優しい人だ。 （（西山 2003: 23）をもとに作成）

タイプ C

- (10) a. 東京オリンピック当時の君はあか抜けていない。
b. #君はあか抜けていない。 （（西山 2003: 31）をもとに作成）

(8)～(10)の a について、連体修飾要素を取り除いた b と比較した際に、(10)では元の文意が大きく変わっているのに対し、(8)(9)ではそのような変化は見られ

ない。このような西山(2003)の分析から、タイプ C を除き、「被修飾名詞句が定指示名詞句である場合に、連体修飾要素は非制限的になる」という一般化（すなわち、第 2 章で見た井上(1976a)、金水(1986a)等の連体修飾節における一般化）が、一見すると連体修飾句にも適用可能であるかのように思える（西山(2003)が「定指示名詞句」としているものは、事実上、本論文における「準可量化名詞句」を指すことから、以下ではこの用語に統一する）。

しかし、このような分析には、少なくとも次に挙げる 2 点の問題が残されていると考えられる。まず、準可量化名詞句を被修飾名詞句とするタイプ A・B の連体修飾要素であっても、実際には制限的に解釈されることがあるという点が挙げられる。

タイプ A

(11) a. 仕事場の太郎は真面目だ。 ((1a)の再掲)

b. 教室の花子はおとなしい。

(11') a. #太郎は真面目だ。

b. #花子はおとなしい。

タイプ B

(12) a. スーツ姿の花子はかっこいい。 ((1b)の再掲)

b. 裸足の太郎は危なっかしい。

(12') a. #花子はかっこいい。

b. #太郎は危なっかしい。

(11)は、「仕事場にいる太郎／仕事場で働く太郎／仕事場を指揮する太郎／…」
「教室にいる花子／教室で勉強している花子／教室で寝ている花子／…」など
ように語用論的に多様な解釈を許すタイプ A の例である。しかしながら、ここ
では、「仕事場／教室にいるときに限って真面目だ／おとなしい」というような
制限的解釈が可能である。また、(12)は「スーツ姿デアル花子／裸足デアル太郎」
と解釈できるタイプ B の例であると考えられる。こちらも、「スーツ姿でいる場

合にかっこいい／裸足でいる場合に危なっかしい」といった制限的解釈ができる。(11)(12)の主節述語は本論文の内包的述語に該当し、このような内包的文脈が構成可能な環境においては、タイプ A・B も制限的解釈（ここでは時間限定）が可能になるのである。さらに、(11)(12)のような環境においては、タイプ A・B が被修飾名詞句の「時間領域の断片」を取り出しているとも考えられることから、タイプ C との関係も明らかにされなければならない。以上の事実は、連体修飾句による準可量化名詞句の限定可否という点に関して、西山(2003)の分類は必ずしも対応しないということを示しており、連体修飾句の分析に課題が残されていると言える。

課題の 2 点目として、西山(2003)の分析が主節述語の影響を考慮していないという点が挙げられる。冒頭の例を再掲する。

- | | |
|---|----------|
| (13) a. <u>医者</u> の <u>太郎</u> は真面目だ。 | 〈非制限的解釈〉 |
| b. <u>小説家</u> の <u>花子</u> はかっこいい。 | 〈非制限的解釈〉 |
| (14) a. 私は <u>医者</u> の <u>太郎</u> を思い浮かべた。 | 〈制限的解釈〉 |
| b. 次郎には <u>小説家</u> の <u>花子</u> など信じられない。 | 〈制限的解釈〉 |
- ((2)(4)の再掲)

1 節でも述べたように、(13)の環境においては、先ほど制限的修飾の例として取り上げた(11a)(12a)と同一の主節述語を用いているのにもかかわらず、連体修飾要素はいずれも非制限的にしか解釈できない。しかし一方で、同様の連体修飾構造が(14)のような主節述語の項に現れた場合、制限的に解釈することが可能になる。(14a)は、単に「太郎」という対象を想起するという意味ではなく、「医者である太郎」を想起するという意味で解釈可能であり、(14b)は、例えば「いつも見ている姿とは違った、小説家である花子」の存在を信じられないというふう

に解釈できる。実際に、(14)は、連体修飾要素を取り除いた次の例と明らかに文意が異なっており、この点でも(13)と異なり制限的な解釈となっていることが確認される。

- (13') a. 太郎は真面目だ。
 b. 花子はかっこいい。
- (14') a. #私は太郎を思い浮かべた。
 b. #次郎には花子など信じられない。

このような対照的な振る舞いは、主節述語の意味的な性質に起因していると考えられる。従って、連体修飾句の解釈の違いをもたらす主節述語（内包的述語）の内実を明らかにする必要がある。

3. 分析

2 節までの検討に基づき、以下、冒頭でも掲げた次の二つの問題について考察を加えていく。

- i. それぞれの連体修飾句にはどのような意味的な差異が見られるのか。
- ii. 連体修飾句による準可量化名詞句の制限的修飾を可能にする主節述語の意味的な性質はどのようなものか。

3.1. 連体修飾句の意味的な差異

まず、i について見ていく。連体修飾句の中で、同一の主節述語であっても連体修飾要素の解釈に差が生じるのはなぜであろうか。

- | | |
|--------------------------------------|----------|
| (15) a. <u>仕事場の太郎</u> は真面目だ。 | 〈制限的解釈〉 |
| b. <u>スーツ姿の花子</u> はかっこいい。 | 〈制限的解釈〉 |
| (16) a. <u>医者</u> の <u>太郎</u> は真面目だ。 | 〈非制限的解釈〉 |
| b. <u>小説家</u> の <u>花子</u> はかっこいい。 | 〈非制限的解釈〉 |
- ((11a)(12a)(13)の再掲)

(15)と(16)の連体修飾句に関して注目すべきは、これらが「一時的性質／恒常

的性質」という点において対立していることである。例えば(15a)は、連体修飾要素を制限的に解釈する限りにおいては、「仕事場の」が「仕事場にいる」というような一時的性質と見なされる。⁴また、(15b)の連体修飾要素「スーツ姿」も、「花子」が常に「スーツ姿」でいるという状況は考えにくく、「花子」に備わった一時的性質と見なせる。すなわち、本論文の用語で読み替えるならば、これらの連体修飾要素は、時間限定を行いうる可能性を持っているということになる。他方、(16)の連体修飾要素「医者／小説家」は、「太郎／花子」の一時的性質とは見なせない。これらの性質は、時間経過によって容易に着脱できるものではなく、原則として被修飾名詞句に恒常的に備わっているものと解釈されると考えられる。本論文の用語で言えば、時間限定を行うことはできず、範疇限定のみを担う連体修飾要素であるということになる。

このことは、次のような言語事実からも確認できる。

(17) a. 太郎は珍しく仕事場にいる。⁵

b. 花子は珍しくスーツ姿だ。

(18) a. *太郎は珍しく医者だ。

b. *花子は珍しく小説家だ。

(17)と(18)の対立が示すように、(15)の連体修飾要素による叙述は、「珍しく」等のような述語が一時的性質であることを明示する副詞的成分と共起可能であるのに対し、(16)の連体修飾要素による叙述ではそれができない。

そして、重要なのは、このような対立がそのまま準可量化名詞句を限定可能であるかということと対応するという点である。すなわち、準可量化名詞句に対する連体修飾句の「制限的／非制限的」解釈の対立は、その連体修飾句が時間限定を行いうる（一時的性質を表しうる）か、範疇限定のみを行う（原則として恒常

⁴ 厳密にはこのような解釈に限られるわけではないが、ここでは議論を簡略化して語用論的に読み込みやすいものを例示している。

⁵ (15)の連体修飾要素は、制限的に解釈される際、事実上動詞述語相当の意味を表していると考えられるため、ここではこのようなパラフレーズを行った。

的性質を表す) かに左右されるのであって、西山(2003)におけるタイプ A・B と
いった分類と対応するわけではないのである。従って、i の問いについては次の
ような答えが示せる。

(19) 連体修飾句による準可量化名詞句の制限的修飾

連体修飾句には、時間限定を行うことが可能なもの（一時的性質を表せるもの）と
範疇限定しか行えないもの（恒常的性質を表すもの）とが存在し、前者においてのみ、
準可量化名詞句を制限的に修飾できる。

(19)は、何も連体修飾句に限ったことではなく、節による修飾を含む連体修飾
要素全般に当てはまることである。

(20) a. 身長の高い花子はかっこいい。 〈非制限的解釈〉

b. 田舎で生まれた太郎は真面目だ。 〈非制限的解釈〉

(20)では、節が準可量化名詞句を修飾しているが、恒常的性質を表しているた
めに、非制限的にしか解釈することができない。これは、連体修飾句の場合とま
ったく並行的な振る舞いだと言える。

では、連体修飾句による修飾は、連体修飾節による修飾と同質のものと見なし
て良いのであろうか。このような問題と関連して、本節の最後に、西山(2003)の
タイプ C および関連するデータについて触れておく。(15)と(16)に見られる「制
限的／非制限的」の対立が「一時的性質／恒常的性質」に起因するものだとすれ
ば、西山(2003)のタイプ C はどのように位置付けられるのだろうか。

タイプ C

(21) a. 東京オリンピック当時の君

b. 着物を着た時の洋子 ((7)の再掲)

タイプ C の重要な特徴は、被修飾名詞句と連体修飾要素との間に、いかなる叙述関係も成立しないということであろう。(21)では、「君は東京オリンピック当時だ／洋子は着物を着た時だ」といった叙述は成立しない。⁶一方で、(20)は依然として準可量化名詞句を制限修飾していることから、連体修飾句には、時間限定でありながら、「一時的性質／恒常的性質」という枠に捉われない限定の仕方があるということになる。⁷

「一時的性質／恒常的性質」の枠に捉われない例として、タイプ C 以外にも次のようなものがある。

(22) a. 父親としての次郎は厳格だ。

b. スーパーグローバル大学としての筑波大学はあまり有名ではない。

(22)の連体修飾要素「父親として(の)／スーパーグローバル大学として(の)」は、(強いて言えば)被修飾名詞句「次郎／筑波大学」の恒常的性質を表している。従って、(19)の一般化からすれば非制限的になることが予測されるが、(22)はいずれも制限的に解釈するのが自然である。(22)が(19)の反例となるのは、おそらく「としての」という連体複合辞が、被修飾名詞句の断片とでも言うべき属性を取り出すことによると考えられるが、ここではこれ以上の立ち入った議論は避けておく。

このように、連体修飾句と連体修飾節は、一時的性質を表す場合には準可量化名詞句を制限的に修飾可能である点で共通するが、連体修飾句は「一時的性質／恒常的性質」に還元できない修飾構造を持っており、そのような場合にも準可量化名詞句を制限的に修飾することができる場合がある。しかし、以上のような問題はあっても、(21)や(22)のような環境を除けば、(19)の一般化は基本的に有効である。従って、次節以降の議論では上記の点を問題としない。

⁶ 同様の指摘は、丹羽(2011: 47)にも見られる。

⁷ 連体修飾句による時間限定が連体修飾節による場合と異なるということは、第 3 章の「飽和性」に関する議論でも触れた(合成的パラメータ補充が可能なのは、連体修飾句による時間限定であって、連体修飾節の場合にはそれができない)。

次に、ii の課題を取り上げる。上述のような観察を踏まえても、冒頭及び 2 節で示した以下の例は、依然として問題となる。

- 主節に「真面目だ／かつこいい」といった内包的述語を用いた(23)が非制限的にしか解釈できないのに対し、「思い浮かべる／信じる」を用いた(24)では、「医者／小説家の」といった範疇限定を行う連体修飾要素が、「太郎／花子」といった準可量化名詞句を制限的に修飾している。(23)と(24)のような差異を生じさせる主節述語の意味的な差異は何であろうか。

(25) a. 太郎はかつこいい。
b. 太郎＝都会で育った人
c. ∴ #都会で育った人はかつこいい。

(26) a. 次郎は太郎を思い浮かべた
b. 太郎＝英語が話せる人
c. ∴ #次郎は英語が話せる人を思い浮かべた。

(27) 都会で育った人はかっこいい。

a. 都会で育ったある人がいて、その人はかっこいい。〈外延的文脈〉

b. 都会で育った人は、誰であれかっこいい。〈内包的文脈〉

(28) 英語が話せる人を思い浮かべた。

a. 英語が話せるある人がいて、その人を思い浮かべた。〈外延的文脈〉

b. 英語が話せる人を、誰であれ思い浮かべた。〈内包的文脈〉

(25)(26)の推論は、必ずしも妥当であるとは言えない。また(27)(28)で示したように、これらの述語は〈外延的文脈〉と〈内包的文脈〉で曖昧である。つまり、(23)(24)の述語は、内包的述語であるかどうかという点において違いを見出すことはできないことになる。

それでは、なぜ(24)のような主節述語においてのみ、恒常的性質を表す連体修飾句が準可量化名詞句を制限的に修飾できるのであろうか。それはおそらく、(24)においては、連体修飾要素で表された属性が、常に可能世界における属性として捉えられているからであると考えられる。

そのことを示すために、第 2 章で示した時間限定と可能世界限定に関する規定をもう一度振り返っておく。本論文の第 2 章では、限定可能な被修飾名詞句に基づき、時間限定と可能世界限定を以下のように分析した。例文と併せて再掲する。

(29) 〈時間限定〉と〈可能世界限定〉

時間限定 ……準可量化名詞句を制限的に修飾することは可能であるが、不可量化名詞句を制限的に修飾することはできない。

可能世界限定 …準可量化名詞句、不可量化名詞句のいずれも限定可能である。

〈時間限定〉

(30) a. 沢山の雪が積もった白川郷はとても魅力的だ。〈制限的解釈〉

b. #沢山の雪が積もった長野五輪はとても魅力的だ。〈非制限的解釈〉

〈可能世界限定〉

(31) a. 彼が想像する白川郷はとても魅力的だ。 〈制限的解釈〉

b. 彼が想像する長野五輪はとても魅力的だ。 〈制限的解釈〉

(第2章(57bc)(58bc)の再掲)

第2章でも述べたように、不可量化名詞句は、時間的な幅を読み込みにくいために、時間限定によって時間領域における現れ方を取り出そうとしても制限的に修飾することができない。これは、(30)のような例文が示す通りである。一方、(31)で示した通り、時間的な幅がなくとも異なった可能世界における現れ方を問題にすることは可能なので、可能世界限定においては制限的に修飾することができるのである。

(29)の一般化は、「不可量化名詞句を制限修飾していれば、その連体修飾要素は可能世界限定を行っている」という逆方向からの捉え方をすることもできる。すなわち、不可量化名詞句を制限修飾できるかどうか、可能世界限定を行っているかどうかのテストになるのである。以上を踏まえて、次の例を見ていく。

(32) a. 私は西郷隆盛の参加していない明治維新を思い浮かべた。

b. 彼には今川軍が勝利した桶狭間の戦いなど信じられない。⁸

(32') a. #私は明治維新を思い浮かべた。

b. #彼には桶狭間の戦いなど信じられない。

(32)は、問題となっていた述語の項に不可量化名詞句を置いた例文である。興味深いことに、ここでは連体修飾要素の意味的な性質を問わず、不可量化名詞句が制限的修飾を受けている。(32)が、そこから連体修飾要素を取り除いた(32')と明らかに異なった文意を持っていることから、このことは明らかであろう。

⁸ 自然な解釈が得られるようにする都合で、連体修飾要素には反事実的なものが現れやすい。しかし、この例文は、「彼には織田軍が勝利した桶狭間の戦いなど信じられない」等としても制限的に解釈可能である。このことから、当該の連体修飾構造において、反事実的な連体修飾要素を伴うことが義務的なものではないことが分かる。

記述的に見ると、このような連体修飾要素の解釈は、「思い浮かべる」「思い描く」「想像する」といった心内想起を行う動詞や、「信じられない」「ありえない」「受け容れられない」等、特定の可能世界における不存在について言及する述語において成立する。これらの述語は、(32a)を例にとると、可能世界 W_1 (現実世界) において「西郷隆盛の参加していない明治維新」は存在しないが、可能世界 W_2 (「私」の心内世界) においては存在するということを表している（逆に、 W_1 においては存在するが、 W_2 においては存在しないということを表す場合もある）。つまり、被修飾名詞句の異なった可能世界における属性に言及するために、連体修飾要素の意味的性質を問わず、本論文が言う可能世界限定に相当するものと解釈されていると考えられるのである。⁹

ここまでの観察から、本論文では、内包的述語には以下の二つのタイプが存在すると主張する。これは同時に、ii の問いに対する答えでもある。繰り返しになるが、併せて具体例を掲出しておく。

(33) 内包的述語のタイプ分け

タイプⅠ ……名詞句の記述内容を、特定の可能世界と特定の時間領域のいずれかにおける属性として解釈するもの。

タイプⅡ ……名詞句の記述内容を、義務的に特定の可能世界における属性として解釈するもの。

(34) a. 医者の太郎は真面目だ。

b. 小説家の花子はかっこいい。

(35) a. 私は医者の太郎を思い浮かべた。

b. 次郎には小説家の花子など信じられない。 ((23)(24)の再掲)

⁹ なお、「NP₁としてのNP₂」は、「歴史的犯罪としてのロッキード事件」などのように、不可量化名詞句を制限的に修飾することが可能であることから、本論文の可能世界限定に相当する限定である可能性がある。もしこの分析が妥当なものであるならば、「NP₁としてのNP₂」が恒常的性質によって準可量化名詞句を制限修飾できることは、それほど問題とならない。

(34)「真面目だ／かっこいい」のようなタイプⅠに分類される内包的述語は、内包的文脈を構成する機能を有しているものの、それ自体では名詞句のどの内包を問題にするのかという指定を持っていないタイプである。そのため、連体修飾要素の意味的性質に依存して、範疇限定、時間限定、可能世界限定のいずれかが決まり、準可量化名詞句が範疇限定しか行えない連体修飾要素を伴った場合（＝(34)）には、非制限的な解釈しか得られない。一方で、(35)「思い浮かべる／信じる」のようなタイプⅡに分類される内包的述語は、それ自体が名詞句のどの内包を問題にするかを指定している。すなわち、タイプⅡの内包的述語は、連体修飾要素の意味的性質を問わず、名詞句の記述内容を義務的に特定の可能世界における属性として解釈させるため、語彙的には恒常的性質を表す連体修飾要素であっても、準可量化名詞句および不可量化名詞句を制限的に修飾することが可能になるのである（＝(35)）。

このように、連体修飾句の振る舞いや主節述語の意味的性質を記述する際には、〈内包〉や〈内包的述語〉、さらには〈準可量化名詞句〉、〈不可量化名詞句〉といった概念が極めて重要な役割を果たすと言える。ここまでの議論を表 2 にまとめる。

表 2 準可量化名詞句の制限的修飾の可否

	外延的述語	内包的述語	
		タイプⅠ	タイプⅡ
一時的性質	× <u>仕事場の太郎</u> に話しかけた。	○ <u>仕事場の太郎</u> は男前だ。	○ <u>仕事場の太郎</u> を思い浮かべた。
恒常的性質	× <u>医者</u> の <u>太郎</u> に話しかけた。	× <u>医者</u> の <u>太郎</u> は男前だ。	○ <u>医者</u> の <u>太郎</u> を思い浮かべた。

連体修飾構造が外延的述語の項となっている場合には、どのような意味的性質を持つ連体修飾要素であっても準可量化名詞句を制限的に修飾することは

きない。これは、第2章でも述べた通りである。¹⁰一方、内包的述語の項に現れた準可量化名詞句は、潜在的に制限的修飾を受ける可能性を有しているが、主節述語がタイプⅠの場合、連体修飾要素に依存した内包しか問題にできない。そのため、連体修飾要素が語彙的に範疇限定を行うもの（恒常的性質を表すもの）である場合、それを受ける準可量化名詞句は非制限的になる。準可量化名詞句は、時間領域を取り出すことはできるが、汎時的な属性で分割することはできないからである。しかし、主節の内包的述語がタイプⅡである場合、連体修飾要素は義務的に可能世界における属性として解釈される。その結果、語彙的には範疇限定しか行えないはずの連体修飾要素が可能世界限定を行うことが可能になり、準可量化名詞句を制限的に修飾できるようになるのである。

4. おわりに

以上、連体修飾句の振る舞いを通じて、内包的述語のタイプ分けを試みた。本章の主張は、以下のようにまとめられる。

- ① 連体修飾句は、恒常的性質と一時的性質を表すことが可能であり、一時的性質を表す場合に限って、準可量化名詞句を制限修飾できる。（ただし、連体修飾句は、「恒常的性質／一時的性質」に還元できない修飾構造であっても、準可量化名詞句を制限修飾できる場合がある。）
- ② 内包的述語には、「特定の可能世界と特定の時間領域のいずれかにおける属性を問題にするもの」と「義務的に特定の可能世界における属性を問題にするもの」とが存在し、恒常的性質を表す連体修飾句は、後者においてのみ準可量化名詞句の制限的修飾が可能となる。

¹⁰ 被修飾名詞句が可量化名詞句の場合、強量的な限定においては、外延的文脈であっても制限的修飾を受けることがあるが、準可量化名詞句の場合、同様の環境でも非制限的な解釈しか得られない。

(i) a. 何人か学生がいたが、ポロシャツを着た学生に話しかけた。 〈制限的解釈〉
b. 何人か学生がいたが、ポロシャツを着た太郎に話しかけた。 〈非制限的解釈〉

本章の議論からも明らかなように、連体修飾構造の分析に際しては、その内部に注目するだけでなく、「外延／内包」といった観点から名詞句や主節述語を捉えることが極めて重要となってくる。この点は、次章においても引き続き議論していく。

一方で、課題も残されている。連体修飾句の意味的分析については、本章でも議論を尽くせたとはいえない。「恒常的性質／一時的性質」に還元できないとした連体修飾句が、本論文の枠組みの中でどのように位置付けられるのかといった点は、依然として問題となるだろう。また、タイプⅠとタイプⅡの内包的述語が、語彙的にどのような意味的性質を有しているのかという点についても、十分な分析ができなかった。いずれ機会を改めて議論したい。

第6章 時間領域における属性を問題とする述語

従来、知覚動詞構文における補文のテンス・アスペクトは、他の構文における従属節述語と異なり、主節事態と同時のものとして解釈されるとされてきた。本章では、対象をさらに連体修飾構造を項とする知覚動詞構文に広げ、その意味的性質や補文構造との違いを明らかにしていく。まず、知覚動詞は連体修飾構造を項とした場合に、対象をモノとして知覚する解釈とコトとして知覚する解釈との間で曖昧であり、内包的述語に近似する性質を有していることを確認する。さらに、知覚動詞の埋め込み述部は、常に時間領域における属性として解釈されており、そのような分析によって補文構造と連体修飾構造の解釈の違いが説明可能であると主張する。

1. はじめに

日本語における従属節のテンス・アスペクト解釈は、複雑な形式と意味の対応関係を形成しており、さまざまな記述的・理論的関心を集めてきた。またその中でも、知覚動詞構文における補文の解釈は、従属節事態が義務的に主節事態と同時のものとして解釈されるという点で、特異な振る舞いを持っているとされる。

- (1) a. 花子が部屋にいるのを見た。
b. 太郎が出かけているの見かけた。
- (2) a. 花子が勉強するのを見た。
b. 太郎が出かけるの見かけた。

(1)(2)の従属節は、それぞれ状態性において異なった性質を持っているが、いずれの出来事も主節事態と同時のものであると解釈される。このような振る舞いは知覚動詞構文に特有のものであり、他の従属節には見られない。

一方で、(1)(2)の補文と形式的・意味的な対応関係にあると考えられる次のような連体修飾構造については、十分な議論がなされていないように思われる。

- (3) a. 部屋にいる花子を見た。
- b. 出かけている太郎を見かけた。
- (4) a. 勉強する花子を見た。
- b. 出かける太郎を見かけた。

(3)(4)はいずれも連体修飾構造を伴っており、(1)(2)の補文構造とは異なるが、従属節事態と主節事態が同時に生起したという解釈も可能であるという点で、一定の対応関係が認められる。

しかし、一方で(3)(4)のような連体修飾構造には、連体修飾構造で表示された指示対象を知覚したというだけの、(1)(2)にはない解釈も存在する。本章では、補文を伴った知覚動詞構文と連体修飾構造を伴った知覚動詞構文でこのような差異が生じる要因を明らかにしていく。

2. 先行研究

知覚動詞構文は、補文のテンス・アスペクト解釈に関して特異な意味的な制約を課すことが知られており、以前から関心の対象となってきた。知覚動詞構文の振る舞いを観察する前に、それ以外の従属節におけるテンス・アスペクト解釈がどのように特徴付けられるのかを概観しておく。

一般的に、従属節のテンス・アスペクトが主節時と同時であると解釈されるためには一定の条件があり、従属節述語が状態動詞等の状態性を持つ述語である場合等が例として挙げられる (cf. 井上 1976b: 175、寺村 1984: 192)。

- (5) a. 花子が部屋にいるので、そこから離れた。
- b. 太郎が出かけているのに、客人が来た。

(5a)では、「いる」という状態動詞が用いられており、主節の「離れた」と「いる」は同時に生起していると解釈される。これは、状態動詞の現在形がアスペクト的に未完了の持続的事態を表すため、主節のイベントと同時並行的に生起し

ているという解釈が可能だからである。(5b)の場合は、「出かける」という動作動詞のテイル形が用いられている。これはいわば状態化された述語と考えることが可能であり、主節の「来た」と同時の解釈が得られる点では、(5a)と同じである。

以上のようなテンス・アスペクト解釈が可能なのは、当該の環境において従属節述語が状態性を持っているからで、次のように述語が動作性しか持っていない場合には、主節と従属節が同時であるという解釈は得られない。

(6) a. 花子が勉強するので、そこから離れた。

b. 太郎が出かけるのに、客人が来た。

(6a)は、「これから花子が勉強することになっているので、そこから離れた」という解釈、(6b)は、「これから太郎が出かけることになっているのに、客人が来てしまった」という解釈、つまり、従属節事態が主節事態の後（あるいは発話時の後）に起こるという解釈しか得られない。これは、(6)の従属節で用いられているのが「勉強する／出かける」といった動作動詞だからであると考えられる。今見てきたような事実から、従属節述語の状態性が、従属節のテンス・アスペクトが主節時と同時であると解釈される際の要因の一つになっていることが確認できる。¹

一方、井上(1976b)、中右(1980)等で指摘されているように、知覚動詞構文における補文のテンス・アスペクト解釈は、上述のような環境と異なった振る舞いを見せる。

(7) a. 花子が部屋にいるのを見た。

¹ ただし、従属節事態と主節事態が同時解釈となるのは、従属節述語が状態性の述語である場合に限られない。例えば「橋を渡るときに、財布を落とした」という文では、従属節事態と主節事態が同時であるという解釈が可能である。従属節のテンス・アスペクト解釈は、述語や接続形式の意味的性質等の要因が複雑に絡み合っているため、ここでその全てを明らかにすることはできない。

- b. 太郎が出かけているのを見かけた。
- (8) a. 花子が勉強するのを見た。
- b. 太郎が出かけるのを見かけた。 ((1)(2)の再掲)

(7)と(8)は、先の(5)と(6)の主節述語を「見た／見かけた」という知覚動詞に置き換えた例である。(7)において、従属節事態と主節事態が同時に成立しているのは、(5)の場合と同じである。一方、(6)では同時と見なせなかった主節事態と従属節事態が、(8)のような知覚動詞構文においては同時のものとして解釈される。このようなことが生じるのは、知覚という行為が、事象の生起と不可分に結び付いているからである。そもそも出来事を直接知覚することが可能になるのは、それが生じている間だけであり、出来事が起こる前や後では知覚することはできない。このように、知覚動詞構文の場合には、補文のテンス・アスペクト形式がどのようなものであっても、主節時点と同時のものであると解釈されるのである。

先行研究で指摘された以上の観察は、知覚動詞構文の意味的性質を捉える上で極めて重要である。一方で、知覚補文と密接な関わりを持つと考えられる、次のような連体修飾構造を伴った文の意味解釈について、十分な分析が進んでいないと言え難い。

- (9) a. 部屋にいる花子を見た。
- b. 出かけている太郎を見かけた。
- (10) a. 勉強する花子を見た。
- b. 出かける太郎を見かけた。 ((3)(4)の再掲)

例えば(9)からは、それぞれ「花子が部屋におり、それを見た」「太郎が出かけており、それを見た」というような、従属節事態と主節事態が同時に生起しているという解釈が得られる。従属節述語が状態性を持っていない(10)も、基本的には同様であると考えられる。この場合、ほとんど意味を変えることなく、先ほど

挙げた(7)(8)のようにパラフレーズすることが可能である。以下、「知覚動詞補文」および「知覚関係節」という澤田(1997)の用語に倣って、(7)(8)のような補文を伴う知覚動詞構文を〈知覚補文〉、(9)(10)のような連体修飾構造を伴う知覚動詞構文を〈知覚連体修飾構造〉と呼ぶことにする。²形式的には異なるが、(9)(10)の知覚連体修飾構造には、(7)(8)の知覚補文とほぼ同じ解釈があるということになる。

しかし、(9)(10)のような知覚連体修飾構造には、対応する知覚補文と異なった解釈が存在する。それは、連体修飾構造を、コトの描写としてではなく、モノを指すものとして捉える解釈である。例えば(9a)は、「花子が部屋にいる」という事態（コト）を知覚したのではなく、「そういう行為を行っている花子」という人物（モノ）を知覚したという解釈も可能である。そしてこの場合、従属節事態と主節事態（知覚行為）は必ずしも同時解釈とはならない。以上の違いは、次のような対比からも明らかである。

- (11) a. * [いま花子が部屋にいる] のを昨日見た。
b. * [今日太郎が出かけている] のを先週見かけた。
- (12) a. * [1時間後に花子が勉強する（ことになっている）] のを見た。
b. * [これから太郎が出かける] のを見かけた。
- (13) a. [いま部屋にいる花子] を昨日見た。
b. [今日出かけている太郎] を先週見かけた。
- (14) a. [1時間後に勉強する（ことになっている）花子] を見た。
b. [これから出かける太郎] を見かけた。

知覚補文においては、従属節事態は主節事態と同時であるという解釈が強制される。そのため、(11)(12)のように、従属節と主節が独立の時点を表すことは

² 本章で念頭に置いている知覚動詞構文には、「裸の太郎を見た」のような、必ずしも節とは呼べない構造も含まれる。従って、澤田(1997)の「知覚関係節」と本章の「知覚連体修飾構造」という概念は、必ずしも同じ対象を指しているわけではない。

できない。他方、(13)と(14)に示したように、知覚連体修飾構造においては従属節と主節に独立の時点が生起しうる。(13ab)は、「いま部屋にいる花子という人を、昨日別の場所を見た」「今日出かけている太郎という人物を、先週見かけました」というような意味合いで解釈可能であるし、(14ab)も、「花子は一時間後に勉強をすることになっていて、その人を見た」「太郎はこれから出かけるところで、それを見かけた」というように、従属節事態と主節事態の非同時的な解釈ができる。³このような解釈は知覚補文に見られず、知覚連体修飾構造に特有のものである。

以上の観察から、知覚連体修飾構造は、従属節のテンス・アスペクト解釈について曖昧性を持っていることが分かる。すなわち、知覚連体修飾構造には、連体修飾構造をコトとして捉え、主節事態と同時に生起したと解釈する場合と、連体修飾構造をモノとして捉え、主節事態と必ずしも同時に生起したものとは見なさない解釈が存在するのである。便宜的に、それぞれの解釈を〈コト知覚〉および〈モノ知覚〉と呼称する。上述の観察に基づけば、知覚補文はコト知覚の解釈しか持たないのに対し、知覚連体修飾構造はコト知覚とモノ知覚という 2 つの解釈を持っていることになる。⁴

知覚補文と知覚連体修飾構造は異なった構造であり、異なった解釈の可能性を持っていても何ら不思議ではない。しかし、知覚補文において義務的に従属節事態と主節事態が同時のものとして解釈されるのに対して、なぜ知覚連体修飾構造の場合に限って曖昧性が生じるのかということは、意味論的に問題にされても良いだろう。以下、本章ではこの問題を検討していく。

³ ただし、従属節述語が状態性を持っているか否かで、従属節事態と主節事態の非同時的な解釈の容認しやすさに差があるように思われる（例えば(14)などは、「ことになっている」といったような、ある種の状態化形式を伴っていた方が安定する）が、ここでは問題にしないでおく。

⁴ 慎重を期すならば、知覚連体修飾構造には基本的にモノ知覚の解釈しかなく、語用論的に同時的な解釈が生じているに過ぎないのではないかという可能性を検討する必要がある。ここで重要なのは、モノ知覚とコト知覚において、連体修飾要素の機能が異なるということである。後述するように、コト知覚においては制限的な解釈が生じるが、モノ知覚の解釈しか容認されない(13)(14)では、連体修飾要素を取り除いても文意に差はなく、非制限的にしか解釈されない。このように、連体修飾要素の機能から見れば、これらの解釈は明確に区別することができる。

3. 分析

3.1. 知覚動詞の位置付け

分析に際して、まず知覚動詞の意味論的な位置付けを行う。先に見たように、知覚動詞には意味的な曖昧性が存在する。本論文では、まさにそのような曖昧性から、知覚動詞は内包的述語と近似した性質を有すると考える。

曖昧性の観点から、知覚動詞の意味論的性質を改めて確認しておきたい。

(15) 店番をしている男を見かけた。

a. 店番をしている男がいて、その男を見かけた。 〈モノ知覚〉

b. 男が店番をしているのを見かけた。 〈コト知覚〉

既に述べたように、知覚連体修飾構造は、モノ知覚とコト知覚の間で曖昧である。モノ知覚において問題にされているのは、項となった連体修飾構造で表示された指示対象である。一方、コト知覚において問題にされているのは、項となった連体修飾構造の記述内容である。これはそのまま、指示対象を問題にする外延的文脈と記述内容を問題にする内包的文脈に相当すると言ってよい。すなわち、モノ知覚の解釈は外延的文脈に、コト知覚の解釈は内包的文脈に対応し、この点で内包的述語との共通点が伺えるのである。

加えて重要なのは、コト知覚の知覚連体修飾構造が、準可量化名詞句を制限的に修飾可能である、という点である。

(16) a. 部屋にいる花子を（久しぶりに）見た。⁵

b. 出かけている太郎を（久しぶりに）見かけた。

(16') a. #花子を（久しぶりに）見た。

b. #太郎を（久しぶりに）見かけた。

⁵ 「久しぶりに」という副詞的成分は、コト知覚を得やすくするために挿入しているが、このような成分を伴っていてもモノ知覚の解釈は可能であり、論旨に影響はない。

(i) [いま部屋にいる花子]を昨日久しぶりに見た。

(16ab)は、コト知覚として解釈した場合に「他の状況ではなく、部屋にいるときの花子」「他の状況ではなく、出かけているときの太郎」というような制限的修飾が可能である。実際に、(16)と連体修飾要素を取り除いた(16')とでは、明らかに意味が異なっていると言わざるをえない。以上の事実から、知覚動詞は、本論文における内包的述語と類似した性質を持つ述語だと考えられる。

とはいえ、知覚動詞の振る舞いは、他の内包的述語と完全に並行的なものではない。最も大きな違いは、内包的述語が、内包的文脈において名詞句を不特定の問題にするのに対し、知覚連体修飾構造のコト知覚にそのような含意は認められず、基本的に特定の対象を問題にしているという点である。

- (17) a. 仕事に打ち込む男性が好きです。
b. 人助けをしている青年は優しいだ。
(18) a. 仕事に打ち込む男性を見た。
b. 人助けをしている青年を見かけた。

(17ab)のような内包的述語を用いた環境では、「誰であれ、仕事に打ち込む男性」「誰であれ、人助けをしている青年」というように、項を不特定の問題にできるのに対し、(18ab)のように知覚動詞を用いた環境では、そのような解釈はできず、対象を特定の問題にすることしかできない。

同様に、同一対象指示の他の名詞句との置き換えテストにおいて、知覚動詞に内包性は認められない。

- (19) a. 太郎を見かけた。
b. 太郎＝店番をしている男
c. ∴ 店番をしている男を見かけた。

(19)の推論は、(19c)をコト知覚として解釈したとしても、特定の対象を問題にしているという点で、妥当な推論と言えるだろう。このような点で、知覚動詞は、

内包的述語と一部の特徴を共有しながらも、それと異なった性質を有している
と考える必要がある。

では、知覚動詞は内包的述語との関係において、どのように位置付けることが
可能なのであろうか。この点を議論するために、以下、コト知覚の連体修飾構造
において問題にされている内包とは何であるかを分析していく。

議論の前提として、第 2 章で示した制限的連体修飾の下位分類を改めて確認
しておく。

(20) 制限的連体修飾の下位分類

〈範疇限定〉 ……可量化名詞句のみを限定する。

〈時間限定〉 ……可量化名詞句および準可量化名詞句を限定する。

〈可能世界限定〉 ……可量化名詞句・準可量化名詞句・不可量化名詞句の全
てを限定する。 (第 2 章(59)の再掲)

知覚連体修飾構造が準可量化名詞句を制限的に修飾可能であることは、先に
確認した。準可量化名詞句を限定することが可能なのは、時間限定と可能世界限
定のいずれかであるが、コト知覚の知覚連体修飾構造は、少なくとも時間限定と
しての解釈を有していると考えられる。このことは、知覚連体修飾構造が準可量
化名詞句を制限的に修飾する環境において、連体修飾要素と被修飾名詞句の間
に「ときの」を挿入することが可能であるという事実によって確かめられる。

(21) a. 部屋にいるときの花子を（久しぶりに）見た。

b. 出かけているときの太郎を（久しぶりに）見かけた。

(22) a. 勉強するときの花子を（久しぶりに）見た。

b. 出かけるときの太郎を（久しぶりに）見かけた。

(21)(22)は、(9)(10)の連体修飾要素と被修飾名詞句の間に「ときの」を挿入し
た例であるが、いずれも元の文からそれほど意味的な変化は見られない。このこ

とから、コト知覚の知覚連体修飾構造においては、準可量化名詞句である被修飾名詞句に対して時間限定が行われていることが示唆される。

さらに、ここで注目したいのは次のような現象である。

(23) a. ?花子が大人しいのを見た。

b. ?太郎が優しいのを見た。

(24) a. ?大人しい花子を見た。

b. ?優しい太郎を見た。

井川(2012: 76)が英語の例も参照しながら指摘しているように、(23)のような知覚補文には、一般的に恒常的性質を表す述語が現れることはできない。そしてこのような振る舞いは、(24)のような知覚連体修飾構造においても確認される(厳密には、モノ知覚として解釈した場合には容認可能となるが、ここではいったん議論から外して考えることとする)。恒常的性質を表す述語が知覚動詞構文の中に埋め込まれるためには、次のように、その場の知覚に基づく驚きや発見が含意されていなければならない。

(25) (口数の多い花子とその日は静かで)

a. 花子が大人しいのを見て驚いた。

(いつもは意地悪な太郎が親切で)

b. 太郎が優しいのを初めて見た。

(26) (口数の多い花子とその日は静かで)

a. 花子が大人しいのを見て驚いた。

(いつもは意地悪な太郎が親切で)

b. 太郎が優しいのを初めて見た。

(25)(26)では、述部に「見て驚いた」「初めて見た」といった要素が付加され、その場の知覚に基づく驚きや発見が含意されている。(25)(26)は、少なくとも

(23)(24)よりも文法的に容認されやすい。このようなことが起こるのは、富澤(2008)、井川(2012)が指摘するように、語彙的には恒常的性質を表す(25)(26)の従属節述語が、意味解釈上、一時的性質を表すものとして解釈されているからであると考えられる(この点について、ここでは立ち入って議論することができないため、詳細は富澤(2008)、井川(2012)を参照されたい)。以上のデータから、知覚動詞の埋め込み述部は、一時的性質を表していなければならないことが分かる。

また一方で、知覚連体修飾構造では、不可量化固有名詞を制限的に修飾することも、可能世界限定を行う連体修飾要素と共起することもできない。

(27) a. #開幕して間もない長野五輪を見た。

b. #村人は、小早川秀秋が参戦する関ヶ原の戦いを目撃した。

(28) a. ??彼の知っている大阪万博を見た。

b. ??村人は、多くの人が想像する関ヶ原の戦いを目撃した。

(27ab)の例は、「長野五輪は開幕して間もないが、それを見た」、「小早川秀秋が参戦することになっている関ヶ原の戦いという戦いを目撃した」というような解釈(モノ知覚としての解釈)であり、制限的に解釈することは困難であろう。また、「知る／想像する」という思考や認知に関わる連体修飾要素を伴う(28)は、意味的に容認されてもおかしくはないが、文法的に容認することはできない。つまり、知覚連体修飾構造においては、可能世界限定を行うことができず、不可量化名詞句を制限的に修飾することはないのである。

以上の観察から、コト知覚の知覚連体修飾構造の埋め込み述部に現れるのは、一時的性質を表す要素のみであり、かつ、可能世界限定を行うことができない、ということが明らかになる。この事実の意味するところは、次のようなものであると考えられる。すなわち、コト知覚の知覚連体修飾構造において問題にされている内包とは、時間領域における属性であり、範疇限定を行うことはできず、常に時間限定を行うものとして解釈されているのである。

知覚動詞を、時間領域における現れ方を問題にする述語であるとする分析は、知覚動詞が埋め込み述部を出来事そのものとして取り出しているという直観と整合的であると思われる。加えて、項となった連体修飾構造の時間領域における現れ方を問題にできるという点で、内包的述語との異同を捉えることも可能になる。どちらの述語が用いられた文も、一時的性質を表す連体修飾要素が現れた場合に、準可量化名詞句に対し時間限定を行えるという点で共通する。一方で、知覚動詞の項となった名詞句は、時間限定によってしか被修飾名詞句を限定できないのに対し、内包的述語の項となった名詞句は、連体修飾要素の意味的性質によって様々な限定の仕方を許す。このような差異は、対象を同時的に切り取るという知覚動詞の語彙意味的性質を考えれば、自然なことであろう。知覚動詞の意味的な性質および内包的述語との関係は、本論文の枠組みから上述のように説明される。

3.2. 〈知覚補文〉と〈知覚連体修飾構造〉の対応関係

前節では、「名詞句の記述内容を、特定の時間領域における属性として解釈する」ことが可能であるという点で、知覚動詞が内包的述語と近似した性質を持つ述語類型であるという分析を示した。本節では、これらの議論を踏まえ、知覚補文においては曖昧性が存在せず、従属節事態と主節事態が同時に生起したという解釈しか存在しないのに対し、知覚連体修飾構造において「モノ知覚／コト知覚」という曖昧性（「外延的文脈／内包的文脈」に対応する）が生じるという事実について、本論文の立場から説明を試みる。

知覚連体修飾構造のコト知覚としての解釈は、そのままほぼ知覚補文の解釈に対応するものであった。

〈知覚補文〉

- (29) a. 花子が部屋にいるのを見た。
b. 太郎が出かけているのを見かけた。
- (30) a. 花子が勉強するのを見た。

b. 太郎が出かけるのを見かけた。

〈知覚連体修飾構造〉

(31) a. 部屋にいる花子を見た。

b. 出かけている太郎を見かけた。

(32) a. 勉強する花子を見た。

b. 出かける太郎を見かけた。 ((7)～(10)の再掲)

(31)(32)の知覚連体修飾構造をコト知覚として解釈した場合、従属節事態と主節事態は同時のものとして解釈される。テンス・アスペクト解釈については、知覚補文とコト知覚の知覚連体修飾構造の間に大きな差異は見受けられない。

このような事実から、本論文では、知覚補文は常に述部で表示された属性（内包）が問題にされている構文環境であると考ええる。コト知覚は、知覚連体修飾構造における連体修飾要素を時間領域における属性として捉えられるという点で、内包的文脈と共通の性質を持つ。知覚補文における述部もこれと同様に、述部で表示された属性そのものが問題にされている環境と捉えるのである。

もし、コト知覚に対応する知覚補文を、補文構造による内包的文脈と規定したとすると、他の内包的文脈においても、形式的に対応する同様の補文構造を構成可能であることが期待される。そして実際に、そのような対応する文構造を構成することは可能である。

〈内包的述語：タイプⅠ〉

(33) a. 制服を着ている太郎はかっこいい。

b. 料理を作る花子は魅力的だ。

(33') a. 太郎が制服を着ているのはかっこいい。

b. 花子が料理を作るのは魅力的だ。

〈内包的述語：タイプⅡ〉

(34) a. 隣にいる太郎を思い浮かべた。

b. 大人になった花子を想像した。

- (34') a. 太郎が隣にいるのを思い浮かべた。
 b. 花子が大人になったのを想像した。

(33)の主節述語は、第5章で論じたタイプⅠの内包的述語、(34)の主節述語はタイプⅡの内包的述語である。これらの文はいずれも、内包的文脈の解釈に限って、(33')(34')のように、ほとんど意味を変えずに補文構造へと置き換えることができる。このような対応関係は、コト知覚の知覚連体修飾構造と知覚補文との対応関係に相当すると考えてよいように思われる。⁶

当然のことながら、外延的文脈しか構成しない外延的述語が主節に用いられている場合には、補文構造を構成することはできない。

- (35) a. 制服を着ている太郎は警察官だ。
 b. 料理を作る花子に話しかけた。
 (35') a. *太郎がスーツを着ているのは警察官だ。
 b. *花子が料理を作るのに話しかけた。
 (36) a. 隣にいる太郎を揺さぶった。
 b. 大人になった花子に会った。
 (36') a. *太郎が隣にいるのを揺さぶった。
 b. *花子が大人になったのに会った。

(35)(36)のような外延的述語は、原則として補文を項としてとることはなく、(35')(36')のような補文構造への言い換えは容認されない。⁷これは、モノ知覚の

⁶ 全ての内包的文脈においてこのようなパラフレーズが可能なわけではないという点には、注意を要する。

(i) a. 教室で勉強している太郎はおとなしい。
 b. *太郎が教室で勉強しているのはおとなしい。

(ia)を内包的文脈として解釈することは可能であるが、対応する(ib)は文法的に容認できない。これは、「教室で勉強をしている」という出来事に対して「おとなしい」という評価を下すことができないからであると考えられるが、どのような場合にこのような叙述の齟齬が生じるのかは、今後明らかにしなければならないと考える。

⁷ 「太郎が寝ていたのが急に起き上がった」等の、いわゆる主要部内在型関係節の場合には、例

知覚連体修飾構造に、対応する知覚補文が存在しないことと並行的であり、(33')(34')の例と併せ、知覚補文が補文構造で表された属性を問題とする文脈であるとする上述の分析を補強するための傍証となるだろう。

加えて、このような分析によって説明されるのは、知覚補文と知覚連体修飾構造の関係にとどまらない。益岡(1995)が非制限的であるにもかかわらず例外的に疑問のスコープに入るとした以下のような連体修飾構造の説明にも、本論文の分析は有効であると考ええる。

- (37) a. 修一は動揺する自分を感じながら言った。
b. 身内の病人を秘して公務出張に精励している局長に一種の感動を覚えた。
c. わたしは何日も休まず働き続けた太郎に感動した。
- ((37ab)=益岡 1995: 144、下線=筆者)

(37)は、益岡(1995)が「述定的装定」と呼んだ連体修飾構造である。⁸述定的装定が例外的とされているのは、一般的に非制限的な連体修飾要素は疑問のスコープに入らないとされるのに対し (cf. 三宅 1993, 2011)、当該の連体修飾要素が、疑問のスコープに入りうるからである。

外的に容認される可能性がある。天野(2014)は、これまで従属節内の要素が主節の項として振る舞っているものと見なされることの多かった「のが」による主要部内在型関係節が、主語の状態変化を表す〈変遷イベント〉(天野 2014: 31)の解釈に支えられ、〈サマ主格変遷構文〉として成立していると分析しており、いわば知覚動詞以外の述語が、構文環境等によってコトを項としてとる場合があると主張している。(33)(34)のような内包的述語の振る舞いを踏まえると、どのようなタイプの述語が、どのような環境においてコトを項としてとりうるのかという問題として、非常に興味深い論点となりうるが、この点については別稿を期して議論を深めたいと考える。

⁸ ただし、ここで取り上げているのは、益岡(1995)が述定的装定としたものの一部であり、以下のものは考察対象から外す。

- (i) a. いかに仮説を立てて論を進めることに味をしめたアインシュタインとはいえ、あくまでも科学者である。
b. 幾度か体験した事件や離婚など、そのたびに大きく成長してきた萩原だけに厄をのみ込んでしまうのだろう。
c. 信州出身で、志に燃えていた小澤和一だった。が、背に腹はかえられない気持ちだった。
(益岡 1995: 146、下線=発表者)

(38) a. *どこで生まれた太郎が好きなの。

(cf. どこで生まれた人が好きなの。)

b. *何をしゃべる彼がうるさいの。

(cf. 何をしゃべる人がうるさいの。)

(39) a. どんな自分を感じたんですか。

b. 何をしている局長に感動を覚えたんですか。

c. あなたは何をした太郎に感動したんですか。

((40c)=益岡 1995: 145、下線=筆者)

(38)のように、通常、非制限的な連体修飾要素は疑問のスコープに入りえないが、(39)に示したように、益岡(1995)の言う述定的装定は疑問のスコープに入りうる。このような振る舞いの要因について、益岡(1995: 144-145)は、(37)のような表現が、次のような述定の表現と内容的に同じものを表すからだとしている。

(40) a. 修一は自分が動揺するのを感じながら言った。

b. 局長が身内の病人を秘して公務出張に精励しているのに一種の感動を覚えた。

((40ab)=益岡 1995: 145、下線=筆者)

c. わたしは太郎が何日も休まず働き続けたのに感動した。

益岡(1995)の主張に従えば、(37)の述定的装定が疑問のスコープに入りうるのは、(40)に対応する「自分がどうなるのを感じたのですか」、「局長が何をしているのに感動したのですか」、「あなたは太郎が何をしたのに感動したのですか」という疑問の表現が可能であるからだということになる。

しかし、述定表現になりうることは、直ちに疑問のスコープに入ることの説明にはならない。例えば(38b)に対応する述定表現「彼が何をしゃべるのがうるさいの」は問題なく容認されるが、装定表現である(38b)はやはり容認できない。従って、そもそもなぜ(37)が疑問のスコープに入りうるのかという問題は明らかにされていないと言える。

本論文の分析に基づけば、次のように説明される。すなわち、益岡(1995)が述定的装定と呼ぶ(37)の例は、コト知覚の知覚連体修飾構造と同様、項となった連体修飾構造の時間領域における現れ方を問題にする環境であり、被修飾名詞句が時間限定を受けているために、疑問のスコープに入りうるのである。⁹これは、益岡(1995)が挙げる述定的装定の例が「感じる／（感動を）覚える／感動する」といった、知覚あるいは知覚を含意する述語であることから示唆される。また、(37)のような述定的装定が(40)のような対応する述定表現を持つという事実も、コト知覚の連体修飾構造が対応する知覚補文を持つという関係性と並行的なものとして捉えることが可能である。述定的装定は、知覚補文と同様、述部で表された属性を問題とする環境であると規定されることになる。

知覚連体修飾構造と述定的装定の並行性を確認するうえで重要となってくるのが、次のような現象である。

- (41) a. どこにいる花子を見たのですか。
- b. 何をしている太郎を見かけたのですか。
- (42) a. 何をする花子を見たのですか。
- b. どこへ出かける太郎を見かけたのですか。

知覚連体修飾構造の連体修飾要素に疑問詞を置いた(41)(42)は、被修飾名詞句が準可量化名詞句であるにもかかわらず、問題なく許容されると考えられる。(41)(42)からは、コト知覚の知覚連体修飾構造が被修飾名詞句を制限的に修飾していることが確認できる。そして同時に、述定的装定が、被修飾名詞句に対して非制限的修飾を行っているのではなく、時間限定による制限的修飾を行っていることが示唆される。ここまで本論文が制限的としてきた(41)(42)の連体修飾構

⁹ ソムキャット(2000)は「述定的装定」以外にも疑問のスコープに入りうる非制限的連体修飾節があるとしたうえで、それを「眼前描写」連体節と呼んでいる。本論文はこのような連体修飾構造も知覚動詞と同様の分析が適用できるのではないかと考えているが、ソムキャット(2000)は「眼前描写」連体節が「場面限定」を行っているとしながらも、あくまでも非制限的用法であると見なしており、本論文の立場とは異なる。

造と述定的装定がともに疑問のスコープに入る以上、(37)のような述定的装定を積極的に非制限的とする根拠は乏しいからである。¹⁰述定的装定を制限的修飾の一種と考えれば、「なぜ非制限的修飾であるにもかかわらず、疑問のスコープに入りうるのか」という問題は、そもそも存在せず、「制限的修飾の一種（時間限定）であるため、疑問のスコープに入りうる」という一般的な制約のもとで説明されることになる。また、述定表現との対応についても、「時間領域における属性を問題とする環境」であるために生じることになり、述定的装定にのみ見られる振る舞いとして扱う必要がなくなる。このように、述定的装定をコト知覚の知覚連体修飾構造と同様の時間限定の一種であると考えすることで、より統一性的な規則の中で連体修飾構造と補文構造を捉えることが可能となるのである。

4. おわりに

本章での主張は、以下のようにまとめられる。

- ① 知覚連体修飾構造の「モノ知覚／コト知覚」に見られる意味的な曖昧性は、それぞれ「外延的文脈／内包的文脈」に対応し、知覚動詞は「名詞句の記述内容を、特定の時間領域における属性として解釈しうる」という点で、内包的述語と近似した性質を有している。
- ② 知覚補文は、従属節で表示された内容を時間領域における属性として解釈する構造であり、このような捉え方によって、知覚連体修飾構造との対応関係や他の内包的文脈における補文構造への置き換え可能性が説明される。

一方で、残された課題は少なくない。知覚およびそれに付随する時間限定が関わると思われる現象として、坪本(1992, 1993, 1999)による一連の研究がある「ト書き連鎖」が挙げられる。

¹⁰ そもそも疑問のスコープに入るかどうかということは、制限的修飾と非制限的修飾を分ける指標である。従って、疑問のスコープに入りうるのにもかかわらず、その連体修飾要素を非制限的と見なすことのほうが、理論的には不経済であるということになる。一方、本論文の分析では、このような問題は生じない。

(42) (ゴジラが東京に出没する。)

a. 次々と街を破壊していくゴジラ。

(太郎はその日寝坊してしまった。)

b. 慌てて教室に駆け込んでくる太郎。

恒常的性質を表す連体修飾要素が現れないなど、知覚動詞構文に現れる連体修飾要素と類似の制約が観察されるように思われるが、その詳細は十分に検討できていない。また、「時間領域における現れ方を問題とする述語」は、今回中心的に取り上げた知覚動詞に限られない可能性がある（注 7 も参照されたい）。これらの論点については、いずれも今後の課題としておきたい。

第7章 結論

本章では、第2章～第6章に至る各章の主張の概略を述べた上で、第1章で示した問題提起に対し、どのような答えが与えられたのかを示す。本論文の目的は「連体修飾要素の機能と被修飾名詞句の指示性との対応関係の体系化」と「連体修飾構造の意味的性質が文全体に与える影響の包括的記述」の2点であるが、前者については主に連体修飾要素の意味的性質と被修飾名詞句の量化可能性の観点から体系化がなされ、後者については個々の構文環境や主節述語の意味的性質から分析が行われたことになる。以上のような成果により、本論文は、「連体修飾および名詞句の文法論的研究に対する貢献」、「文レベルで見た連体修飾」という新しい観点の導入」という2点において、大きな学術的貢献を有する論考になっていると考える。

1. 本論文のまとめ

本論文における第2章以下の議論を、ここで改めて振り返っておく。

・第2章「先行研究および本論文の枠組み」

先行研究の批判的検討をもとに、主節述語・被修飾名詞句・連体修飾要素という3つの観点から連体修飾構造を分析し、それぞれについて基本的な分類を示した。

主節述語は、項となる名詞句に対してどのような意味解釈をもたらすかという観点から、次のように分類される。

(1) 〈外延的述語〉と〈内包的述語〉

〈外延的述語〉… 項となる名詞句に対し、外延的文脈のみを構成する述語。

〈内包的述語〉… 項となる名詞句に対し、外延的文脈と内包的文脈のいずれかを構成する述語。(第2章(25)の再掲)

(2) a. スーツを着た男性が歩いている。 〈外延的述語〉

b. スーツを着た男性が好きです。 〈内包的述語〉

(第2章(26)の再掲)

表1 主節述語の分類

分類	例文	外延的文脈	内包的文脈
外延的述語	スーツを着た男性が <u>歩いている</u> 。	○	×
内包的述語	スーツを着た男性が <u>好きです</u> 。	○	○

本論文の枠組みにおいて、主節述語は、項となる名詞句を外延（指示対象）として解釈する外延的述語と内包（属性）として解釈することが可能な内包的述語に分けられる。(2a)の「歩く」は外延的述語、(2b)の「好き」は内包的述語である。従来、制限的な解釈を受けないとされてきた定指示名詞句は、内包的文脈においてのみ制限的修飾を受ける。一方、外延的文脈では、連体修飾要素が原則として非制限的に解釈される。これは、外延的文脈における連体修飾要素が既に特定化された対象に付加される情報に過ぎないのに対し、内包定文脈においては、不特定の集合を問題にすることが可能だからである。また、外延的には唯一の対象しか表さない定指示名詞句も、時間領域や可能世界においてとりうる属性を問題にすれば、意味的に限定することが可能になる。

続いて、被修飾名詞句は、量化の可否に基づいて以下のように分類される。

(3) 量化の可否に基づく名詞句の分類

〈可量化名詞句〉 ……個体およびイベントの量化が可能な名詞句。

〈準可量化名詞句〉 …イベントの量化のみが可能な名詞句。

〈不可量化名詞句〉 …個体およびイベント、いずれの量化もできない名詞句。

(第2章(45)の再掲)

〈可量化名詞句〉

- (4) a. ほとんどの 交響曲／『第九』 は、大きなホールで演奏される。
 b. 交響曲／『第九』 は、ほとんど大きなホールで演奏される。

〈準可量化名詞句〉

- (5) a. *ほとんどの 太郎／彼／あの人 は、院生室にいる。
 b. 太郎／彼／あの人 は、ほとんど院生室にいる。

〈不可量化名詞句〉

- (6) a. *ほとんどの 関東大震災／あの事件 は、日本で起こった。
 b. *関東大震災／あの事件 は、ほとんど日本で起こった。

(第 2 章(46)～(48)の再掲)

表 2 被修飾名詞句の分類

分類	例文	個体の量化	イベントの量化
可量化名詞句	<u>院生</u> _(i) は <u>ほとんど</u> _(i) 研究室にいる。	○	○
準可量化名詞句	<u>太郎</u> _(i) は <u>ほとんど</u> _(*) 寝て過ごす。	×	○
不可量化名詞句	* <u>関ヶ原の戦い</u> _(i) は <u>ほとんど</u> _(*) 中世に起きた。	×	×

被修飾名詞句は、個体およびイベントの量化可能性から、可量化名詞句・準可量化名詞句・不可量化名詞句の 3 つに分類される。可量化名詞句では個体とイベントの量化がいずれも可能であるが、準可量化名詞句ではイベントの量化しかできない。また、不可量化名詞句は、個体とイベントのいずれの量化も許さない。これらの被修飾名詞句は限定可能な環境の範囲が異なっており、次に見ていく連体修飾要素の分類と密接な対応関係を持っている。

連体修飾要素は、意味的性質および限定可能な被修飾名詞句に基づき、次のように分類される。

(7) 連体修飾要素の分類

〈非制限的修飾〉 ……被修飾名詞が表示する対象または属性に対し、何らかの背景的な情報を付け加える修飾。

〈制限的修飾〉 ……被修飾名詞が表示する対象または属性から、その一部を取り出す修飾。

〈範疇限定〉 ……可量化名詞句のみを限定する。

〈時間限定〉 ……可量化名詞句および準可量化名詞句を限定する。

〈可能世界限定〉 …可量化名詞句・準可量化名詞句・不可量化名詞句の全てを限定する。 (第2章(67)の再掲)

(8) a. #静かな町で育った太郎はおとなしい。 〈非制限的修飾〉

b. #言語学を専攻する学生に話しかけた。 〈非制限的修飾〉

(第2章(52a)(61a)の再掲)

(9) a. 外貨の獲得が見込める田舎町はとても魅力的だ。 〈範疇限定〉

b. 沢山の雪が積もった白川郷はとても魅力的だ。 〈時間限定〉

c. 彼が想像する長野五輪はとても魅力的だ。 〈可能世界限定〉

(第2章(60)の再掲)

表3 連体修飾要素の分類

分類		例文	可量化名詞句の 限定	準可量化名詞句の 限定	不可量化名詞句の 限定
非制限的連体修飾		<u>教室にいる太郎</u> に話しかけた。	×	×	×
制限的連体修飾	範疇限定	<u>都会で生まれた人</u> はかっこいい。	○	×	×
	時間限定	<u>仕事をする太郎</u> は男前だ。	○	○	×
	可能世界限定	<u>私が知る西南戦争</u> は悲惨な戦いだ。	○	○	○

可量化名詞句のみを限定可能なのが範疇限定、可量化名詞句および準可量化名詞句を限定可能なのが時間限定、すべての被修飾名詞句を限定可能なのが可

能世界限定である。限定可能な被修飾名詞句の差異は、次のように説明される。範疇限定は恒常的・汎時的性質によって対象を限定するため、複数の対象を持つ可量化名詞句を限定することしかできない。一方、時間限定は時間的な現れ方によって対象を限定するため、時間的な幅を持つと解釈できる準可量化名詞句も制限的に修飾することができる。そして、異なった可能世界の表れ方で対象を限定する可能世界限定では、時間的な広がりすらも読み込めない不可量化名詞句を制限的に修飾することが可能である。

・第3章「コピュラ文と連体修飾構造」

従来想定されてきた語彙的パラメータ補充とは別に、合成的パラメータ補充という概念を設定することにより、より一般的なカキ料理構文の成立条件を規定することが可能であると主張した。

(10) パラメータ補充のタイプ

a. 〈語彙的パラメータ補充〉

語彙的にパラメータの補充を要求する名詞（非飽和名詞）のパラメータの値を埋める操作。

b. 〈合成的パラメータ補充〉

修飾要素と被修飾要素の意味的關係によって、被修飾名詞句に臨時的に読み込まれたパラメータの値を埋める操作。 (第3章(28)の再掲)

(10)の規定に基づき、カキ料理構文の成立条件は以下のように一般化することができる。

(11) カキ料理構文の成立条件

「YがXのZ（であること）」という形をもつ文において、「XのZ」が述語名詞句であるとき、XがZのパラメータの値を表すときにかぎり、カキ料理構文「Xは、YがZだ」を構築することができる。 (第3章(34)の再掲)

- (12) a. この写真が次郎にとっての洋子だ。 〈指定文〉
 b. 次郎にとってはこの写真が洋子だ。 〈カキ料理構文〉
- (13) a. 袴が江戸時代のズボンだ。 〈指定文〉
 b. 江戸時代は袴がズボンだ。 〈カキ料理構文〉

(第3章(2ab)(3ab)の再掲)

本論文の枠組みにおいて、指定文は「変域の値を指定された名詞句で内包を表示し、それに該当する外延を取り上げる文」と規定される。合成的パラメータ補充が行われている(12)(13)においては、被修飾名詞句が変域の拡張を受けることで、指定文的な意味構造を構成可能になっていると考えられる。

また、合成的パラメータ補充を構成するのは、時間限定や可能世界限定を行う連体修飾要素である。すなわち、特定の意味的性質を持った連体修飾要素は、指定文やカキ料理構文といった一部のコピュラ文の成立に不可欠な成分として機能すると言えるのである。

・第4章「存在文と連体修飾構造」

先行研究の枠組みにおいて、以下のような状態変化的な存在文には言及がなく、理論的な位置付けも困難であった。

- (14) a. くよくよ泣いていた太郎はもういない。
 b. 多くの登山客で賑わった富士山はもうない。
- (15) a. (今の) 太郎は (もう) くよくよ泣いていない。
 b. (今の) 富士山は (もう) 多くの登山客で賑わっていない。

(第4章(7)(8)の再掲)

(14)の存在文は、(15)のように言い換え可能な状態変化的解釈を持っている。このような存在文を、本論文では〈状態変化存在文〉と呼び、連体修飾構造に関わる以下のような記述的特徴があることを確認した。

(16) 〈状態変化存在文〉の記述的特徴

- a. 主語名詞句には連体修飾要素が必須である。
- b. 連体修飾要素は一時的性質を表していなければならない。
- c. 主語名詞句は準可量化名詞句相当でなければならない。

(第4章(17)の再掲)

(16)のような状態変化存在文の連体修飾構造に見られる記述的特徴は、存在文を内包的述語の一種であると位置付けることにより、自然に説明される。本章では、状態変化存在文の主語名詞句を構成する連体修飾構造が「時間領域における内包」を表示することにより、状態变化的な解釈が得られると主張した。

・第5章「可能世界における属性を問題とする述語」

本論文における内包的述語は、項となる名詞句に対してどのような属性を問題にするかという違いから、さらに以下のような下位分類が可能である。

(17) 内包的述語のタイプ分け

タイプⅠ ……名詞句の記述内容を、特定の可能世界と特定の時間領域のいずれかにおける属性として解釈するもの。

タイプⅡ ……名詞句の記述内容を、義務的に特定の可能世界における属性として解釈するもの。

(第5章(33)の再掲)

〈内包的述語：タイプⅠ〉

(18) a. 医者の太郎は真面目だ。 〈非制限的解釈〉

b. 小説家の花子はかっこいい。 〈非制限的解釈〉

〈内包的述語：タイプⅡ〉

(19) a. 私は医者の太郎を思い浮かべた。 〈制限的解釈〉

b. 次郎には小説家の花子など信じられない。 〈制限的解釈〉

(第5章(2)(4)の再掲)

タイプⅠの内包的述語は、連体修飾要素の意味的性質に依存して、可能世界ないし時間領域における属性を問題に出来るかが決定される。一方で、タイプⅡの内包的述語においては、連体修飾要素の意味的性質を問わず、可能世界における属性を問題にすることができる。従って、タイプⅡと共起した連体修飾要素は、語彙的には恒常的性質を表すことしかできない場合であっても可能世界限定を表すものとして解釈され、準可量化名詞句および不可量化名詞句を制限的に修飾することが可能となる。本論文が提示する「外延／内包」といった概念や量化可能性に基づく被修飾名詞句の分類は、このような主節述語と連体修飾構造との意味的な交渉を分析的に捉えられるという点でも有効である。

・第6章「時間領域における属性を問題とする述語」

次のような知覚補文と知覚連体修飾構造の間には、テンス・アスペクト解釈および意味的な曖昧性に関する差異が存在する。

〈知覚補文〉

- (20) a. 花子が部屋にいるのを見た。
b. 太郎が出かけているのを見かけた。
- (21) a. 花子が勉強するのを見た。
b. 太郎が出かけるのを見かけた。

〈知覚連体修飾構造〉

- (22) a. 部屋にいる花子を見た。
b. 出かけている太郎を見かけた。
- (23) a. 勉強する花子を見た。
b. 出かける太郎を見かけた。 (第6章(1)～(4)の再掲)

知覚補文である(20)(21)には主節事態と従属節事態が同時的であるという解釈しか存在しないのに対し、知覚連体修飾構造である(22)(23)には非同時的な解釈が存在する。このような差異は、知覚動詞が時間領域における属性を問題にし

うという点で内包的述語と近似し、外延的文脈と内包的文脈に対応する解釈を有していると考えerことで説明される。すなわち、知覚連体修飾構造は、対象をモノとして知覚したという解釈（「モノ知覚」）だけでなく、対象がある一時的性質を有しているのを知覚したという解釈（「コト知覚」）との間で曖昧である一方、知覚補文は、コト知覚に相当する解釈しか持っていないために、従属節事態と主節事態を同時とする解釈しか得られないのである。

以上、各章の主張の概略を述べた。ここでもう一度、本論文全体の目的を振り返り、そこでの問題提起に対してどのような答えが示されたのか確認しておきたい。

(24) a. 連体修飾要素の機能と被修飾名詞句の指示性との対応関係の体系化
 b. 連体修飾構造の意味的性質が文全体に与える影響の包括的記述
 (第 1 章(5)の再掲)

まず、(24a)について、本論文では、第 2 章において主節述語・被修飾名詞句・連体修飾要素の各分類を通じて、意味的な体系化を試みた。第 2 章で示した以下の表 4 は、連体修飾要素の機能と被修飾名詞句の指示性が、量化の可否や主節述語の意味的性質を介して体系をなしていることを示している。

表 4 名詞句に対する制限的修飾の可否

	外延的文脈	内包的文脈		
		範疇限定	時間限定	可能世界限定
可量化名詞句	×	○	○	○
準可量化名詞句	×	×	○	○
不可量化名詞句	×	×	×	○

(第 2 章表 1 の再掲)

主節述語の意味的性質によって、言語的な環境は大きく外延的文脈と内包的文脈に分けられる。対象が既に特定化されている外延的文脈においては、原則として連体修飾要素は非制限的に解釈される。一方、名詞句を属性的に解釈する内包的文脈においては、連体修飾要素で問題とする属性の意味的性質に基づき、範疇限定・時間限定・可能世界限定という限定の在り方が存在する。これらの連体修飾要素は限定可能な被修飾名詞句の範囲が異なっており、範疇限定は集合指示的な可量化名詞句のみを制限的に修飾可能であるのに対し、時間限定は個体指示的な準可量化名詞句の限定も可能であり、可能世界限定においてはイベント指示的な不可量化名詞句をも制限的に修飾することができる。(24a)の問いに対し簡潔な答えを与えるならば、「連体修飾要素の機能は、それが問題にする内包と被修飾名詞句の量化可能性との間で意味的な体系をなしている」ということができるだろう。

続いて、(24b)については、第3章～第6章で、コピュラ文・存在文といった構文環境や種々の主節述語との関わりにおいて、連体修飾構造がどのような影響を及ぼすのかを分析した。

コピュラ文と存在文においては、その特殊な構文環境から、名詞句の「外延／内包」の問題が複雑な相関を成していると言える。本論文では、指定コピュラ文を「変域の値を指定された名詞句で内包を表示し、それに該当する外延を取り上げる文」と捉えることで、例外的な指定文やカキ料理構文において内包性が関与していることを明らかにした。また、存在文は従来の「空間的存在文／限量的存在文」を、存在文における「外延的文脈／内包的文脈」と読み替えることで、状態変化的な解釈を持つ存在文に、明確な位置付けが与えられると主張した。

さらに、従来指摘されてこなかったことであるが、連体修飾構造は、主節述語の意味的性質に応じてさまざまな解釈をもたらすことが、本論文の議論により明らかとなった。可能世界における属性を義務的に問題にするタイプの述語の項となった場合、連体修飾要素は、その意味的性質と無関係に、可能世界における現れ方を限定するものとして解釈される。一方で、時間領域における属性を問題にする述語の項となった場合には、時間的な限定を行う連体修飾要素しか

埋め込み述部に現れることができない。主節述語と連体修飾要素は、被修飾名詞句を介して、文全体の解釈に影響を及ぼしていると言える。

以上の議論により、(24b)に掲げた本論文の目標は、基本的に達成されたと考える。

2. 本論文の意義

本論文の意義は、主に以下の2点にまとめられる。

- (25) a. 連体修飾および名詞句の文法論的研究に対する貢献
- b. 「文レベルで見た連体修飾」という新しい観点の導入

(25a)について、連体修飾研究には、寺村(1975-1978)、奥津(1974)にはじまる一定の蓄積がある。一方、福田・建石(編)(2016)等でも指摘されるように、名詞句に関わる文法的記述は、動詞句のそれに対して遅れをとっている感は否めない。これは、日本語において、「定／不定」や「単数／複数」といった文法カテゴリーが形態的に現れないことも無関係ではないだろう。本論文は、連体修飾要素と主節述語の意味的分析をしつつ、それを手掛かりとして、名詞句の文中における種々の振る舞いを体系化したものとして位置付けることができる。このような観点からの分析は、今後の連体修飾研究および名詞句研究に、大きく資するものであると考えられる。

また、(25b)については、これまで主節述語と連体修飾構造の相互関係を文レベルの問題として捉え、一定程度の包括性をもって記述しようという試みがそもそもなされてこなかった。しかし、本論文が明らかにしたように、主節述語は連体修飾構造および文全体の解釈と密接な関わりを持っている。連体修飾構造の分析を今後さらに前進させていくためには、被修飾名詞句と連体修飾要素の関係に止まらず、構文環境や述語の意味論といった観点からの分析が不可欠である。本研究の成果により、今後、連体修飾研究および複文研究に対し、このようなアプローチ方法を積極的に応用していく可能性が拓かれたと言える。

3. 今後の課題と展望

本論文で論じきれなかった主な課題として、以下の 3 点を挙げておきたい。これらはまた同時に、本論文の枠組みにおいて今後発展的に取り組むべき問題でもある。

・「強量的な限定」の位置付け

強量的な限定として第 1 章と第 2 章で部分的に言及した、以下のような環境の位置付けについて、本論文の議論は十分ではない。

- (26) a. 何人かの学生がいる中で、言語学を専攻する学生に話しかけた。
b. 同じ本を書店で見かけたが、生協で売られていた本を購入した。
- (26') a. #何人かの学生がいる中で、学生に話しかけた。
b. #同じ本を書店で見かけたが、本を購入した。

(第 2 章(63)(63')の再掲)

- (27) a. 言語学を専攻する学生に話しかけた。
b. 生協で売られていた本を購入した。

- (27') a. 学生に話しかけた。

- b. 本を購入した。(第 2 章(61)(61')の再掲)

強量的な限定は、(26)のような外延的文脈においても明確に制限的な解釈が可能であるという点で、(27)のような環境とは異なっている。これらの対立は、これまで記述的に論じられてこなかったという意味でも重要である。しかし、本論文において、これらの連体修飾構造を明確に位置付けることはできなかった。

外延的文脈であっても、強量的な限定の場合に制限的修飾が可能なのは、おそらく、前提的な集合が導入されることで「補集合の活性化」が生じるためであると考えられる。通常、外延的文脈において、項となる名詞句の対象は特定のであるために「補集合の活性化」が生じないが、前提的な集合が問題にされていれば、外延的文脈であっても「補集合の活性化」が生じるのである。

ただし、この点に関する本論文の考察は十全なものではない。ここで問題にしている前提的な集合がいかなる性質のものであるのかといった点をはじめ、さまざまな論点が残されている。

・ 述語の内包性とアスペクト・テンス・ムード解釈

第2章で「外延的述語／内包的述語」の規定を行った際、これらの述語が最終的に「外延的文脈／内包的文脈」として解釈されるかどうかは、述語の文法的な意味を含めて一般化するべきであるという趣旨の指摘を行った。

(28) a. 近所に住む小学生が歩いている。 (第2章(34a)の再掲)

b. この道でほどよく熟れた柿を拾った。

(29) a. 近所に住む小学生はこの歩道橋を歩く。 (第2章(34b)の再掲)

b. この道でほどよく熟れた柿をよく拾う。

(30) a. 私は心の優しい医師と結婚した。

b. 私は明日心の優しい医師に会う。

c. 心の優しい医師が泣いている。 (第2章(35)の再掲)

(31) a. 私は心の優しい医師と結婚したい。

b. 私は明日心の優しい医師と会うだろう。

c. きっと心の優しい医師が泣いている。 (第2章(36)の再掲)

(32) 述語の持つ内包性と文法的意味の関係

a. 総称的なアスペクト・テンスにおいては、述語の語彙的意味と関係なく内包的文脈が構成可能になる。

b. モダリティ要素によって事態が非現実のものとして解釈された場合、述語の語彙的意味と関係なく内包的文脈が構成可能になる。

(第2章(37)の再掲)

このようなことが起こるのは、総称的なアスペクト・テンスが現れた文やモダ

リティ要素を伴う文が、客観的な事態の描写ではなく、話し手の判断を表しているという点で、内包的述語と共通する意味的素性を獲得するからではないかと考えているが、十分な言語事実は得られていない。文法カテゴリーを含めて述語の内包性を論ずることは非常に重要なテーマである一方、連体修飾構造の意味的分析を主軸とする本論文の射程を大きく超えるものでもある。これらの課題については、今後の研究に委ねたい。

・補文構造との対応

第 6 章でも述べたように、内包的文脈の解釈には、形式的に類似する補文構造との意味的対応関係が認められるように思われる。

〈内包的述語：タイプ I〉

- (29) a. 制服を着ている太郎はかっこいい。
b. 料理を作る花子は魅力的だ。
(29') a. 太郎が制服を着ているのはかっこいい。
b. 花子が料理を作るのは魅力的だ。

〈内包的述語：タイプ II〉

- (30) a. 隣にいる太郎を思い浮かべた。
b. 大人になった花子を想像した。
(30') a. 太郎が隣にいるのを思い浮かべた。
b. 花子が大人になったのを想像した。

(第 6 章(33)(33')(34)(34')の再掲)

(29)(30)および(29')(30')に示したように、内包的文脈の解釈は、しばしば意味的に対応する補文構造を構成することができる。これはすなわち、内包的文脈は「(太郎が) 制服を着ている／(花子が) 料理を作る」という命題に対する信念や評価を叙述することで成立し、定指示名詞句の制限的解釈が得られるということである。

以上の事実、内包的文脈を構成する一部の述語が、単なる指示対象（外延）のみならず、それに対する叙述をも項として取りうるということであり、記述的・理論的に興味深い問題を提起すると思われる。本論文の議論を発展的に深めていくためにも、この点について更なる考究が望まれる。

参考文献

- 天野みどり(2014)「サマ主格変遷構文の意味と類推拡張―「のが」型の主要部
内在型関係節文と接続助詞的な「のが」文―」『和光大学 表現学部紀要』
14, pp. 27-40, 和光大学表現学部.
- 庵功雄(1995)「語彙的意味に基づく結束性について―名詞の項構造との関連か
ら―」『現代日本語研究』2, pp. 85-102, 大阪大学現代日本語学講座.
- 井川壽子(2012)『イベント意味論と日英の構文』くろしお出版.
- 井上和子(1976a)『変形文法と日本語 (上)』大修館書店.
- 井上和子(1976b)『変形文法と日本語・下』大修館書店.
- 井元秀剛(1995)「役割・値概念による名詞句の統一的解釈の試み」『言語文化研
究』21, pp. 97-117, 大阪大学大学院言語文化研究科.
- 井元秀剛(2006)「コピュラ文をめぐる名詞句の意味論と語用論」高岡幸一教授退
職記念論文集刊行会 (編)『シュンポシオン 高岡幸一教授退職記念論文集』,
pp. 13-22, 朝日出版社.
- 大島資生(1988)「連体節内要素の後置について―研究する人がいないんですよ、
後置文を。―」『論集 ことば』刊行会 (編)『論集 ことば』, pp. 19-30 くろ
しお出版.
- 大島資生(1998)「現代日本語における「X の」の諸相」『東京大学留学生セン
ター紀要』8, pp. 43-69, 東京大学留学生センター.
- 大島資生(2010)『日本語連体修飾節構造の研究』ひつじ書房.
- 大島資生(2014)「現代日本語の非制限的連体修飾節の特性について」, 小林賢次・
小林千草 (編)『日本語史の新視点と現代日本語』, pp. 151-164, 勉誠出版.
- 奥津敬一郎(1974)『生成日本文法論』大修館書店.
- 加藤重広(2003)『日本語修飾構造の語用論的研究』ひつじ書房.
- 神尾昭雄(1983)「名詞句の構造」井上和子 (編)『講座現代の言語第 1 巻 日本語
の基本構造』, pp. 77-126, 三省堂.
- 上林洋二(1988)「措定文と指定文―ハとガの一面―」『文藝言語研究 言語篇』

- 14, pp. 57-74, 筑波大学文藝・言語学系.
- 菊地康人(1997)「「カキ料理は広島が本場だ」構文の成立条件」『広島大学日本語教育学科紀要』7, pp. 89-107, 広島大学教育学部日本語教育学科.
- 金水敏(1982)「人を主語とする存在表現—天草版平家物語を中心に—」『國語と國文学』59-12, pp. 58-73.
- 金水敏(1986a)「名詞の指示について」築島裕博士還暦記念会(編)『築島裕博士還暦記念国語学論集』, pp. 467-490, 明治書院.
- 金水敏(1986b)「連体修飾成分の機能」松村明教授古稀記念会(編)『松村明教授古稀記念国語研究論集』, pp. 602-624, 明治書院.
- 金水敏(2002)「存在表現の構造と意味」『近代語研究 第十一集』pp. 473-493, 武蔵野書院.
- 金水敏(2006)『日本語存在表現の歴史』ひつじ書房.
- 金水敏(2015)「「変項名詞句」の意味解釈について」『日中言語研究と日本語教育』8, pp. 1-11.
- 久野暉(1973)『日本文法研究』大修館書店.
- 小屋逸樹(2011)「固有名とカキ料理構文」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』42, pp. 265-287, 慶應義塾大学言語文化研究所.
- 小屋逸樹・辻幸夫(2013)「名詞句の飽和性と見立て—非飽和化の諸相—」『教養論叢』慶應義塾大学法学会 134 pp. 17-33.
- 坂原茂(1990)「役割、ガ・ハ、ウナギ文」, 日本認知科学会(編)『認知科学の発展 第3巻』pp. 29-66, 講談社.
- 澤田治美(1997)「日本語知覚補文のテンスの解釈」川端義明・仁田義雄(編)『日本語文法 体系と方法』, pp. 23-37, ひつじ書房.
- 白井賢一郎(1985)『形式意味論入門—言語・論理・認知の世界—』産業図書.
- ソムキャット・チャウエンギジワニッシュ(2000)「「非限定」の連体修飾節に関する一考察—「眼前描写」の連体修飾節について—」『日本語科学』7, pp. 7-23.
- 坪本篤朗(1992)「現象(描写)文と提示文」『文化言語学 その提言と建設』, pp.

578-564, 三省堂.

坪本篤朗(1993)「関係節と擬似修飾—状況と知覚—」12-2, pp. 76-87.

坪本篤朗(1999)「モノとコトから見た文法—主要部内在型関係節とト書き連鎖—」
『日本語学』18-1, pp. 26-40.

寺村秀夫(1975-1978)「日本語連体修飾のシンタクスと意味 1-4」『日本語・日本文化』第4～7号, 大阪外国語大学 (寺村秀夫(1992)『寺村秀夫論文集 I 日本語文法編』, pp. 157-320, くろしお出版 所収).

寺村秀夫(1980)「名詞修飾部の比較」國廣哲彌 (編)『日英語比較講座 第2巻 文法』, pp. 221-266, 大修館書店.

寺村秀夫(1982)『日本語のシンタクスと意味 I』くろしお出版.

寺村秀夫(1984a)「形容詞の働きには何がひそんでいるか」『國文学—解釈と教材の研究—』29-6, pp. 99-105 學燈社.

寺村秀夫(1984b)『日本語のシンタクスと意味 II』くろしお出版.

寺村秀夫(1992)『寺村秀夫論文集 I 日本語文法編』くろしお出版.

富澤直人(2008)「主要部内在関係節と知覚動詞補部節の統語分析」『言語研究の現在—形式と意味のインターフェース—』, pp. 439-449, 開拓社.

中右実(1980)「テンス、アスペクトの比較」國廣哲彌 (編)『日英語比較講座 第2巻 文法』, pp. 101-155, 大修館書店.

西垣内泰介(2016)「「指定文」および関連する構文の構造と派生」『言語研究』150, pp. 137-171.

西川賢哉(2013)「「NP₁のNP₂」のタイプF」, 西山佑司 (編)『名詞句の世界 その意味と解釈の神秘に迫る』, pp. 65-82, ひつじ書房.

西山佑司(1985)「措定文、指定文、同定文の区別をめぐって」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』17, pp. 135-165, 慶應義塾大学言語文化研究所.

西山佑司(1990)「『カキ料理は広島が本場だ』構文について—飽和名詞句と非飽和名詞句—」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』22, pp. 169-188, 慶應義塾大学言語文化研究所.

西山佑司(1994)「日本語の存在文と変項名詞句」『慶應義塾大学言語文化研究

- 所紀要』26, pp. 115-148, 慶應義塾大学言語文化研究所.
- 西山佑司(2003)『日本語名詞句の意味論と語用論—指示的名詞句と非指示的名詞句—』ひつじ書房.
- 西山佑司(編)(2013)『名詞句の世界 その意味と解釈の神秘に迫る』ひつじ書房.
- 西山佑司(2013)「「ウナ重のお客さん」について」, 西山佑司(編)『名詞句の世界 その意味と解釈の神秘に迫る』, pp. 103-122, ひつじ書房.
- 丹羽哲也(2010)「連体助詞「の」の用法記述のために」『人文研究』61, pp. 81-111, 大阪市立大学大学院文学研究科.
- 丹羽哲也(2011)「連体節と連体「の」との対応」『文学史研究』51, pp. 44-58, 大阪市立大学国語国文学研究室文学史研究会.
- 野田尚史(1982)「「カキ料理は広島が本場だ」構文について」『待兼山論叢』15 pp. 45-66, 大阪大学文学会.
- 野田尚史(1996)『「は」と「が」』(新日本文法選書 1) くろしお出版.
- 福田嘉一郎・建石始(編)(2016)『名詞類の文法』くろしお出版.
- 益岡隆志(1995)「連体節の表現と主名詞の主題性」益岡隆志・野田尚史・沼田善子(編)『日本語の主題と取り立て』, pp. 139-153, くろしお出版.
- 三上章(1953)『現代語法序説—シンタクスの試み—』刀江書院, 1972 復刊, くろしお出版.
- 三上章(1960)『象は鼻が長い—日本文法入門—』1969 改訂増補, くろしお出版.
- 三宅知宏(1996)「日本語の主題素性の照合と句構造」『現代日本語研究』3, pp. 17-34, 大阪大学現代日本語学講座.
- 三宅知宏(2000)「名詞の「飽和性」について」『国文鶴見』35, pp. 89-79, 鶴見大学日本文学会.
- 三宅知宏(1993)「日本語の連体修飾節について」『高度な日本語記述文法書作成のための基礎的研究』, pp. 94-105, 平成4年度科学研究費補助金総合研究(A)研究成果報告書.

- 三宅知宏(2011)『日本語研究のインターフェイス』くろしお出版.
- 三好伸芳(2016a)「状態变化的な解釈を持つ存在文」日本語学会 2016 年度秋季大会.
- 三好伸芳(2016b)「感動文における連体修飾要素の意味的性質」日本語文法学会 第 17 回大会.
- 三好伸芳(2017a)「名詞句の「内包性」と連体修飾」『筑波日本語研究』第 21 号, pp. 115-136, 筑波大学日本語学研究室.
- 三好伸芳(2017b)「制限的連体修飾節のタイプ分け」『日本語文法』17-1, pp. 37-53.
- 三好伸芳(2017c)「連体修飾句の振る舞いから見た内包的述語のタイプ分け」日本言語学会第 154 回大会.
- 三好伸芳(2017d)「カキ料理構文における「X の Z」の意味的性質」『日本語文法』17-2, pp. 81-97.
- Frege, Gothlob(1892) “Ueber Sinn und Bedeutung”, *Zeitschrift für Philosophische Kritik*, vol. c, ss. 25-50 (野本和幸 [訳] (2013) 「意味と意義について」松阪陽一 (編訳)『言語哲学重要論文集』, pp.5-58, 春秋社 所収)

本論文の各章と既発表論文との関係

- ・ 第 1 章 序論

(新規執筆)

- ・ 第 2 章 先行研究および本論文の枠組み

三好伸芳(2017a)「名詞句の「内包性」と連体修飾」『筑波日本語研究』第 21 号, pp. 115-136, 筑波大学日本語学研究室.

三好伸芳(2017b)「制限的連体修飾節のタイプ分け」『日本語文法』17-1, pp. 37-53.

- ・ 第 3 章 コピュラ文と連体修飾構造

三好伸芳(2017d)「カキ料理構文における「X の Z」の意味的性質」『日本語文法』17-2, pp. 81-97.

- ・ 第 4 章 存在文と連体修飾構造

三好伸芳(2016a)「状態变化的な解釈を持つ存在文」日本語学会 2016 年度秋季大会.

- ・ 第 5 章 可能世界における属性を問題とする述語

三好伸芳(2017c)「連体修飾句の振る舞いから見た内包的述語のタイプ分け」日本言語学会第 154 回大会.

- ・ 第 6 章 時間領域における属性を問題とする述語

三好伸芳(2016b)「感動文における連体修飾要素の意味的性質」日本語文法学会第 17 回大会.

- ・ 第 7 章 結論

(新規執筆)